深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第85集

深谷市内遺跡XIV

2007

深谷市教育委員会

深谷市内遺跡XIV

2007

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、南は比企丘陵と接し、北は群馬県と接しています。この広大な市域の間を利根川・荒川という国内でも有数な大河川が貫流しています。

こうした豊かな自然環境のもと、古代人の暮らした足跡が埋蔵文化財として今なお多く眠っています。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡をはじめとして、再葬墓で著名な上敷免遺跡、県指定史跡の鹿島古墳群、榛沢郡家正倉跡と想定される「中宿古代倉庫群跡」や国指定重要文化財「緑釉手付瓶」を検出した西浦北遺跡など、重要な遺跡が多数存在します。

深谷市では、こうした貴重な遺跡群を保護するために鋭意努力してまいりましたが、やむなく破壊を免れない場合には、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成９年度・10年度及び18年度に国庫補助事業として、個人住宅建築並びに個人農地改良工事に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものです。熊野遺跡・西谷遺跡並びに高畑遺跡の調査であり、古代から中世に至る様々な遺構・遺物が検出され、地域史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

本書が学術・教育関係はもとより、文化財に対する保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成19年３月

深谷市教育委員会
教育長　猪野幸男

例　言

1．本書は、平成９年度及び10年度国庫補助事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2．発掘調査の期間及び調査担当者は、下記の通りである。

熊野遺跡108次	平成９年６月12日～平成９年７月11日	宮本直樹
西谷遺跡	平成10年11月19日～平成10年11月30日	鳥羽政之

3．整理・報告書刊行事業は、平成18年度国庫補助事業として実施した。

4．出土品の整理及び図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が行った。

5．本書の執筆は、宮本直樹が担当した。

6．本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡　例

1．発掘調査位置図は岡部町都市計画図（１/2,500及び１/10,000）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（１/25,000）を使用した。

2．遺構実測図は、現場では基本的に１/20、カマド実測図を１/10とし、本書掲載の段階で１/60及び１/30とした。遺物については、基本的に１/３で掲載した。

3．遺物観察表の数値に（　）のあるものは推定値、《　》のあるものは残存値を示す。

※　第Ⅴ章（高畑遺跡）の例言及び凡例については、別に記す。

目　次

序

例言・凡例

Ⅰ　発掘調査に至るまでの経緯
　1．調査に至る経緯……1
　2．調査・整理・報告書刊行の組織……1

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境……4
　1．地理的環境……4
　2．歴史的環境……4

Ⅲ　発見された遺構と遺物……6
　(1)　熊野遺跡108次調査……6
　(2)　西谷遺跡……28

Ⅳ　まとめ……35

Ⅴ　高畑遺跡1次調査……37

挿図目次

第１図　熊野遺跡の範囲と調査地点……２
第２図　熊野遺跡108次調査位置図 ……２
第３図　西谷遺跡の範囲と調査地点……３
第４図　西谷遺跡調査位置図……３
第５図　周辺の遺跡分布……５
第６図　熊野遺跡108次調査全測図 ……７
第７図　１号住居跡実測図……８
第８図　１号住居跡カマド実測図……９
第９図　１号住居跡出土遺物実測図(1)……10
第10図　１号住居跡出土遺物実測図(2)……11
第11図　１号住居跡出土遺物実測図(3)……12
第12図　１号住居跡出土遺物実測図(4)……13
第13図　１号住居跡出土遺物実測図(5)……14
第14図　１号住居跡出土遺物実測図(6)……15
第15図　１号住居跡出土遺物実測図(7)……16
第16図　１号住居跡出土遺物実測図(8)……17
第17図　１号住居跡出土遺物実測図(9)……18
第18図　１号住居跡出土遺物実測図(10)……19
第19図　１号住居跡出土遺物実測図(11)……20
第20図　１号住居跡出土遺物実測図(12)……21
第21図　１号住居跡出土遺物実測図(13)……22
第22図　２号住居跡実測図……25
第23図　２号住居跡出土遺物実測図……26
第24図　１号土坑実測図……27
第25図　１号溝実測図……27
第26図　西谷遺跡全測図……29
第27図　１号住居跡実測図……30
第28図　１号住居跡出土遺物実測図(1)……30
第29図　１号住居跡出土遺物実測図(2)……31
第30図　２号住居跡実測図……32
第31図　２号住居跡カマド実測図……33
第32図　２号住居跡出土遺物実測図(1)……33
第33図　２号住居跡出土遺物実測図(2)……34
第34図　１号土坑実測図……34
第35図　熊野遺跡108次調査区周辺遺構 ……36

写真図版１　熊野遺跡108次検出遺構
２　西谷遺跡検出遺構
３　高畑遺跡１次検出遺構(1)
４　高畑遺跡１次検出遺構(2)
５　熊野遺跡108次出土遺物(1)
６　熊野遺跡108次出土遺物(2)
７　熊野遺跡108次出土遺物(3)
８　熊野遺跡108次出土遺物(4)
９　西谷遺跡出土遺物

Ⅰ　発掘調査に至るまでの経緯

1．調査に至る経緯

本報告の発掘調査は、国庫補助事業として平成９年に実施した熊野遺跡108次と平成10年度に実施した西谷遺跡である。いずれも個人住宅建築に先立ち実施したものであり、土地所有者の協力の下、必要最小限の措置を講じたものである。

以下、発掘調査に至る経緯を事業ごとに記す。

(1)　熊野遺跡（県登録番号№63-017）は、JR岡部駅のすぐ北西に立地し、東西約1,300m、南北約1,000mを測る大規模な遺跡である。

平成元年、遺跡内に『岡中央土地区画整理事業』が立ち上がり、これに伴う発掘調査が急増し、現在までに162次に及ぶ。また、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団も４次に亘る発掘調査を実施している。

平成９年５月に埋蔵文化財の所在についての照会文書が、茂木信義氏（以下「事業主」と記す）から旧岡部町教育委員会（以下「町教委」と記す）に提出された。町教委は、開発予定地が熊野遺跡内であることを回答し、遺跡の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。

その後事業主より試掘調査依頼書が提出されたため、町教委が試掘調査を実施したところ、遺構の存在が明らかとなった。

このため遺構の保存で調整を進めたが、開発の変更が困難なため、発掘調査を実施することとなった。そこで、文化財保護法57条の２に基づく埋蔵文化財発掘届が、平成９年６月９日付けで事業主より文化庁長官に提出された。これを受けた町教委は、文化財保護法98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を翌10日に提出した。

(2)　西谷遺跡（県登録番号№63-030）は、櫛挽台地の北西に位置し、北流する藤治川が山崎山を大きく東へ迂回する地点の右岸に立地する。縄文時代草創期の土器が散在していたことで、早くから県内外において注目されてきた。

平成10年８月31日付けで、埋蔵文化財の所在についての照会文書が、大嶋きよ子氏から町教委に提出された。これを受けて町教委は、開発予定地が西谷遺跡内であることを書面で回答し、遺跡の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。10月15日に事業主より試掘調査依頼書が提出されたため、町教委が試掘調査を実施したところ、遺構の存在が明らかとなった。

このため、遺構の保存で調整を進めたが、開発の変更が困難なことから、発掘調査を実施することとなった。そこで、文化財保護法57条の２に基づく埋蔵文化財発掘届が、平成10年11月18日付けで事業主より文化庁長官に提出された。町教委は、文化財保護法98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同日に提出した。

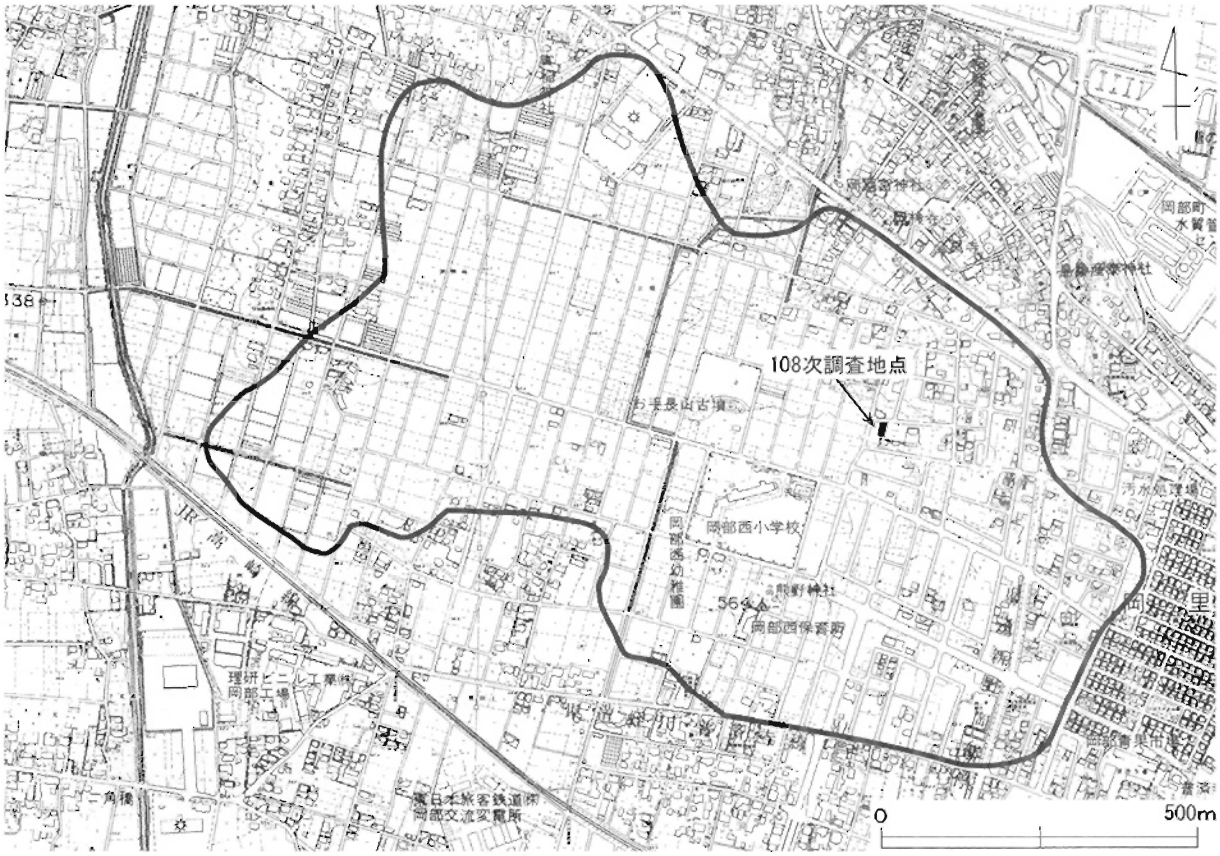
2．調査・整理・報告書刊行の組織

(1)　発掘調査（平成10年度）

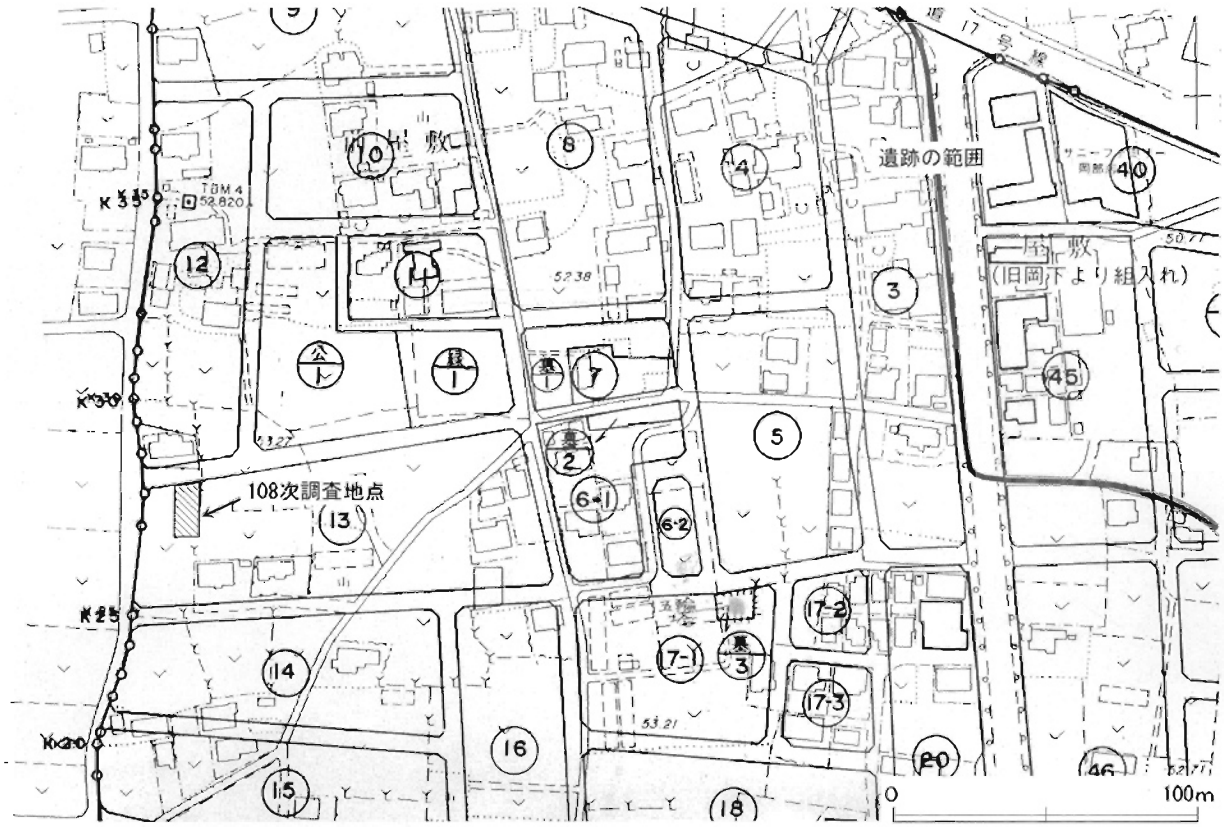
岡部町教育委員会	教育長	大野福治
	文化財保護室長	今井　宏
	室次長	米沢信男
	係長	新井芳雄
	主任	鳥羽政之
	〃	宮本直樹
	臨時職員	竹野谷俊夫
	〃	今村直樹
	〃	佐藤由江
	〃	布施みゆき

(2)　整理・報告書刊行（平成18年度）

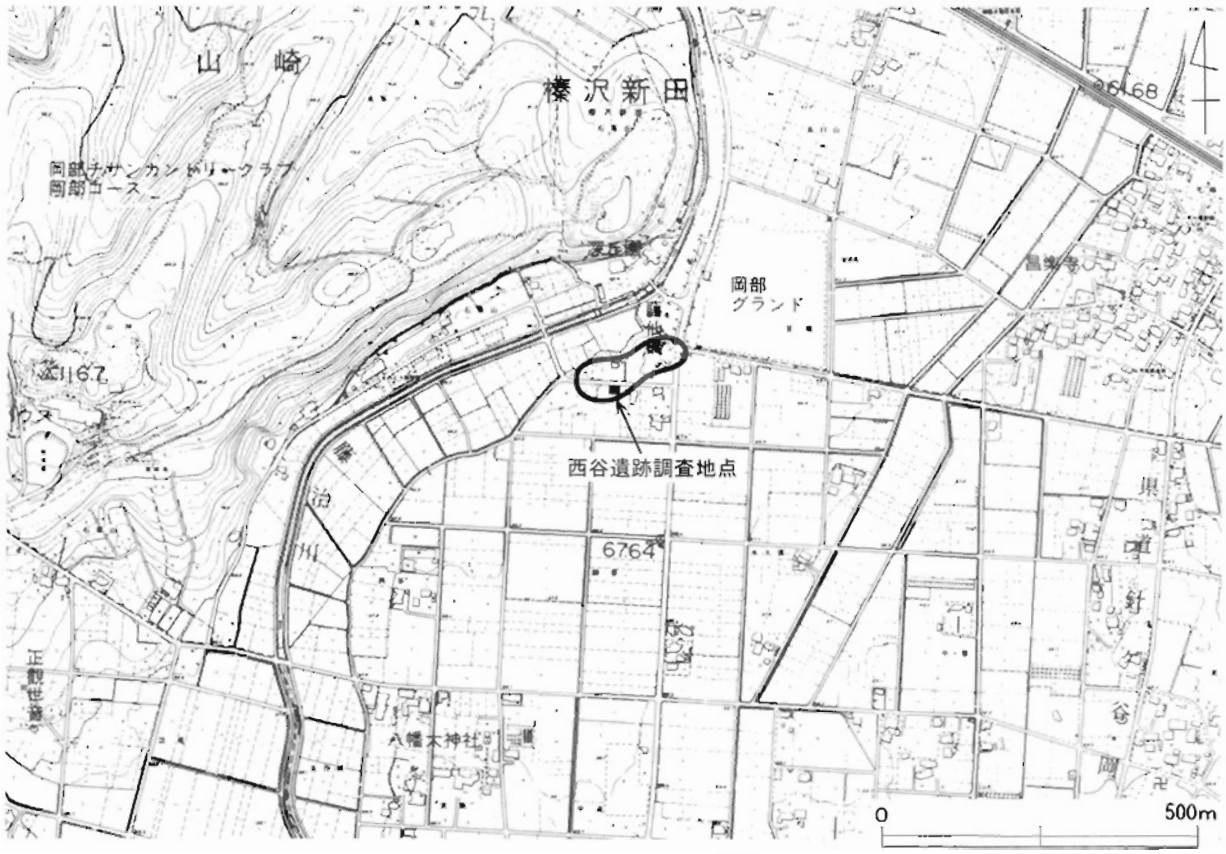
深谷市教育委員会	教育長	猪野幸男
	教育次長	古川国康
	次長	中村信雄
同岡部教育事務所	所長	柳田一郎
	課長補佐	鈴木八十子
	主査	金井登美子
	〃	根岸　宏
	〃	鳥羽政之
	〃	森田富雄
	〃	宮本直樹
	臨時職員	竹野谷俊夫
	〃	黒澤　恵
	〃	佐藤由江
	〃	布施みゆき



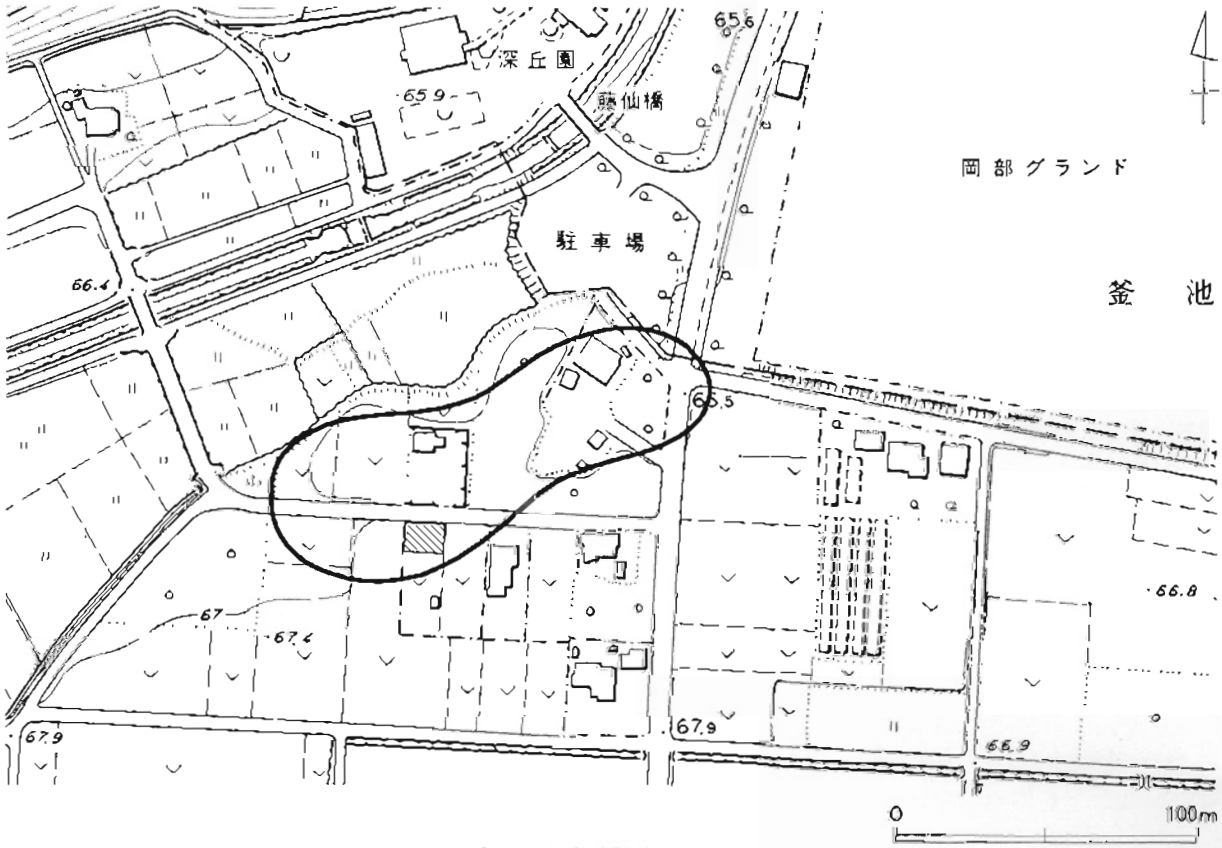
第１図　熊野遺跡の範囲と調査地点



第２図　熊野遺跡108次調査位置図



第３図　西谷遺跡の範囲と調査地点



第４図　西谷遺跡調査位置図

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境

1．地理的環境

深谷市は、埼玉県の北部に位置し、北は利根川を挟んで群馬県と接する。

熊野遺跡は、深谷市岡字熊野他に所在する。JR岡部駅の北西に位置し、東西1,300m、南北1,000mの範囲に及ぶ。近年は市街化が進んでいる。

遺跡は、櫛挽台地の北部に立地する。南方には標高116mの山崎山とこれに連なる諏訪山が存在する。遺跡の中心から600m北は崖線となり、比高差20mをもって妻沼低地へ移行する。また、櫛挽台地の西は藤治川により区分され、本庄台地と接している。

2．歴史的環境

熊野遺跡の立地する櫛挽台地北部は、早くから開発が進み、これらに伴う発掘調査の結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から押圧縄文・爪形文土器などが検出され、草創期の土器として注目されてきた。遺構では、四十坂遺跡で前期の竪穴住居跡が、水窪遺跡や菅原遺跡から中期の住居跡が、上宿遺跡で後期の敷石住居跡が検出されている。

弥生時代では、四十坂遺跡より縄文晩期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。その後、平成２年の発掘調査では、再葬墓や土壙墓群が検出された。

古墳時代に至ると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五領～和泉期に至る方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連綿と墳墓が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鋲留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から５世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、６世紀代には、やはり首長墓と想定される寅稲荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・愛宕山古墳（方墳）と順次南東方向へ移動しながら単独で築造されたことが認められる。

この他に、熊野遺跡の東に接する白山古墳群では、６世紀代の古墳跡24基（円墳23、帆立貝式古墳１）が調査された。弾琴埴輪や壺を捧げ持つ巫女の埴輪など６体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土した。

なお、櫛挽台地北部における古墳時代の集落は、現在のところ中宿遺跡や上宿遺跡など数か所が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛挽台地以外に分布の中心が認められる。

奈良～平安時代になると、様相は一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如集落が営まれる。これまでに162次に及ぶ調査が実施され、700軒を超える竪穴住居跡、150棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・連房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、円面硯・帯金具・唐三彩の陶枕・刻字紡錘車・陶製仏殿・置きカマドなど他の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

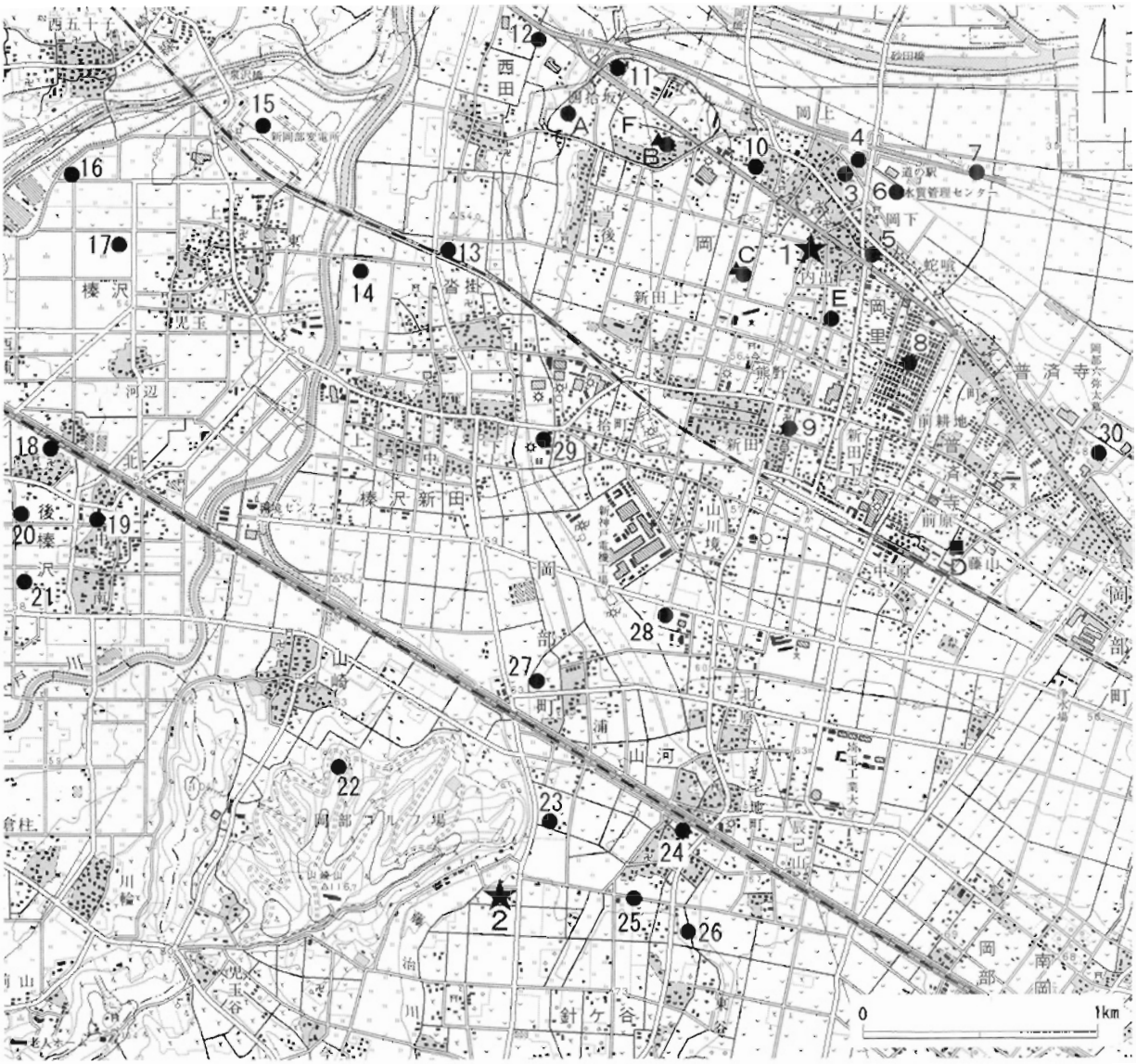
なお、集落の開始時期は、131次調査１・２号竪穴住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、７世紀第３四半期と考えられている。さらに、１次調査において検出された７間×３間をはじめとする大型建物の存在から、該期の熊野遺跡は初期評家と想定されている。

また、櫛挽台地縁辺部に位置する中宿遺跡からは、大規模な総柱式建物跡20棟が規則的に配置された状態で検出された。榛沢郡衙に伴う正倉跡と推定され、７世紀後半の成立であることから熊野遺跡との関連が想定される。これと前後して台地直下には「滝下大溝」が掘削された。その北側には条里遺構が検出されたことから、灌漑と運河の機能を併せ持っていたことが考えられる。

さらに、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡では、８世紀第２四半期と考えられる蓮華文軒丸瓦などの瓦が多量に出土する範囲があり、廃寺跡と推測されてきた。平成13年度に町教委が実施した確認調査により、版築された基壇状遺構が検出された。近接する住居跡からは、「榛」の刻字瓦や「寺」と墨書された土師器坏なども出土し、寺院跡の可能性が高まった。

このように、奈良～平安時代の櫛挽台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

古代から中世にかけては、まず岡部六弥太館跡があげられる。方形に廻る堀跡や井戸、土壙墓などが検出された。同様な堀跡は、熊野遺跡と白山遺跡からも検出され、館跡に付属するものと推定されている。西龍ヶ谷遺跡では、軸を揃えて並んだ６棟の掘立柱建物群が確認された。



1．薫野遺跡　（律令期集落・官衙・中世居館）
2．西谷遺跡　（縄文）
3．中宿遺跡　（郡衙正倉・律令期集落）
4．滝下遺跡　（河川跡・律令期集落）
5．岡廃寺　（寺院跡・古墳～律令期集落）
6．岡部条里遺跡　（古墳集落・条里水田・律令期居宅）
7．砂田前・樋詰遺跡（古墳～平安集落）
8．白山遺跡　（古墳群・律令期集落・中世居館）
9．新田遺跡　（律令期集落）
10．上宿遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
11．四十坂遺跡　（縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群）
12．原ケ谷戸遺跡　（縄文・古墳集落・古墳群）
13．水窪遺跡　（縄文・古墳集落・周溝墓・古墳群）
14．新井遺跡　（律令期集落）
15．六反田遺跡　（古墳・中世集落）
16．大寄遺跡　（縄文・弥生～律令期集落）
17．西浦北遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
18．東光寺裏遺跡　（縄文・平安集落）
19．榛沢六郎成清館跡（中世）
20．石磚遺跡　（古墳～平安集落・周溝墓）
21．地神祇遺跡　（古墳～平安集落）
22．千光寺遺跡　（古墳群・平安集落）
23．茶臼山遺跡　（古墳群）
24．伝上杉館跡　（中世）
25．中原遺跡　（縄文・古墳・奈良～平安）
26．東谷遺跡　（縄文）
27．山河聖天社　（中世）
28．西龍ヶ谷遺跡　（律令期集落・中世居館）
29．下道南遺跡　（縄文・古墳・奈良～平安）
30．伝岡部六弥太館跡（中世）
A．四十坂浅間山古墳（円墳）
B．寅稲荷塚古墳　（前方後円墳）
C．お手長山古墳　（帆立貝式古墳）
D．前原愛宕山古墳　（方墳）
E．内出八幡塚古墳　（円墳）
F．四十塚古墳群　（古墳群）

第５図　周辺の遺跡分布

Ⅲ　発見された遺構と遺物

(1)　熊野遺跡108次調査

①　発掘調査の経過

熊野遺跡第108次調査地点は、深谷市岡字前屋敷3011番地１（岡中央土地区画整理事業地内13街区２画地）である。

周囲は、区画整理事業及び個人住宅建築等により発掘調査が実施されてきた。近接して31次・66次・69次・70次・78次調査区などが位置する。調査区中央での標高は、54.8mを測る。

発掘調査は、平成９年６月12日から７月11日にかけて実施した。発掘調査面積は、約348㎡である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から30cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、竪穴住居跡２軒、溝１条、土坑、ピット多数を確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、各遺構の掘り下げを開始した。途中、１号住居跡から多量の土器が出土したのをはじめ、他の遺構からも遺物が検出された。そこで、出土状況の写真撮影に続いて図化作業を行い、ナンバーリングを行いながら遺物を取り上げた。

土層断面図の作成は、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。土層断面図・平面図ともに1/20の縮尺で実測した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより、発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

②　遺構と遺物

調査で検出された遺構は、奈良～平安時代の竪穴住居跡２軒、時期不明の土坑１基、溝１条、ピット８である。

【１号住居跡】

調査区の東端に位置する。１号溝と重複し、切り合い関係から、１号溝の方が新しいことが確認されている。

東半部が調査区域外にあるため、全容は不明である。規模は、短軸で4.62m、長軸は5.50m以上を測る。主軸方位は、N-37°-Wである。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、40cmほどを測る。壁溝は、確認できた範囲では全周した。

カマドは、北壁の北東コーナー寄りで検出された。ただし燃焼部から煙道にかけて撹乱により破壊されている。袖は粘土の造り付けで、長さは左袖94cm、右袖65cm以上を測る。両袖先端部の内側に、補強材として平坦な石が使用されていた。また、燃焼部中央から支脚として用いられた円柱形の石も検出された。

土坑は２基が検出され、いずれも不整円形を呈する。１号土坑は、直径117cm、深さ27cmを測る。２号土坑は、直径95cm以上、深さ76cmである。ただし、断面観察により２号土坑は住居埋没後に掘削されたことが確認された。

ピットは大小合わせて７基が検出された。いずれも平面形態は円形を呈し、規模は、直径16～72cmである。

遺物は、覆土上層から床面まで、多量に出土した。土器では土師器の坏・皿・甕・小型甕・台付甕、須恵器の蓋・坏・平瓶・長頸瓶・短頸壺・甕、手捏土器がある。このほかに、鉄製の鎌・刀子、土錘、磨石、編物石などがあった。

【２号住居跡】

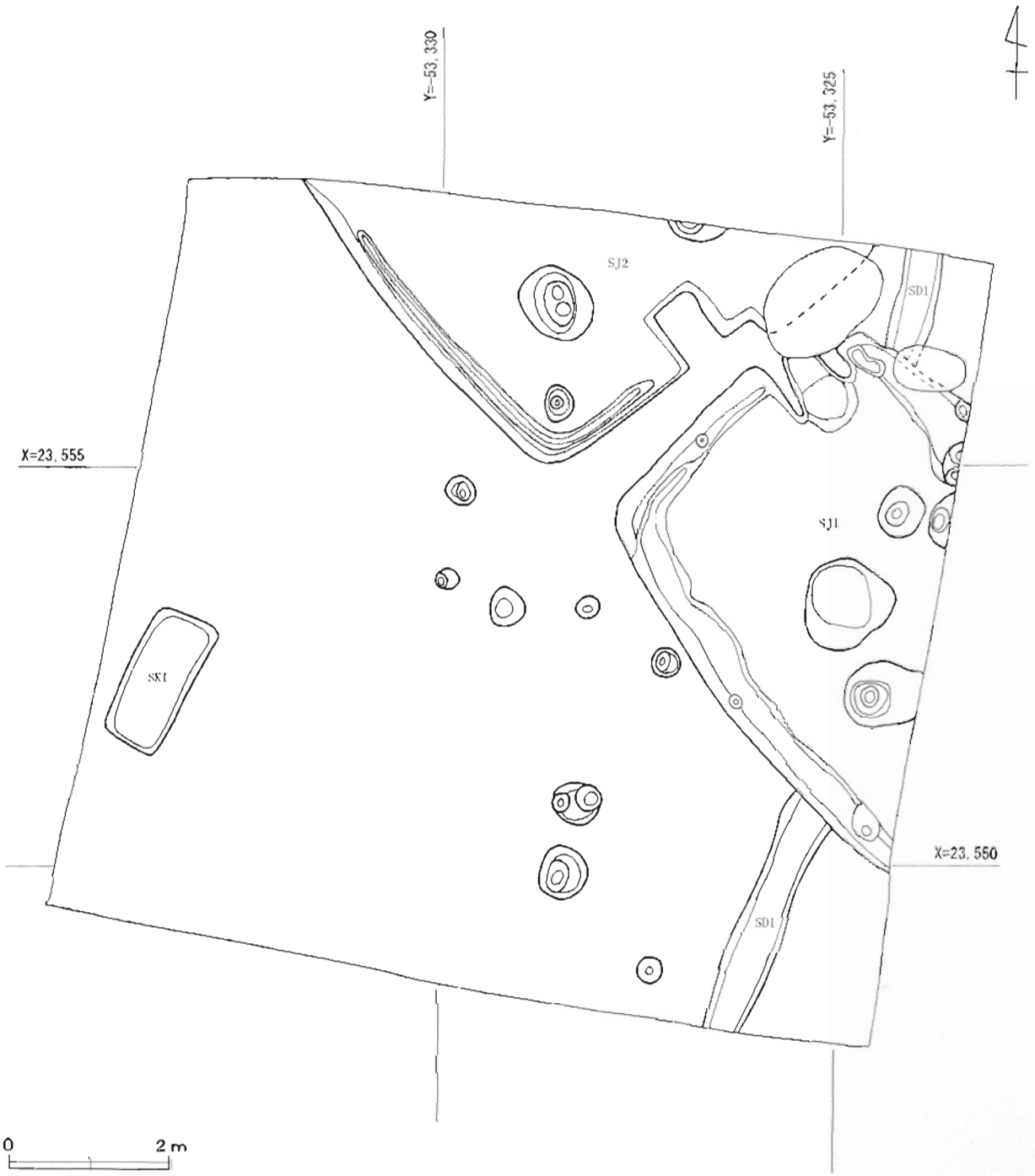
調査区の北端に位置する。

北半部が調査区域外にあるため、規模は不明である。確認できたのは、東西4.65m、南北4.86mの範囲である。平面形態は、方形ないし長方形であると考えられる。ただし南壁中央付近の84cm四方の範囲で地山が残されており、結果的に住居内部に張出す格好となっていた。

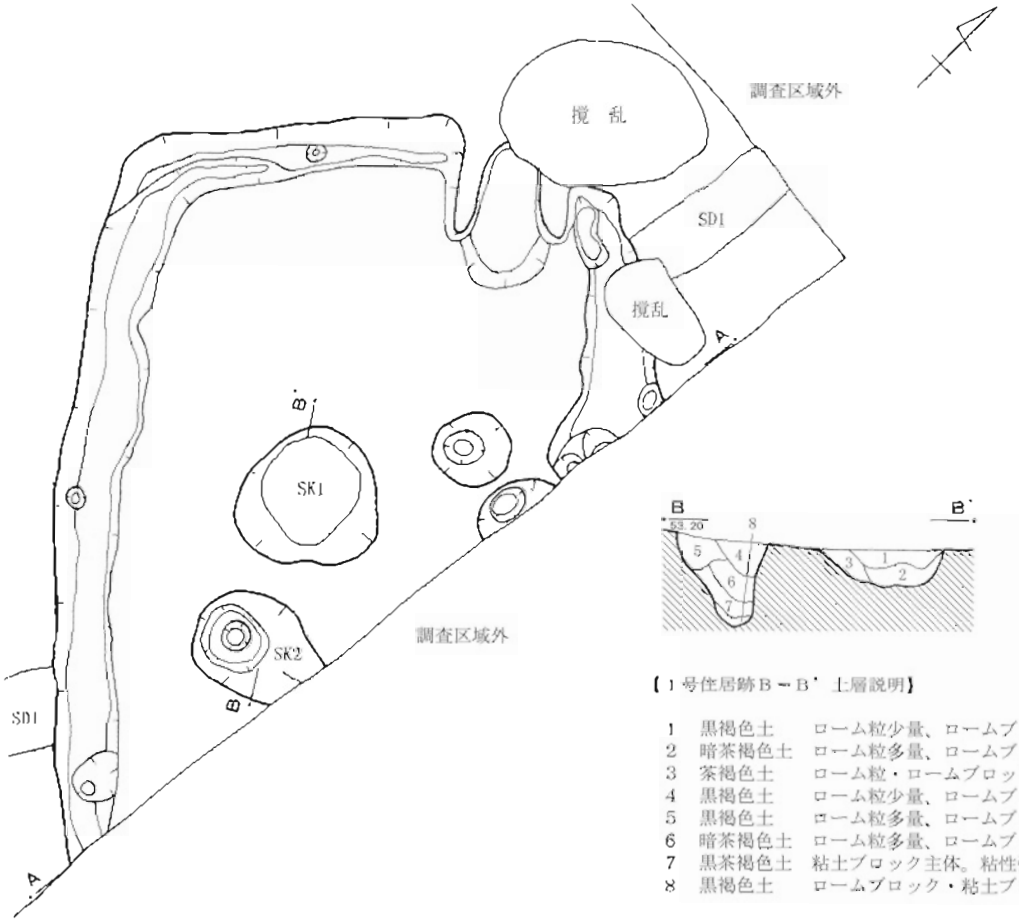
壁は角度をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、25cmほどを測る。壁溝は、東壁と南壁で確認できたが、それ以外は不明である。

土坑は２基が検出され、いずれも不整円形を呈する。１号土坑は、直径100cm、深さ50cmを測る。２号土坑は北半部が調査区域外にあるため全容は不明であるが、直径78cm以上、深さ30cm以上である。

ピットは、南コーナーにおいて１基が検出された。直径49cm、深さ37cmである。

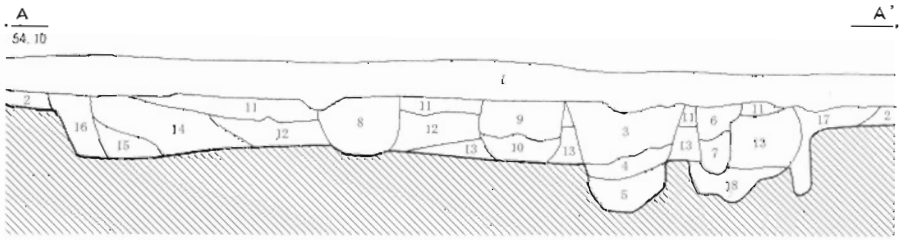


第６図　熊野遺跡108次調査全測図



【１号住居跡Ｂ－Ｂ' 土層説明】

1	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
2	暗茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
3	茶褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。
4	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
5	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロック微量含む。
6	暗茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
7	黒茶褐色土	粘土ブロック主体。粘性強い、しまりやや弱い。
8	黒褐色土	ロームブロック・粘土ブロック少量含む。

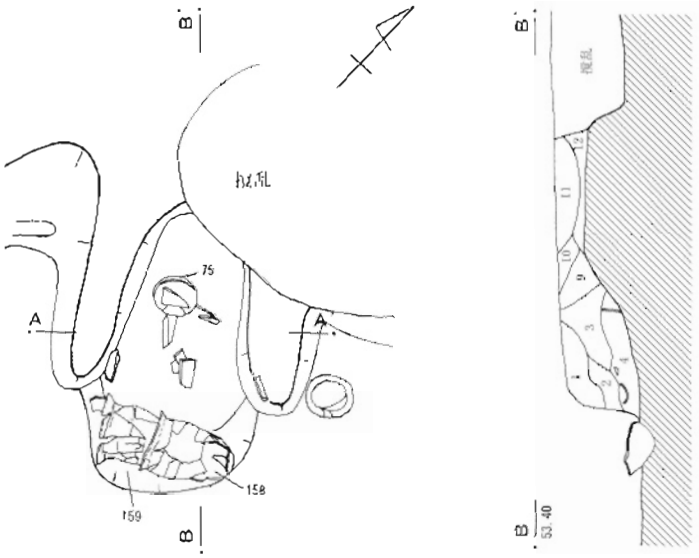


【１号住居跡Ａ－Ａ' 土層説明】

0　2m

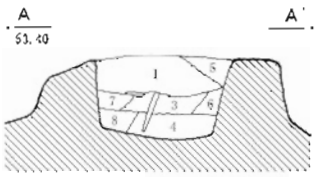
1	暗褐色土	ローム粒少量、Ａ軽石微量含む。
2	茶褐色土	ローム粒多量含む。
3	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック・焼土粒微量含む。
4	暗茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
5	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量含む。
6	黒褐色土	ローム粒を少量含む。
7	黒褐色土	ローム粒を微量含む。
8	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
9	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック・粘土粒・焼土粒微量含む。
10	黒褐色土	ローム粒・焼土粒微量含む。
11	暗褐色土	ローム粒少量、焼土粒微量含む。
12	茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック・焼土粒微量含む。
13	暗茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック微量含む。
14	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロックを少量含む。
15	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
16	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロック少量含む。
17	暗茶褐色土	ローム粒を少量含む。
18	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロックを少量含む。

第７図　１号住居跡実測図



【1号住居跡カマド土層説明】

1	暗茶褐色土	ローム粒少量含む。
2	暗茶褐色土	ローム粒微量含む。
3	暗茶褐色土	焼土粒多量含む。
4	暗茶褐色土	粘土少量、ローム粒微量含む。
5	黒褐色土	ローム粒・焼土粒微量含む。
6	暗茶褐色土	焼土粒・粘土ブロック多量含む。粘性あり。
7	暗茶褐色土	焼土粒多量、粘土ブロック少量含む。
8	黒褐色土	焼土粒多量、ロームブロック少量含む。
9	暗茶褐色土	焼土粒・粘土ブロック多量含む。
10	暗茶褐色土	焼土粒少量含む。
11	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
12	黒褐色土	ローム粒少量含む。



第８図　１号住居跡カマド実測図

カマドは、調査範囲内では検出されなかった。

遺物は、覆土上層から床面まで、多量に出土した。土師器の坏・皿・甕・台付甕・甑、須恵器の蓋・坏・脚付盤・甕、手捏土器などがある。

【１号土坑】

調査区の南西に位置する。

平面形態は長方形を呈し、長軸180cm、短軸80cmを測る。主軸方位は、N-27°-Eを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、55cmを測る。

遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土したが、図示しえるものはなかった。

【１号溝】

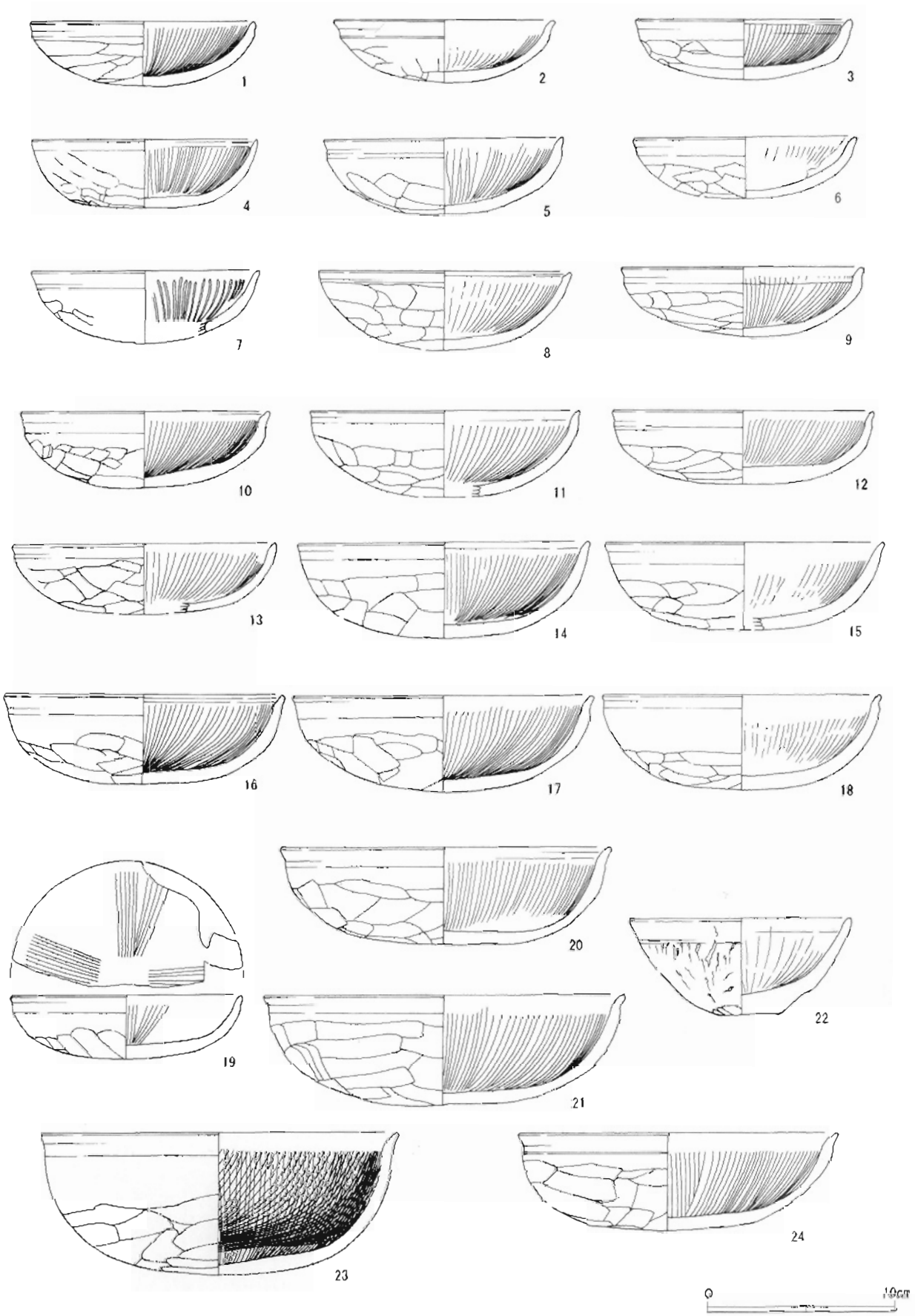
調査区の東部を南北に走行する。１号住居跡と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しいことが判明している。また、両端が調査区域外に延びているため、全長は不明である。

確認された長さは10.1mで、走行方位はN-22°-Eを示す。確認面での幅は64cmを測るが、深さは5cmと浅い。断面形態は皿状を呈する。

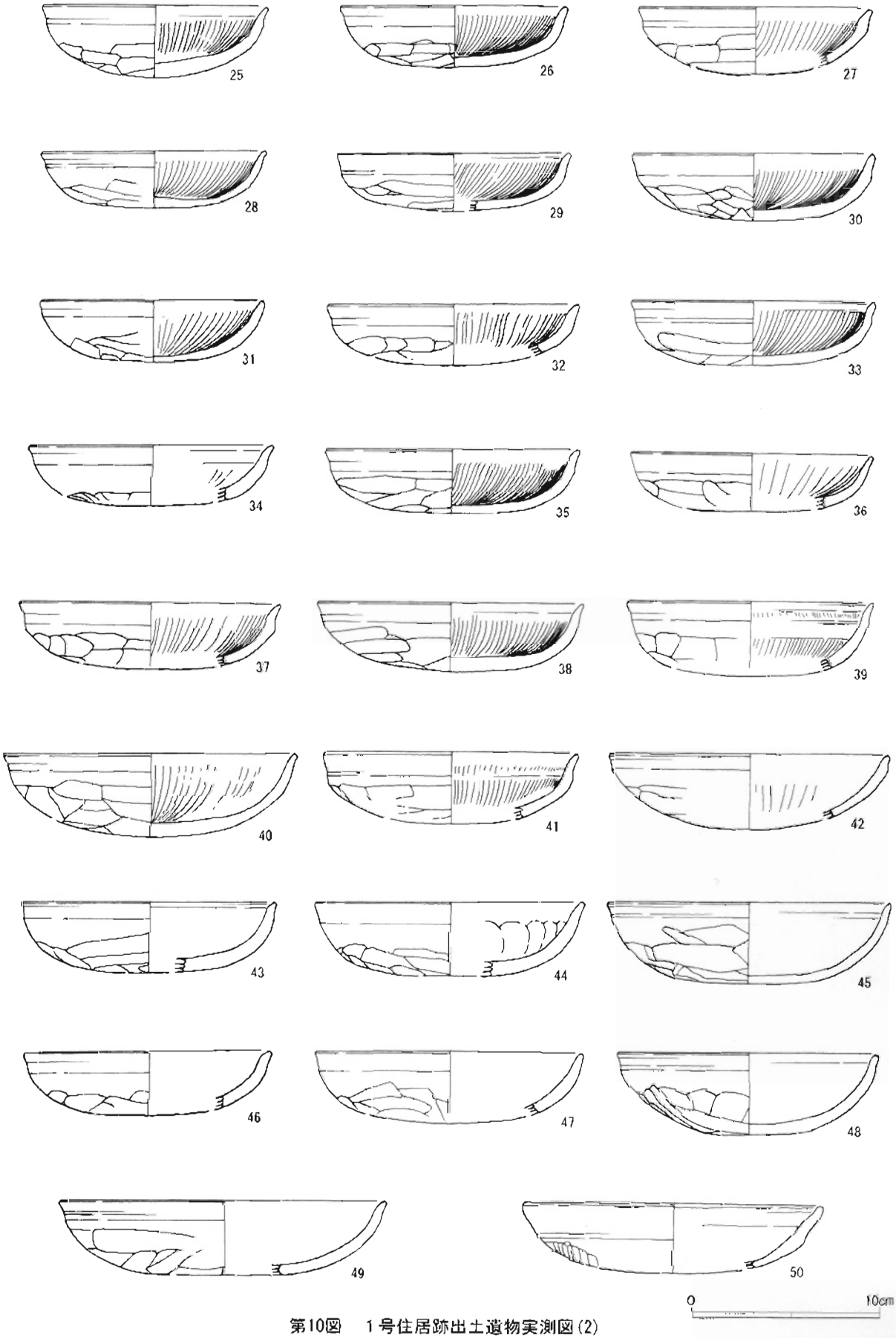
遺物は、図示しえるものはなかった。

③　まとめ

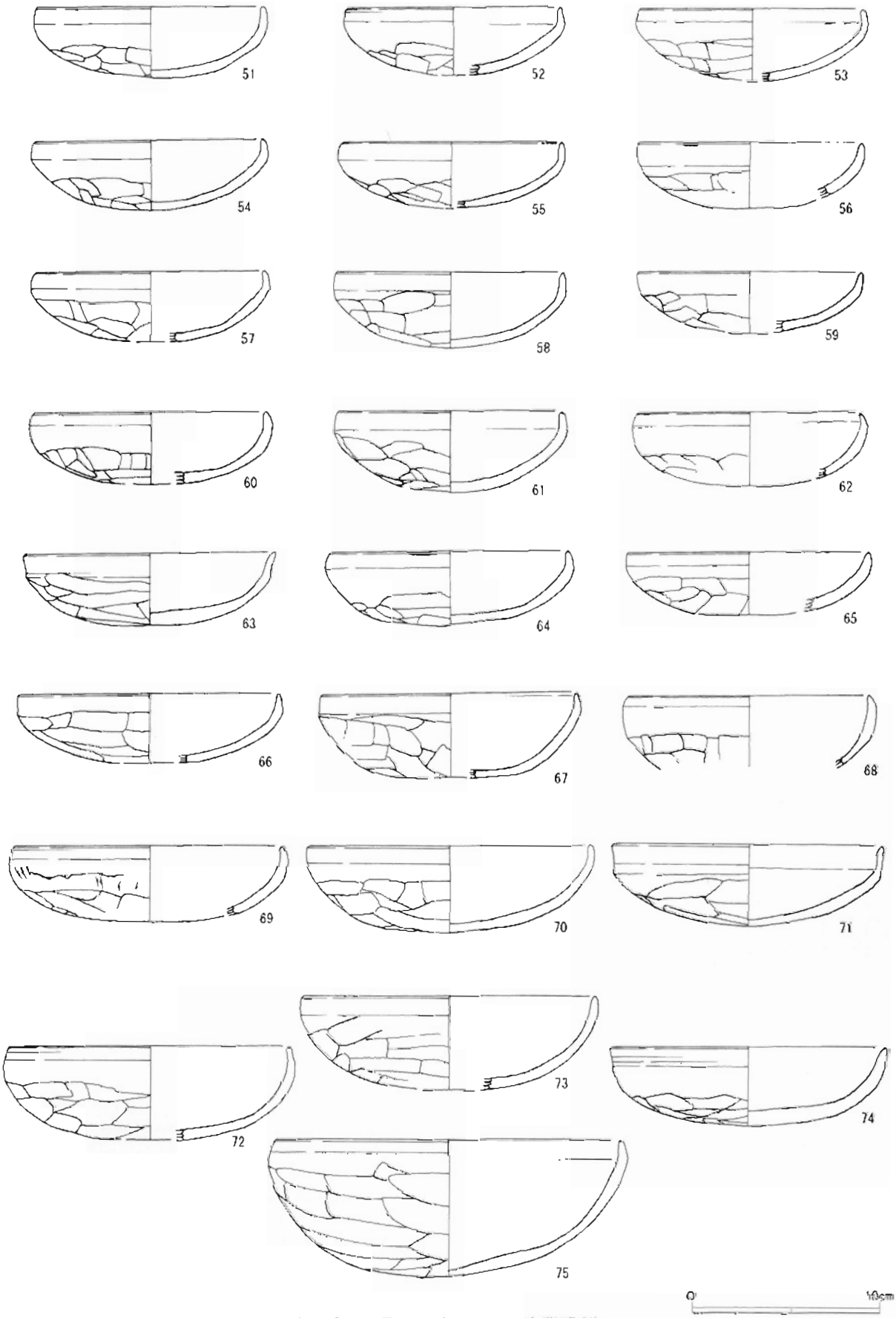
１号住居跡から土器の良好な一括資料が得られた。７世紀後半～８世紀初頭の時期である。



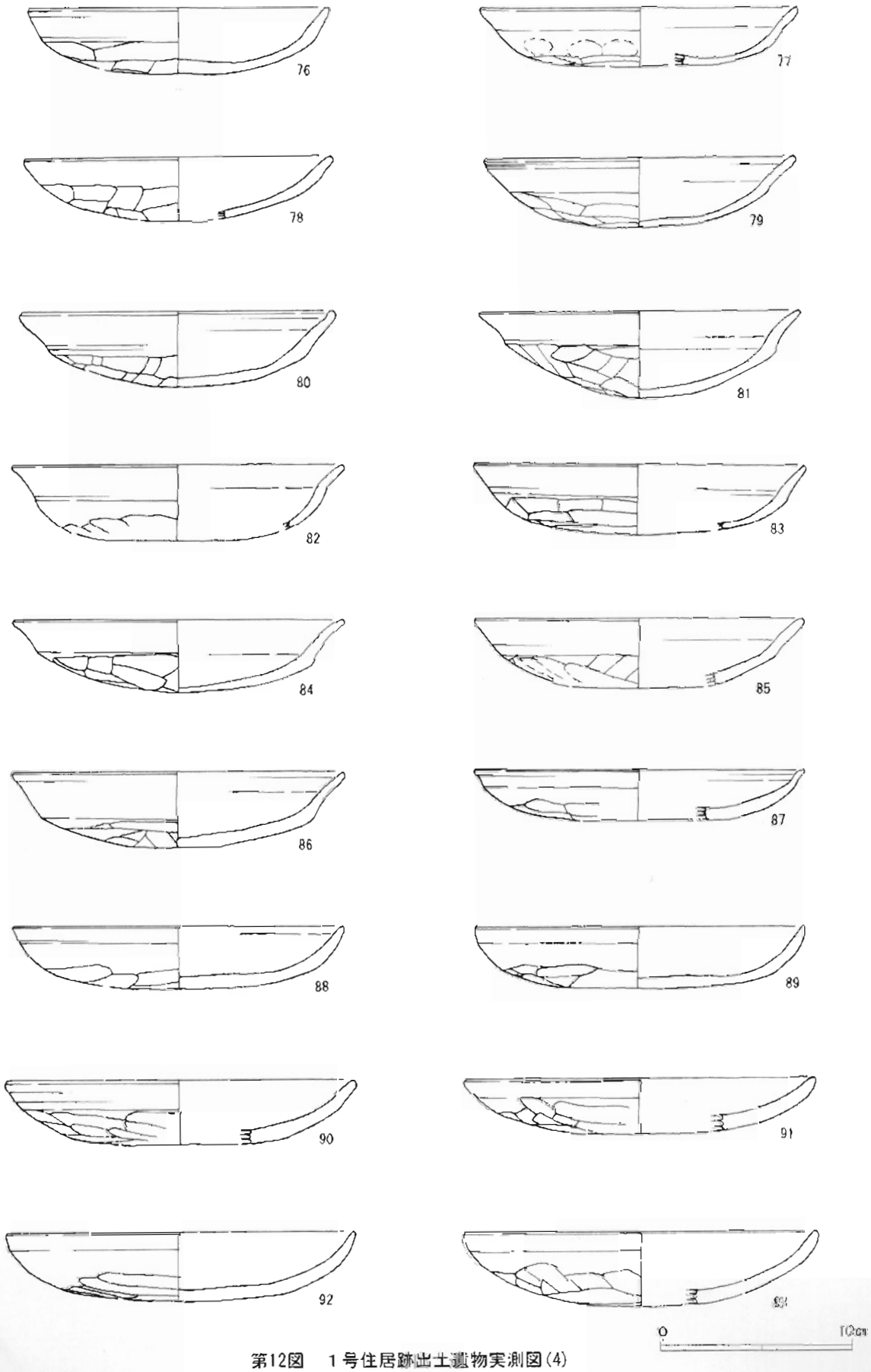
第９図　１号住居跡出土遺物実測図(1)



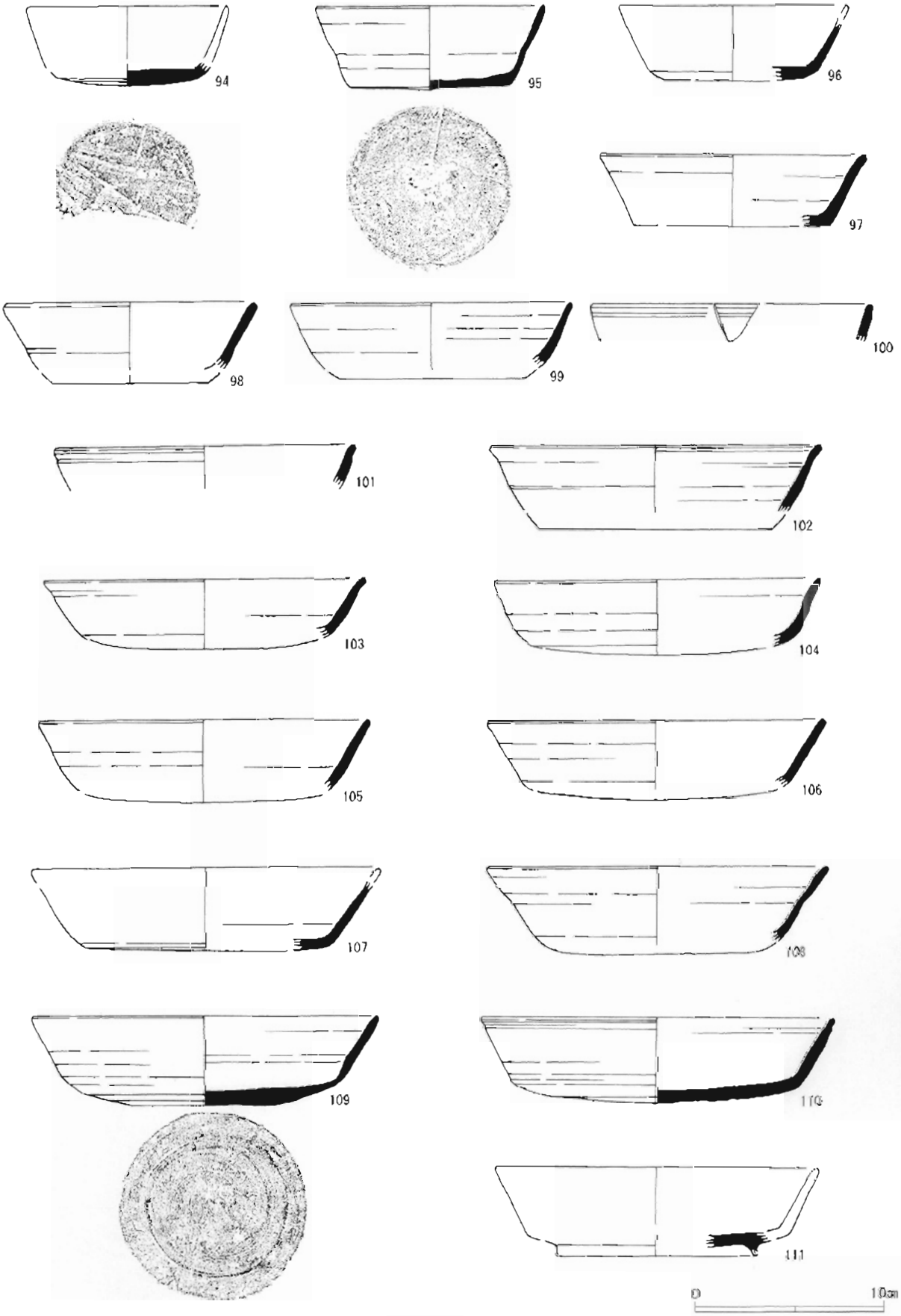
第10図　1号住居跡出土遺物実測図(2)



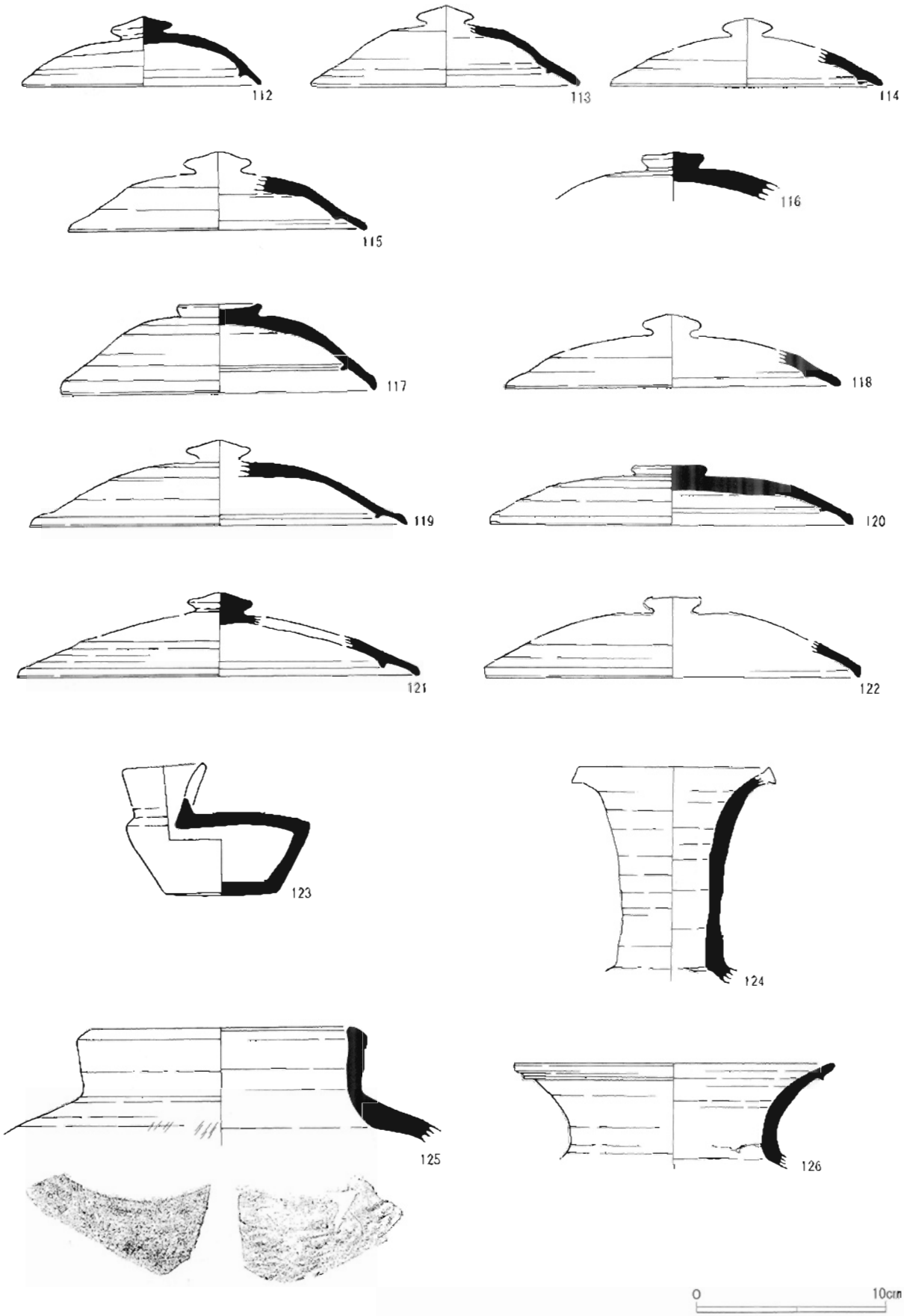
第11図　1号住居跡出土遺物実測図(3)



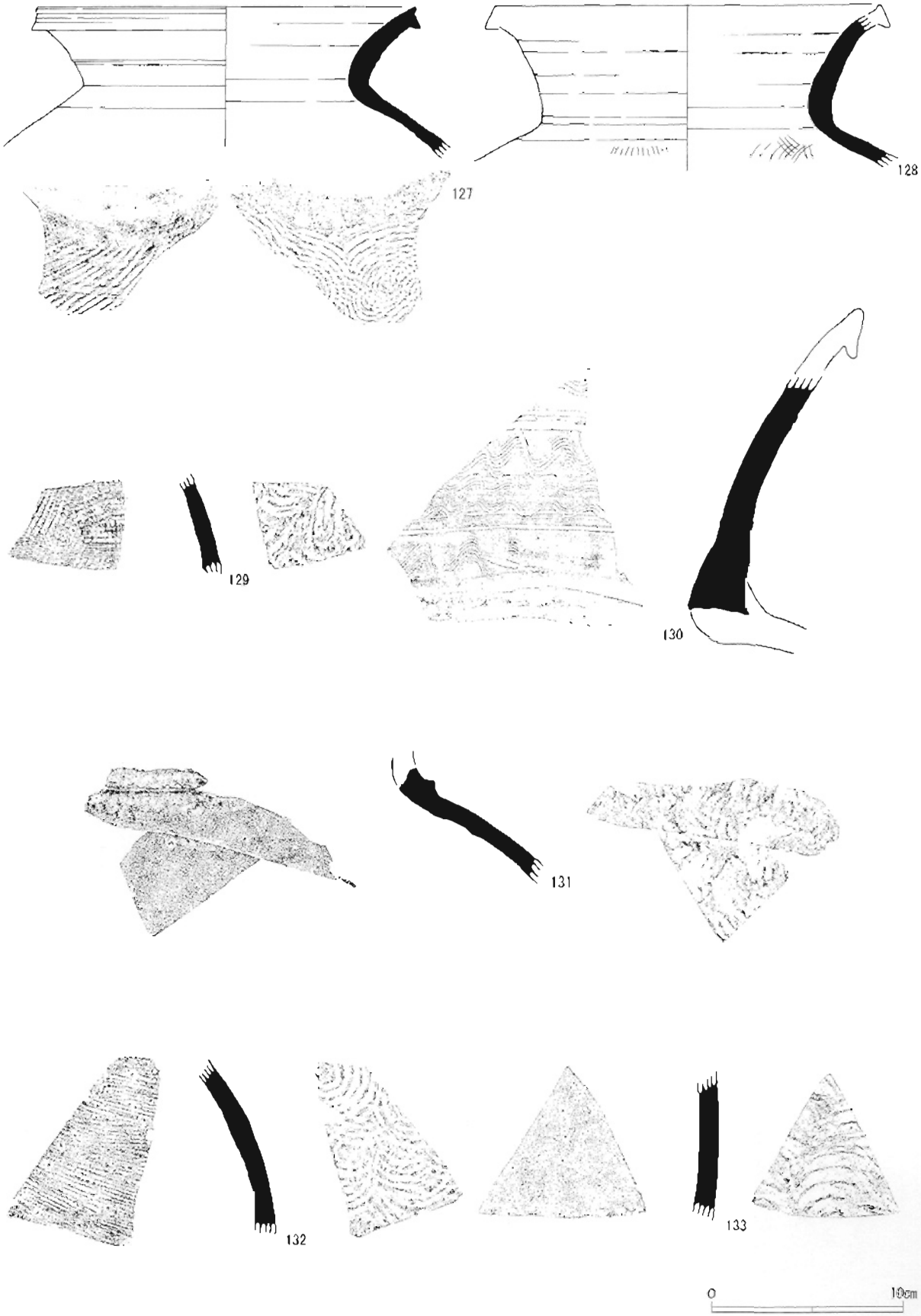
第12図　1号住居跡出土遺物実測図(4)



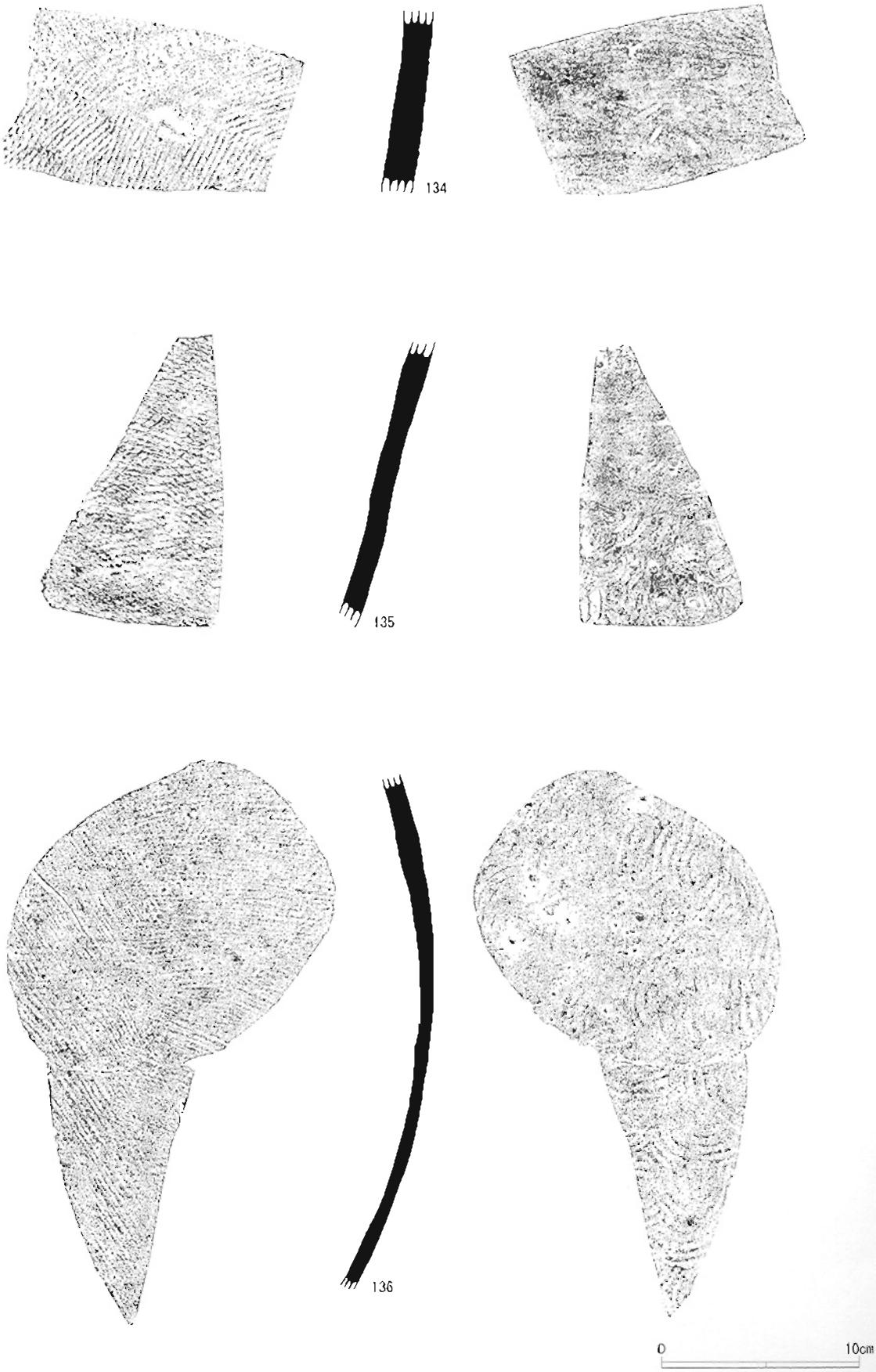
第13図　1号住居跡出土遺物実測図(5)



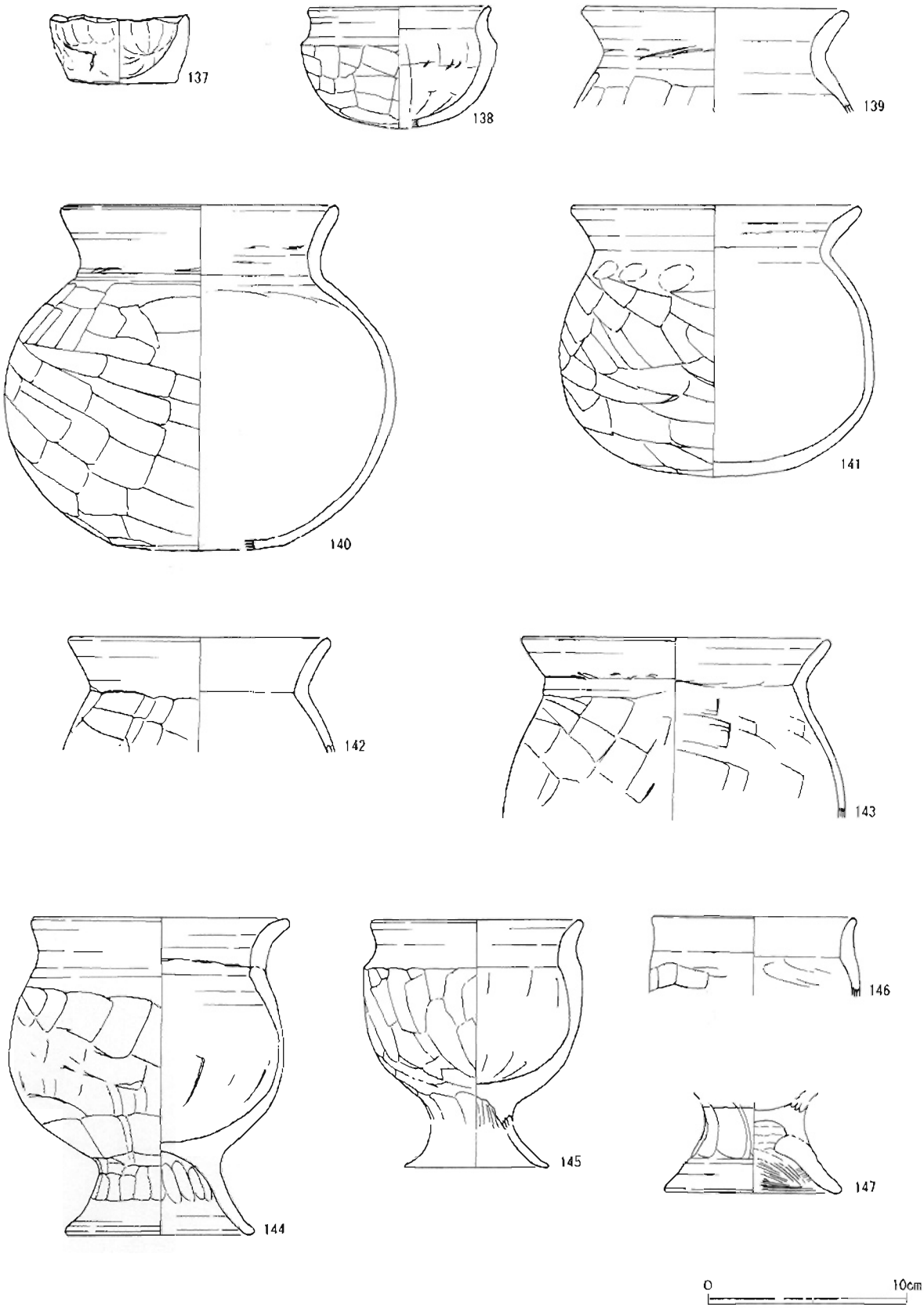
第14図　1号住居跡出土遺物実測図(6)



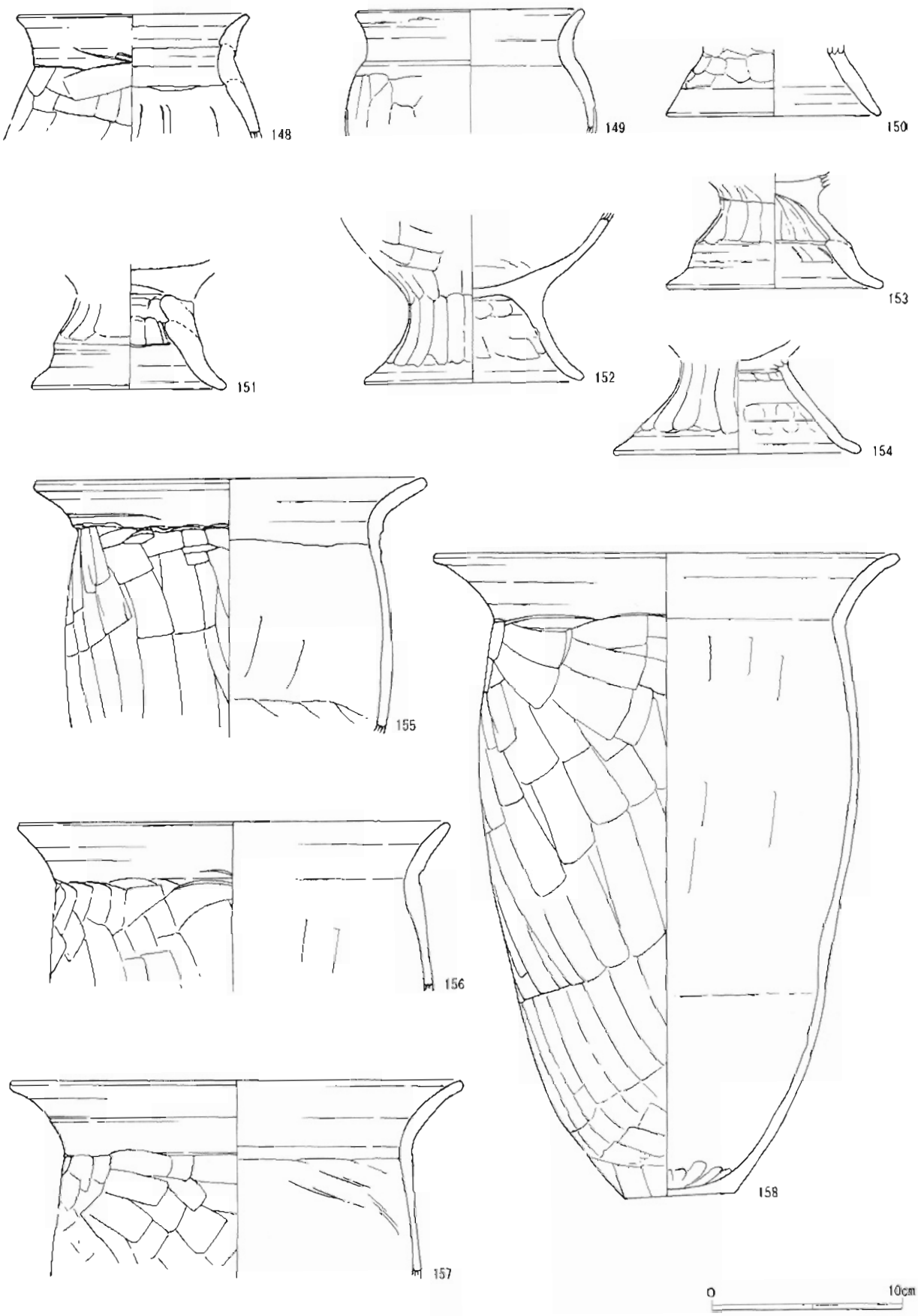
第15図　1号住居跡出土遺物実測図(7)



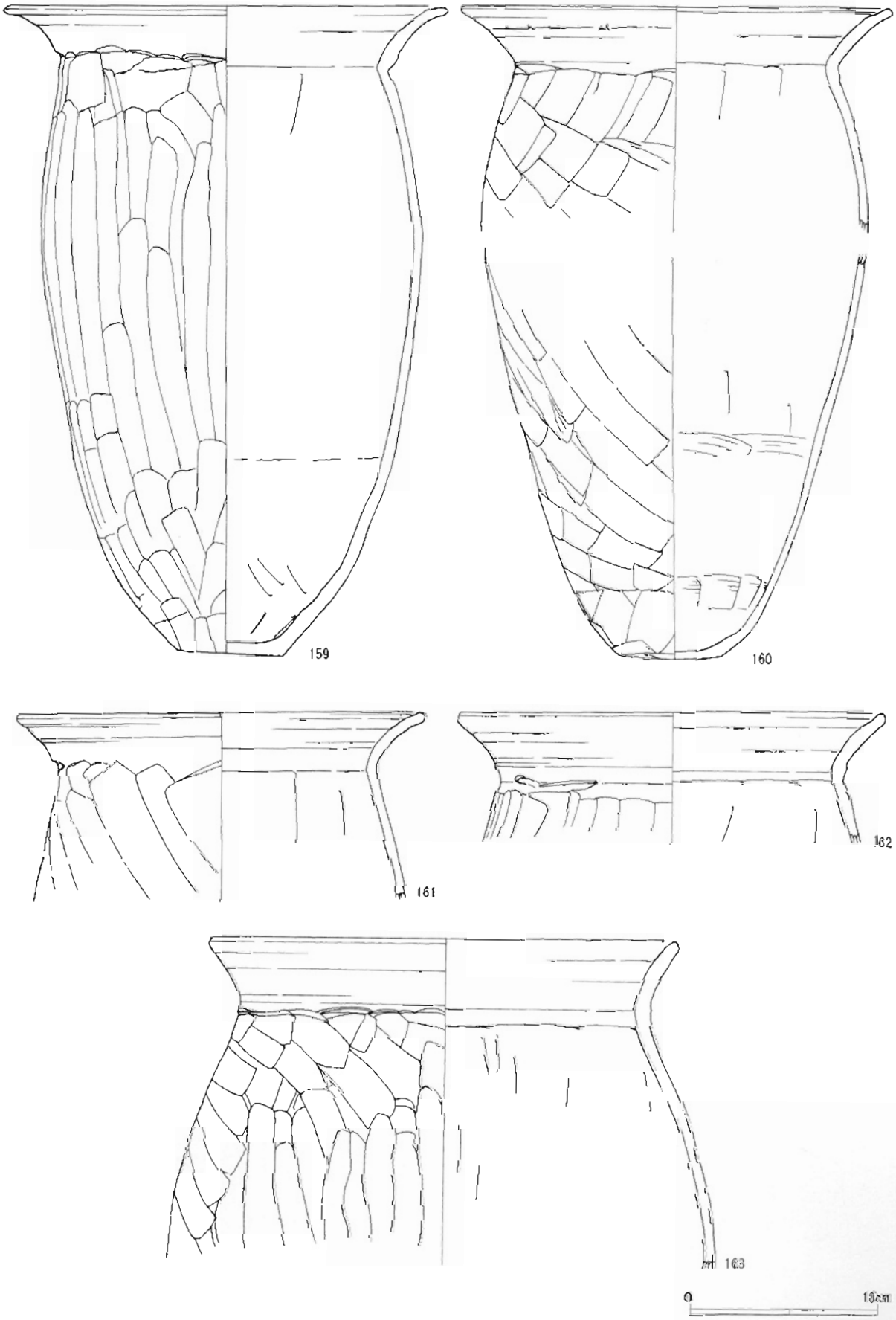
第16図　1号住居跡出土遺物実測図(8)



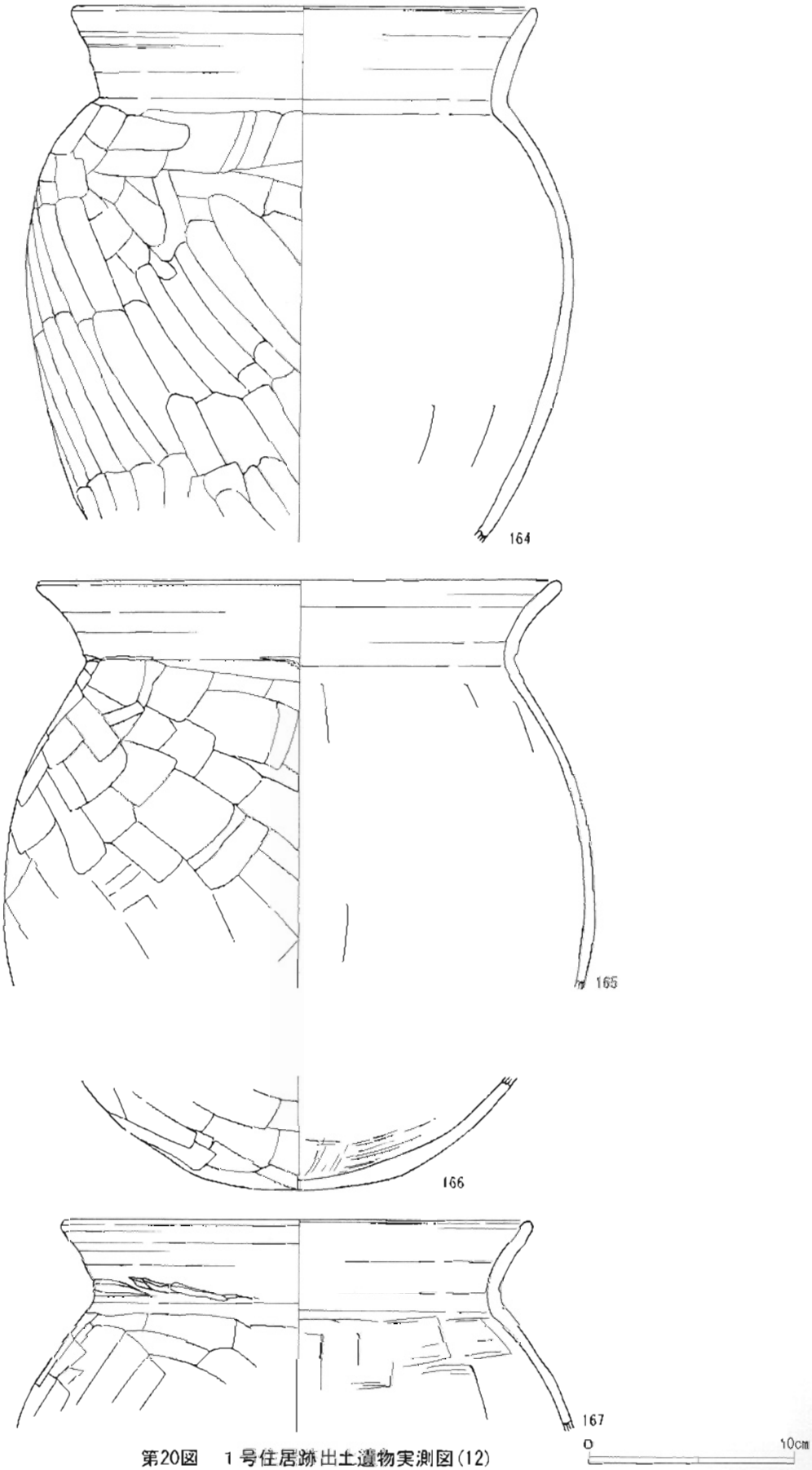
第17図　1号住居跡出土遺物実測図(9)



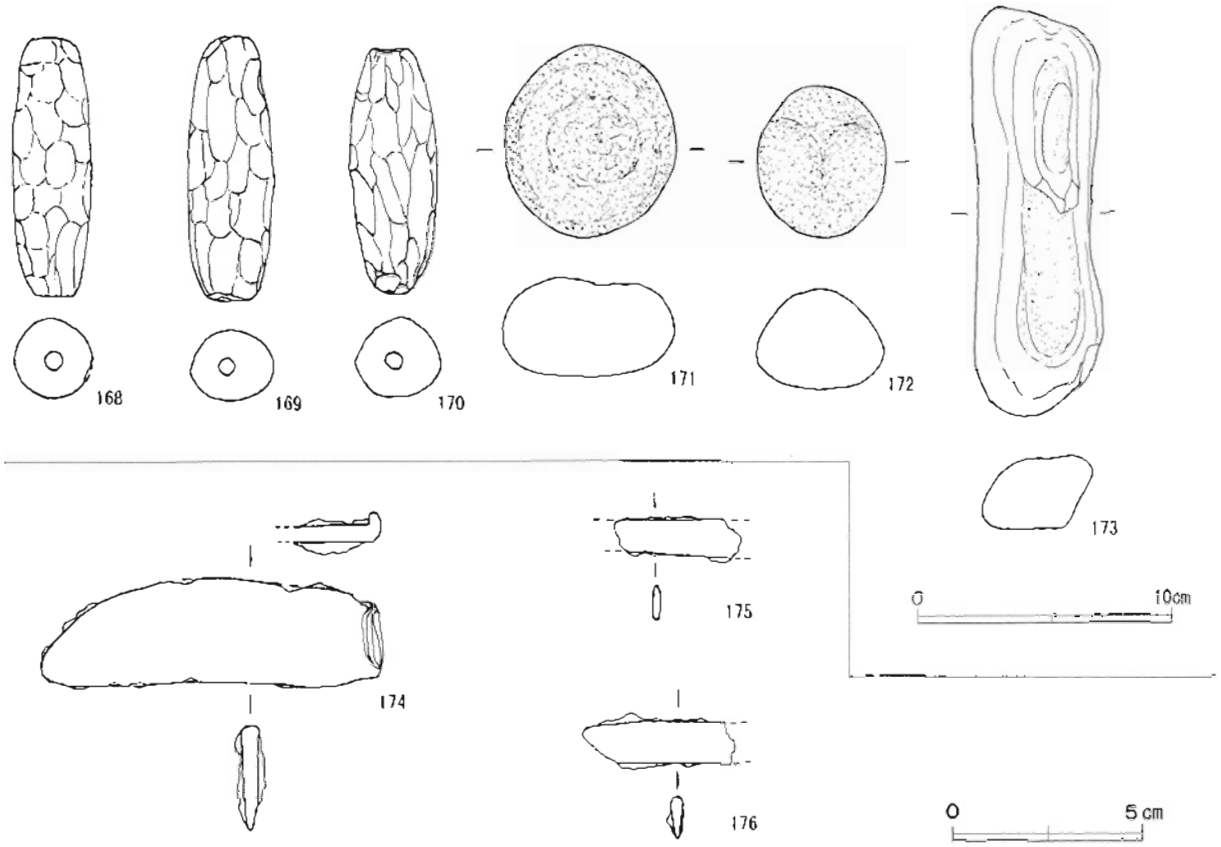
第18図　1号住居跡出土遺物実測図(10)



第19図　1号住居跡出土遺物実測図(11)



第20図　1号住居跡出土遺物実測図(12)



第21図　1号住居跡出土遺物実測図(13)

1号住居跡出土遺物観察表　(1)

番号	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色　調	焼　成	胎　土	残存率	備　考
1	坏	11.9	3.5	－	明赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	95%	覆土、内面放射状暗文
2	坏	(11.7)	3.3	－	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	20%	覆土、内面放射状暗文
3	坏	11.4	3.2	－	黄赤～赤褐	普通	石英、角閃石、微砂粒	70%	覆土、内面放射状暗文
4	坏	(11.9)	3.7	－	黄橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	35%	覆土、内面放射状暗文、歪みあり
5	坏	(12.7)	4.0	－	淡黄赤色	普通	石英、角閃石、微砂粒	35%	覆土、内面放射状暗文
6	坏	11.8	3.3	－	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	75%	覆土、内面にタール付着、磨滅あり
7	坏	(12.0)	(3.8)	－	赤褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	図示15%	覆土、内面放射状暗文
8	坏	(13.3)	4.2	－	明黄赤色	普通	石英、角閃石、微砂粒	45%	覆土、暗文、磨滅あり、口唇部凹む
9	坏	12.8	3.7	－	橙褐色	普通	石英、角閃石	90%	覆土、内面放射状暗文
10	坏	13.2	4.1	－	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒、赤色粒	80%	覆土、内面放射状暗文
11	坏	(14.2)	(4.6)	－	黄橙色	普通	石英、角閃石、赤色粒	図示30%	覆土、内面放射状暗文
12	坏	(13.9)	3.9	－	明赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	35%	覆土、内面放射状暗文
13	坏	(14.0)	3.7	－	橙褐色	良好	石英、角閃石	図示20%	覆土、放射状暗文、油脂状黒斑付着
14	坏	(15.5)	5.1	－	黄橙～灰黒	普通	石英、角閃石、微砂粒	55%	覆土＋1住SK-1、放射状暗文、磨滅
15	坏	(14.8)	(4.7)	－	黄橙色	やや悪	石英、角閃石、赤色粒	図示35%	覆土、内面放射状暗文、磨滅あり
16	坏	(14.8)	4.7	－	橙～黒褐	普通	石英、角閃石、微砂粒	60%	覆土、内面放射状暗文
17	坏	15.9	5.1	－	黄橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	85%	覆土、内面放射状暗文
18	坏	(14.8)	5.0	－	黄橙～灰黒	普通	石英、角閃石、赤色粒	30%	覆土、内面放射状暗文
19	坏	(12.2)	3.4	－	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	45%	覆土、内面十字状の放射状暗文
20	坏	17.5	5.2	－	黄橙～灰黒	普通	石英、角閃石、微砂粒	80%	覆土、内面放射状暗文、磨滅あり
21	坏	(19.0)	5.8	－	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	35%	覆土、内面放射状暗文
22	坏	(11.7)	5.2	－	灰黒～黄灰	不良	石英、角閃石、赤色粒	80%	覆土、放射状暗文、雑な造り
23	坏	18.9	7.6	－	橙褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	50%	覆土、内面交叉暗文
24	坏	(16.8)	5.2	－	黄橙～灰黒	普通	石英、角閃石、微砂粒	50%	覆土、内面放射状暗文、歪みあり
25	坏	(11.9)	3.9	－	赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	35%	覆土、放射状暗文、内面剥離あり
26	坏	12.0	3.3	－	黄赤～黄褐	普通	石英、長石	70%	覆土、内面放射状暗文
27	坏	(12.3)	(3.6)	－	黄褐色	やや悪	石英、角閃石、チャート	図示25%	覆土、内面放射状暗文
28	坏	(11.9)	3.0	－	赤褐色	普通	石英、角閃石、赤色粒	25%	覆土、内面放射状暗文
29	坏	(12.3)	3.1	－	暗黄赤色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示30%	覆土、内面放射状暗文

1号住居跡出土遺物観察表 (2)

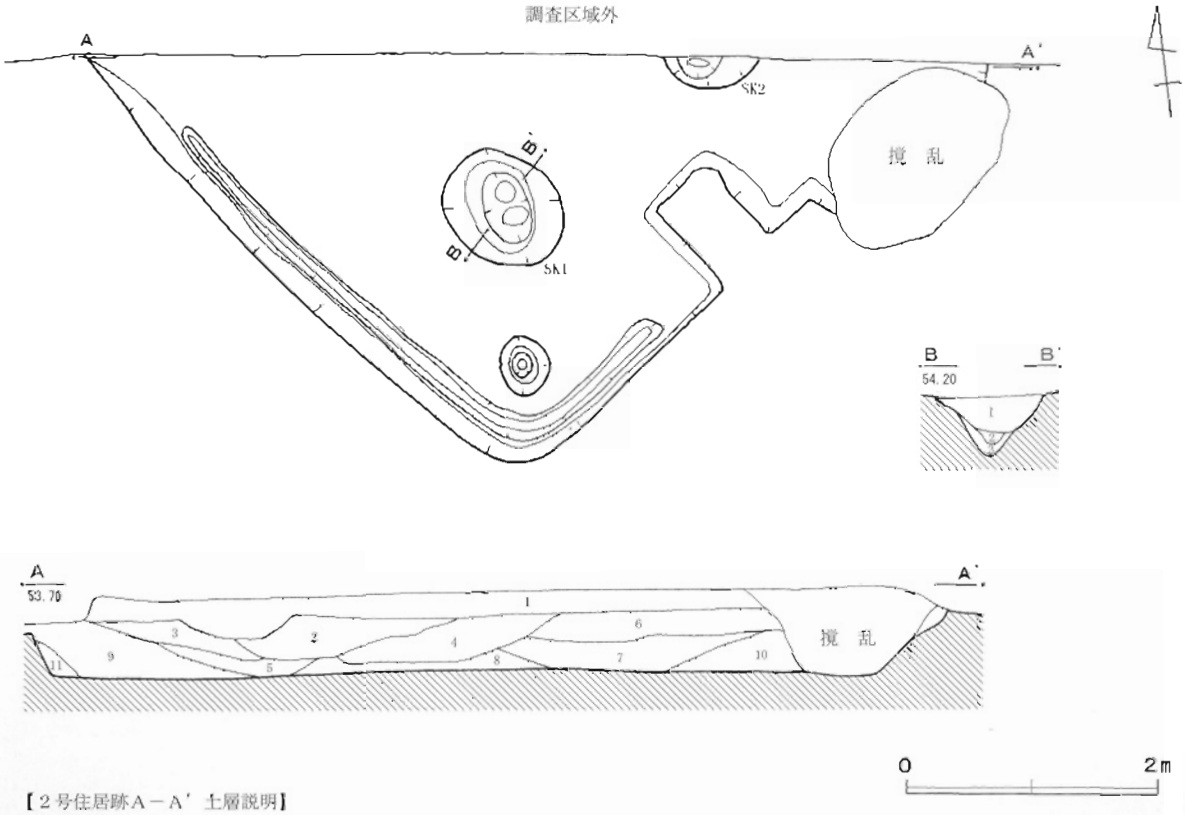
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
30	坏	12.8	3.6	-	赤褐～黒褐	良好	石英、角閃石、微砂粒	90%	覆土、内面放射状暗文
31	坏	(11.9)	3.3	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、白色粒、微砂粒	35%	覆土、内面放射状暗文、磨滅あり
32	坏	(13.3)	(3.2)	-	灰橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土、内面放射状暗文
33	坏	(12.9)	3.4	-	赤褐～灰黒	普通	石英、角閃石、微砂粒	50%	覆土、内面放射状暗文
34	坏	(12.8)	(3.2)	-	黄橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	覆土、内面放射状暗文、磨滅著しい
35	坏	(13.4)	3.4	-	黄橙～黒褐	良好	石英、角閃石、微砂粒	35%	覆土、内面放射状暗文
36	坏	(12.8)	(3.1)	-	灰黒～黄赤	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示35%	覆土、内面放射状暗文
37	坏	13.8	(3.5)	-	黄褐～赤褐	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示70%	覆土、内面放射状暗文
38	坏	14.0	3.6	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	70%	覆土、内面放射状暗文
39	坏	(13.0)	(3.9)	-	赤褐～灰黒	良好	石英、角閃石、長石	図示20%	1住SK-1、内面放射状暗文
40	坏	(15.5)	4.5	-	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス、赤色粒	70%	覆土、内面放射状暗文、磨滅あり
41	坏	(13.4)	(3.8)	-	黒褐色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示35%	覆土、内面放射状暗文
42	坏	(14.8)	(4.0)	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示15%	覆土、内面放射状暗文
43	坏	(13.4)	(3.7)	-	つよい黄赤	良好	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	覆土、口唇部回む
44	坏	(14.2)	(3.9)	-	つよい黄赤	良好	石英、角閃石、雲母	図示25%	覆土、内面指ナデ
45	坏	15.0	4.3	-	橙色	良好	石英、角閃石	70%	覆土
46	坏	(13.1)	(3.4)	-	黄褐～赤褐	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示40%	覆土
47	坏	(14.2)	(3.8)	-	つよい黄赤	良好	石英、角閃石、雲母	図示25%	覆土
48	坏	13.8	3.8	-	黄橙～灰黒	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	80%	覆土
49	坏	(17.2)	(3.9)	-	暗橙褐色	やや悪	石英、角閃石、チャート、黒色粒	図示40%	覆土
50	坏	(15.7)	(3.7)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土
51	坏	12.0	3.8	-	茶褐～赤褐	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	70%	覆土
52	坏	(11.3)	(3.6)	-	灰茶褐色	普通	石英、角閃石	図示30%	覆土
53	坏	(11.9)	3.8	-	暗橙褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示40%	覆土
54	坏	12.1	3.7	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	99%	覆土
55	坏	(11.8)	(3.5)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示35%	覆土
56	坏	(11.8)	(3.5)	-	黄橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示35%	覆土
57	坏	(12.1)	(3.7)	-	赤褐色	普通	金雲母、赤色粒、微砂粒	図示40%	覆土
58	坏	(12.0)	4.0	-	橙色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	30%	覆土
59	坏	(11.9)	(3.2)	-	明橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示20%	覆土
60	坏	12.2	(3.8)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示45%	覆土
61	坏	(11.9)	4.4	-	橙褐色	良好	石英、角閃石、雲母、(精良)	50%	覆土
62	坏	(11.9)	(3.9)	-	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示40%	覆土
63	坏	(13.3)	3.8	-	黄橙色	普通	石英、角閃石、赤色粒、微砂粒	70%	覆土、歪み、磨滅あり
64	坏	12.7	3.9	-	橙色	普通	石英、金雲母、微砂粒	60%	覆土
65	坏	(12.9)	(3.3)	-	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土
66	坏	(13.8)	(3.6)	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土
67	坏	(13.7)	(4.4)	-	灰赤褐色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示30%	覆土
68	坏	12.8	《3.8》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示50%	覆土
69	坏	(14.3)	(4.1)	-	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示50%	覆土
70	坏	15.0	4.6	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	70%	覆土、歪みあり
71	坏	(14.4)	4.4	-	暗橙褐色	やや悪	石英、角閃石	55%	覆土
72	坏	(14.8)	(5.0)	-	暗赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母	図示35%	覆土
73	坏	(15.7)	(5.0)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	カマド、内面に油脂状黒斑あり
74	坏	14.7	4.2	-	明橙色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	75%	覆土
75	坏	18.4	7.3	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒、(ザラつく)	95%	カマド
76	皿	(15.4)	3.4	-	橙色	普通	石英、角閃石、酸化鉄粒、微砂粒	35%	覆土
77	皿	(16.4)	(3.0)	-	灰赤褐色	やや悪	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土
78	皿	(15.8)	(3.3)	-	暗橙褐色	暗橙褐色	石英、角閃石、微砂粒	図示40%	覆土
79	皿	16.0	3.6	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母	80%	覆土、油脂状黒斑あり
80	皿	(16.0)	3.9	-	灰橙褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	55%	覆土
81	皿	16.5	4.5	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、パミス	80%	覆土
82	皿	(17.1)	《3.5》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス	図示45%	覆土
83	皿	17.1	(3.7)	-	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示90%	覆土
84	皿	17.0	3.8	-	灰赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、赤色粒、微砂粒	85%	覆土
85	皿	(17.0)	(3.6)	-	にぶい橙色	普通	石英、角閃石、細礫	図示45%	覆土
86	皿	17.2	3.9	-	明橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	60%	覆土、底部に煤付着
87	皿	(17.0)	(2.6)	-	淡黄赤色	良好	石英、角閃石	図示20%	覆土
88	皿	(17.0)	3.2	-	黄橙色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	50%	覆土
89	皿	17.0	3.2	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、赤色粒、微砂粒	70%	覆土
90	皿	(18.0)	(3.3)	-	明橙色	普通	石英、角閃石、砂粒(粗い)	図示20%	覆土
91	皿	(18.0)	(2.9)	-	橙色	普通	石英、角閃石、酸化鉄粒、微砂粒	図示25%	覆土
92	皿	(18.0)	3.5	-	黄灰～橙褐	良好	石英、角閃石、酸化鉄粒	35%	覆土
93	皿	(18.2)	3.9	-	黄橙色	普通	石英、角閃石、赤色粒、微砂粒	図示25%	覆土
94	須恵 坏	-	《1.3》	7.4	灰白～淡灰	不良	石英、片岩、砂粒	図示75%	覆土、底部全面手持ちヘラ、末野
95	須恵 坏	(12.0)	4.5	8.5	灰色	普通	石英、長石、黒色粒	60%	底部回転ヘラ切り後未調整、末野
96	須恵 坏	-	《3.3》	(7.4)	灰色	良好・堅緻	石英、長石、黒色粒	図示25%	覆土、底部回転ヘラ削り、末野
97	須恵 坏	(14.0)	3.8	(10.4)	灰色	良好	石英、長石	図示15%	覆土、底部手持ちヘラ削り、末野
98	須恵 坏	(13.2)	《3.6》	-	黄灰色	不良	微砂粒	図示35%	覆土、磨滅が著しい、末野

1号住居跡出土遺物観察表 (3)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
99	須恵 坏	(14.8)	《3.5》	-	淡緑灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示15%	覆土、末野
100	須恵 坏	(14.8)	《2.1》	-	明灰色	普通	石英、長石	破片	覆土、口縁部外面に沈線、末野
101	須恵 坏	(15.8)	《2.3》	-	灰褐色	やや悪	石英、長石、黒色粒	図示10%	覆土、口縁部外面に沈線、末野
102	須恵 坏	(17.4)	《3.5》	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示7%	覆土、口縁部内側に沈線、末野
103	須恵 坏	(16.8)	(3.7)	(13.2)	黄灰～淡灰	不良	石英、長石	図示10%	覆土、磨滅と剥離が目立つ、末野
104	須恵 坏	(17.2)	(4.0)	(13.4)	黄灰色	不良	石英、砂粒、(粗い)	図示25%	覆土、底部回転ヘラ、磨滅、末野
105	須恵 坏	(17.4)	(4.3)	(13.0)	灰色	普通	石英、長石	図示15%	覆土、末野
106	須恵 坏	(17.8)	(4.2)	(13.6)	灰白色	やや悪	チャート、微砂粒	図示12%	覆土、末野
107	須恵 坏	-	《3.7》	(13.4)	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示20%	覆土、底部回転ヘラ削り、末野
108	須恵 坏	(18.0)	《4.1》	-	黄灰色	不良	石英砂粒多	図示20%	覆土、磨滅が著しい、末野
109	須恵 坏	18.2	4.7	13.8	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒、片岩	70%	底部全面回転ヘラ、内面青海波あり
110	須恵 坏	(18.5)	4.5	(15.1)	明灰色	普通	石英、長石、片岩	40%	底部全面回転ヘラ、口縁外面に沈線
111	高台付坏	-	《1.2》	(10.5)	灰黄赤色	不良	砂粒、褐色粒	図示20%	覆土、高台貼り付け、末野
112	須恵 蓋	12.6	3.6	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	80%	覆土、歪みあり、末野
113	須恵 蓋	(14.0)	《3.2》	-	淡灰色	普通	微砂粒、黒色粒	図示40%	覆土、末野
114	須恵 蓋	(14.2)	《1.9》	-	灰白色	不良	石英、長石、片岩、雲母	図示10%	覆土、磨滅あり、末野
115	須恵 蓋	(15.6)	《2.9》	-	淡灰色	良好	微砂粒、(緻密)	図示45%	覆土、末野
116	須恵 蓋	-	《2.7》	-	黄灰色	不良	石英、長石、片岩、砂粒	図示30%	覆土、磨滅あり、末野
117	須恵 蓋	(16.5)	4.6	-	灰褐色	不良	石英、微砂粒	40%	カマド、末野
118	須恵 蓋	(17.6)	《1.9》	-	灰色	普通	石英、長石	図示10%	覆土、末野
119	須恵 蓋	(19.9)	《3.5》	-	明灰色	不良	石英、長石、片岩	図示25%	覆土、磨滅あり、末野
120	須恵 蓋	19.1	3.2	-	明茶褐色	普通	石英、長石、片岩、細礫	80%	覆土、酸化焔、末野
121	須恵 蓋	(21.1)	(4.5)	-	灰白色	普通	石英、長石、微砂粒	図示5%	覆土、末野
122	須恵 蓋	(19.8)	《1.9》	-	明灰色	良好	石英、長石、(精良)	図示8%	覆土、末野
123	平瓶(水滴)	胴部幅9.7	《5.2》	5.9	淡灰色	普通	石英、長石、黒色粒	90%	覆土、頭部欠損し切断面を研磨、末野
124	長頸瓶	-	《11.0》	-	淡灰色	良好	長石、黒色粒	図示45%	覆土、群馬産か？
125	短頸壺	(13.7)	《6.2》	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	図示25%	覆土、肩部平行叩き後回転ナデ
126	須恵 甕	(16.8)	《5.7》	-	明灰色	普通	長石、(精良)	図示15%	覆土、湖西産か？
127	須恵 甕	(19.6)	《7.9》	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	図示20%	覆土、外面平行、内面青海波、末野
128	須恵 甕	-	《7.8》	-	明灰色	良好	石英、長石、片岩	図示10%	覆土、外面平行、内面青海波、末野
129	須恵 甕	-	-	-	灰白色	普通	長石、(精良)	破片	外面平行、内面青海波、産地不明
130	須恵 甕	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、細礫	破片	覆土、櫛描波状文8条、4段、末野
131	須恵 甕	-	-	-	暗灰色	良好	長石、パミス	破片	外平行＋回転ナデ、内青海波、突帯
132	須恵 甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石	破片	覆土、外面平行、内面青海波、末野
133	須恵 甕	-	-	-	暗灰色	良好	石英、長石、(緻密)	破片	覆土、外面ナデ、内面青海波、末野
134	須恵 甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	外平行、内平行叩き後ナデ、タール
135	須恵 甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、細礫	破片	外平行、内青海波後ナデ、末野
136	須恵 甕	-	-	-	暗灰色	良好	石英、長石、黒色粒	破片	カマド、外平行、内青海波、末野
137	ミニチュア	-	-	-	灰褐色	やや悪	石英、角閃石、雲母、砂粒(粗い)	70%	覆土、手捏ね土器
138	小形甕	(9.0)	(6.1)	-	灰橙～黒褐	良好	石英、角閃石、微砂粒	図示35%	覆土
139	小形甕	(12.9)	《5.3》	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、片岩	図示25%	覆土
140	小形甕	13.9	17.5	-	にぶい橙褐	普通	石英、チャート、酸化鉄粒、微砂粒	図示60%	覆土
141	小形甕	14.5	13.7	-	明橙褐色	普通	石英、チャート、白色粒、微砂粒	70%	覆土
142	小形甕	(13.0)	《5.8》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示20%	覆土
143	小形甕	(15.4)	《9.2》	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、砂粒(粗い)	図示25%	覆土
144	台付甕	12.7	16.0	9.3	黄赤～黒褐	普通	石英、角閃石、チャート、パミス	70%	覆土、内外面に煤付着
145	台付甕	10.5	《10.6》	-	暗赤褐色	良好	石英、角閃石、長石、微砂粒	図示99%	覆土、外面に煤付着
146	台付甕	(10.1)	《4.0》	-	明橙褐色	普通	石英、角閃石、長石、片岩、微砂粒	図示25%	覆土
147	台付甕	-	《4.6》	(8.7)	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、片岩	図示30%	覆土
148	台付甕	12.0	《6.7》	-	赤褐色	良好	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示75%	覆土、外面に煤付着
149	台付甕	(11.7)	《6.6》	-	黄赤色	やや悪	石英、角閃石、微砂粒	図示40%	覆土
150	台付甕	-	《3.7》	(11.1)	灰橙色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示30%	覆土
151	台付甕	-	《5.1》	10.0	黄赤～黒褐	良好	石英、角閃石、赤色粒	図示85%	覆土
152	台付甕	-	《8.9》	(6.3)	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示70%	覆土
153	台付甕	-	《6.2》	(11.2)	橙色	良好	石英、角閃石、赤色粒、微砂粒	図示60%	覆土
154	台付甕	-	《5.9》	12.8	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、赤色粒	図示95%	覆土
155	甕	20.4	《13.6》	-	橙色	普通	石英、雲母、片岩、微砂粒	図示95%	覆土
156	甕	22.5	《9.0》	-	暗橙褐色	良好	石英、角閃石、雲母、片岩、微砂粒	図示60%	覆土
157	甕	23.6	《10.4》	-	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、パミス、砂粒	図示80%	覆土
158	甕	24.3	33.8	5.8	明橙色	普通	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒、砂粒	90%	カマド
159	甕	23.0	34.4	5.6	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	85%	カマド
160	甕	(22.7)	(34.8)	5.6	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示70%	カマド
161	甕	21.3	《10.0》	-	にぶい赤褐	良好	石英、角閃石、チャート、雲母、砂粒	図示30%	覆土
162	甕	22.5	《7.0》	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示50%	覆土
163	甕	(24.6)	《12.4》	-	明橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示23%	覆土、口縁部歪みあり
164	甕	22.2	《26.1》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒、砂粒	図示85%	覆土
165	甕	(25.0)	《19.8》	-	橙色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示35%	覆土
166	甕	-	《5.6》	-	にぶい橙色	普通	石英、角閃石、雲母、パミス	図示90%	覆土
167	甕	(22.6)	《10.3》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示40%	覆土

1号住居跡出土遺物観察表　(4)

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	焼　成	胎　土	残存率	備　考
168	土錘	10.2	3.1	3.1	105.9	普通	石英、長石、微砂粒	99%	覆土、手捏ね
169	土錘	10.5	3.4	2.9	110.2	普通	石英、長石、微砂粒	99%	覆土、手捏ね
170	土錘	9.8	3.4	3.1	107.3	普通	石英、長石、片岩	99%	覆土、手捏ね
171	磨石	7.6	6.9	4.0	105.7	－	－	－	覆土、角閃安山岩
172	磨石	6.0	5.1	4.0	81.9	－	－	－	覆土、角閃安山岩
173	編物石？	16.7	5.2	3.5	403.0	－	－	－	覆土、紅れん石片岩
174	小形鉄鎌	9.0	2.9	0.5	30.8	－	－	99%	覆土、錆瘤、層状剥離あり
175	刀子	《4.0》	1.1	0.3	3.7	－	－	30%	覆土、切先部
176	刀子？	《3.4》	1.0	0.2	1.9	－	－	破　片	覆土、細い薄板状、刀子の茎部か



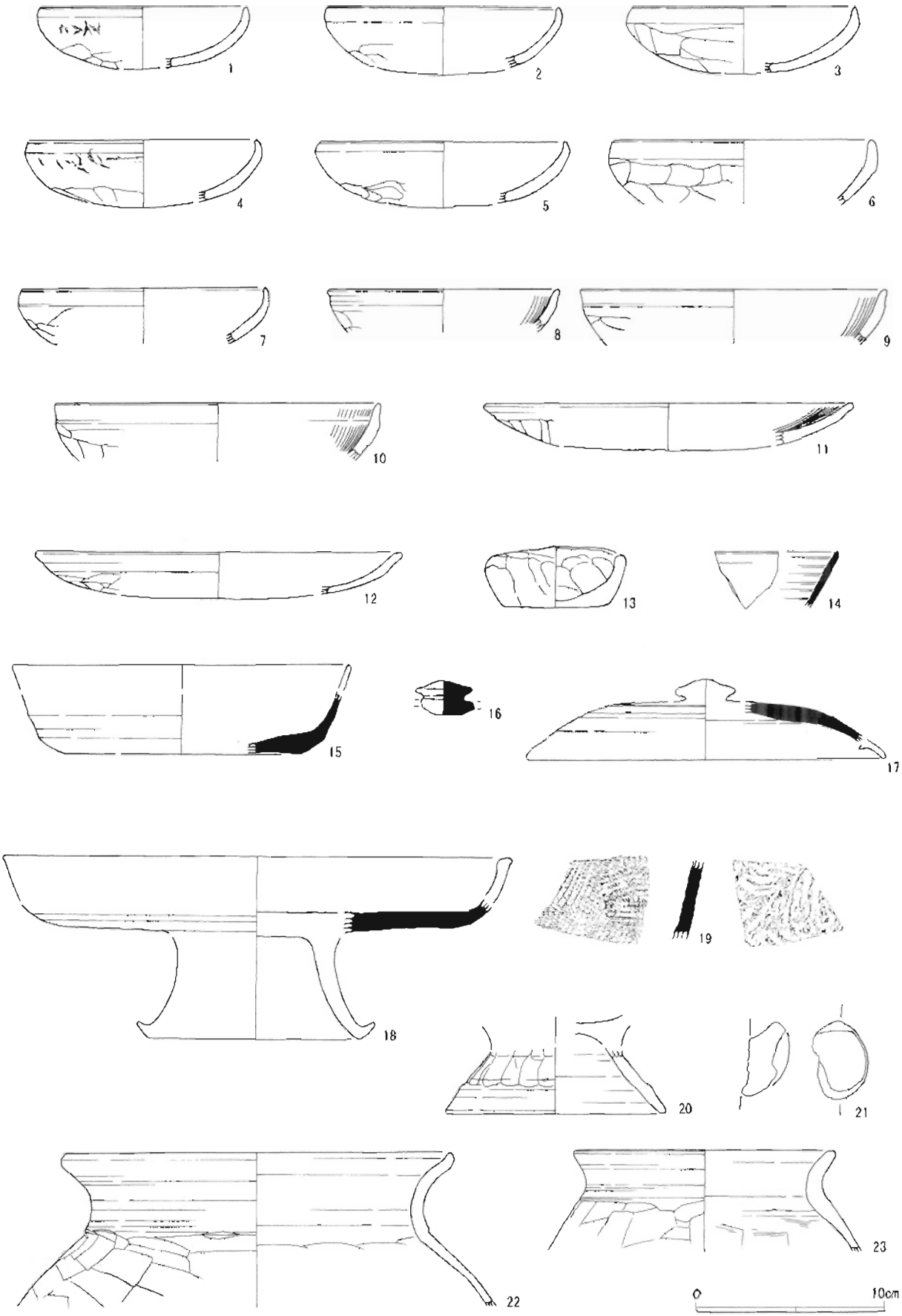
【2号住居跡A－A' 土層説明】

1　暗褐色土　A軽石を少量、ローム粒微量含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量、焼土粒微量含む。
3　暗茶褐色土　ローム粒を多量含む。
4　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。
5　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。
6　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。
7　暗赤褐色土　ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
8　暗茶褐色土　ローム粒を少量含む。
9　暗茶褐色土　ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
10　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック少量含む。
11　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。
12　暗茶褐色土　ローム粒を少量含む。

【2号住居跡土坑B－B' 土層説明】

1　黒 色 土　ローム粒を多量含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量含む、
3　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む。

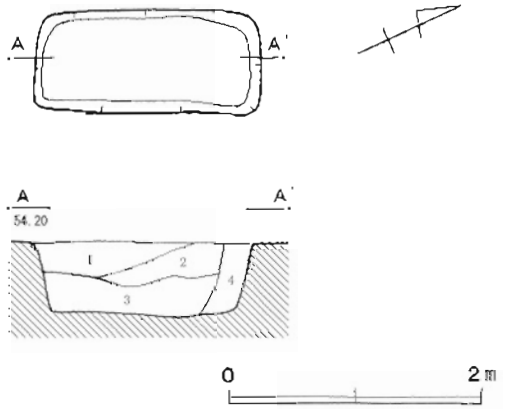
第22図　2号住居跡実測図



第23図　２号住居跡出土遺物実測図

2号住居跡出土遺物観察表

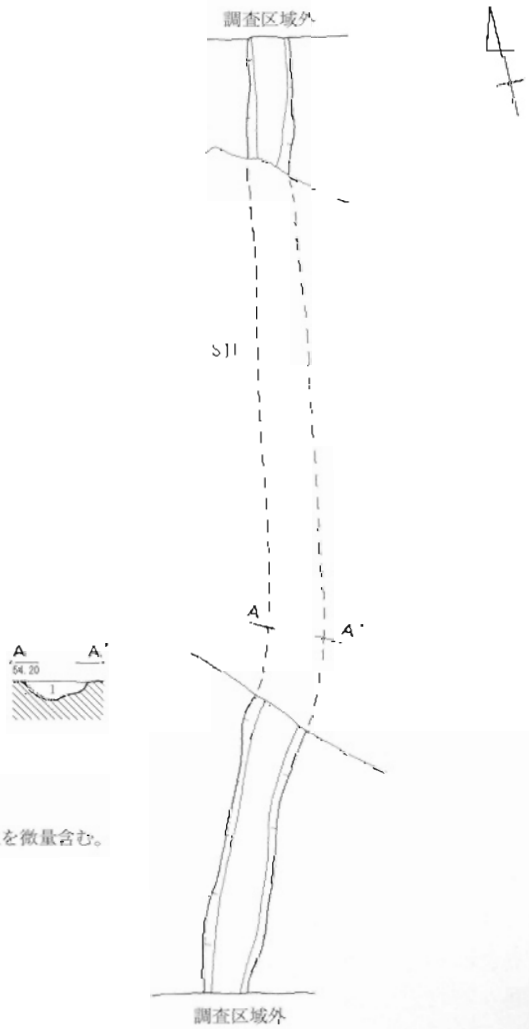
番号	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色　調	焼　成	胎　土	残存率	備　考
1	坏	(11.0)	(3.3)	－	灰褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	覆土
2	坏	(12.3)	(3.6)	－	明赤褐色	普通	石英、角閃石、長石	図示15%	覆土
3	坏	(11.9)	《3.5》	－	明橙～黒褐	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	覆土
4	坏	(12.1)	(3.6)	－	灰褐色	やや悪	石英、角閃石、微砂粒	図示45%	覆土
5	坏	(13.0)	(3.5)	－	橙色	普通	石英、角閃石、白色粒	図示15%	覆土
6	坏	(13.8)	《3.5》	－	にぶい赤褐	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土
7	坏	(13.0)	《3.0》	－	橙褐色	良好	石英、角閃石	図示10%	覆土、油脂状黒斑付着
8	坏	(12.2)	《2.3》	－	橙色	普通	石英、角閃石、長石	図示10%	SK-1、内面放射状暗文
9	坏	(16.2)	《3.0》	－	黄赤褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	覆土、内面放射状暗文
10	坏	(17.2)	《3.1》	－	灰橙褐色	普通	石英、角閃石	図示13%	覆土、内面放射状暗文
11	皿	(19.5)	(2.5)	－	明橙褐色	普通	石英、角閃石、白色粒、酸化鉄粒	図示７%	覆土、内面放射状暗文
12	皿	(19.4)	(2.5)	－	橙褐色	良好	石英、角閃石	図示10%	覆土
13	ミニチュア	7.0	3.2	5.8	灰褐色	普通	石英、角閃石、パミス	100%	覆土、手捏ね土器
14	須恵 坏	－	《3.1》	－	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	破　片	覆土、末野
15	須恵 坏	－	《3.3》	(12.4)	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒、チャート	図示20%	覆土、底部手持ちヘラ削り、末野
16	須恵 蓋	鈕径3.0	－	－	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示90%	覆土、末野
17	須恵 蓋	－	《2.2》	－	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒、細礫	図示15%	覆土、末野
18	須恵脚付盤	－	《1.8》	－	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示15%	覆土、末野
19	須恵 甕	－	－	－	暗灰色	普通	石英、長石、細礫	破　片	外面平行＋ハケメ、内面青海波、末野
20	台付甕	－	《3.5》	(11.5)	橙褐色	良好	石英、角閃石、チャート、雲母	図示25%	覆土
21	甑	－	－	－	灰赤色	不良	角閃石、白色粒、黒色粒	破　片	覆土、取っ手
22	甕	(20.5)	《8.2》	－	灰橙褐色	良好	石英、角閃石、砂粒	図示40%	覆土
23	甕	(13.8)	《5.5》	－	橙色	良好	石英、角閃石、微砂粒	図示35%	覆土



【1号土坑土層説明】

1　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。
2　暗茶褐色土　ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
3　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック少量含む。
4　茶褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む。

第24図　1号土坑実測図



【1号溝土層説明】

1　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を微量含む。

第25図　1号溝実測図

⑵　西谷遺跡

①　発掘調査の経過

西谷遺跡の調査地点は、深谷市針ヶ谷字柳原186番地17である。標高は、調査区中央で約51.4mを測る。

発掘調査は、平成10年11月19日～11月30日にかけて実施された。発掘調査面積は、約400㎡である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から始めた。遺構確認面は、表土から約40cm掘り下げたソフトローム面とした。表土除去後、遺構確認作業を行った。

遺構確認状況の写真撮影の後、各遺構の掘り下げを開始した。掘り下げは、まず１号住居跡から始め、２号住居跡へと進んだ。

②　遺構と遺物

【１号住居跡】

調査区の南西コーナーに位置する。西半部と南半部が調査区域外にあるため、全容は不明である。

確認できたのは、東西4.08m、南北4.30mである。平面形態は、方形ないし長方形を呈すると考えられるが、主軸方位は不明である。

確認面からの深さは21cmほどを測り、底面は若干の凹凸をもつ。

床面上では、９基の土坑が存在した。平面形態が円形を呈するもの（１・３・７・８・９号）と長方形を呈するもの（４・５・６号）がある。円形土坑の規模（直径）は、１号66cm、３号73cm、７号59cm、８号80cm、９号52cmである。このうち３号土坑は、覆土から焼土塊が出土した。また長方形土坑の規模（長軸）は、４号82cm、５号108cm、６号146cmである。

壁溝は、検出されなかった。

カマドは、調査範囲内では検出されなかった。

柱穴は円形を呈し、直径28～36cm、深さ６～26cmを測る。

遺物は、土師器の高台埦・甕・小型甕・羽釜、須恵器の坏・高台埦・甕、灰釉高台皿、縄文土器・磨り石などがあった。

【２号住居跡】

調査区の東部に位置する。北東コーナーが、わずかに調査区域外に出る。

平面形態は長方形を呈し、長軸4.08m、短軸2.97mを測る。主軸方位は、N-105°-Eを示す。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、20cmほどを測る。壁溝は、西辺と南辺で巡る。北辺においては、撹乱を受けているため不明である。

カマドは、東壁のやや南寄りを削り出し構築されていた。袖は粘土の造り付けで、右袖26cm、左袖32cmを測る。燃焼部は、長さ109cm、幅46cmを測る。底面は燃焼部で若干くぼみ、煙道部へ向かい緩やかに立ち上がる。

土坑は３基が検出され、いずれも平面円形を呈す。１号土坑は北東コーナーに接し、直径65cm、深さ14cmを測る。２号土坑は東壁の北寄りに接し、直径80cm、深さ23cmを測る。覆土上層から多量の焼土ブロックと粘土ブロックが出土した。３号土坑は南東コーナーに接し、直径58cm、深さ12cmを測る。覆土中から焼土粒が多量に出土した。

柱穴は、検出されなかった。

遺物は、土師器の高台埦・甕・台付甕、須恵器の坏・高台埦・甕などがあった。

【１号土坑】

調査区の北部に位置する。

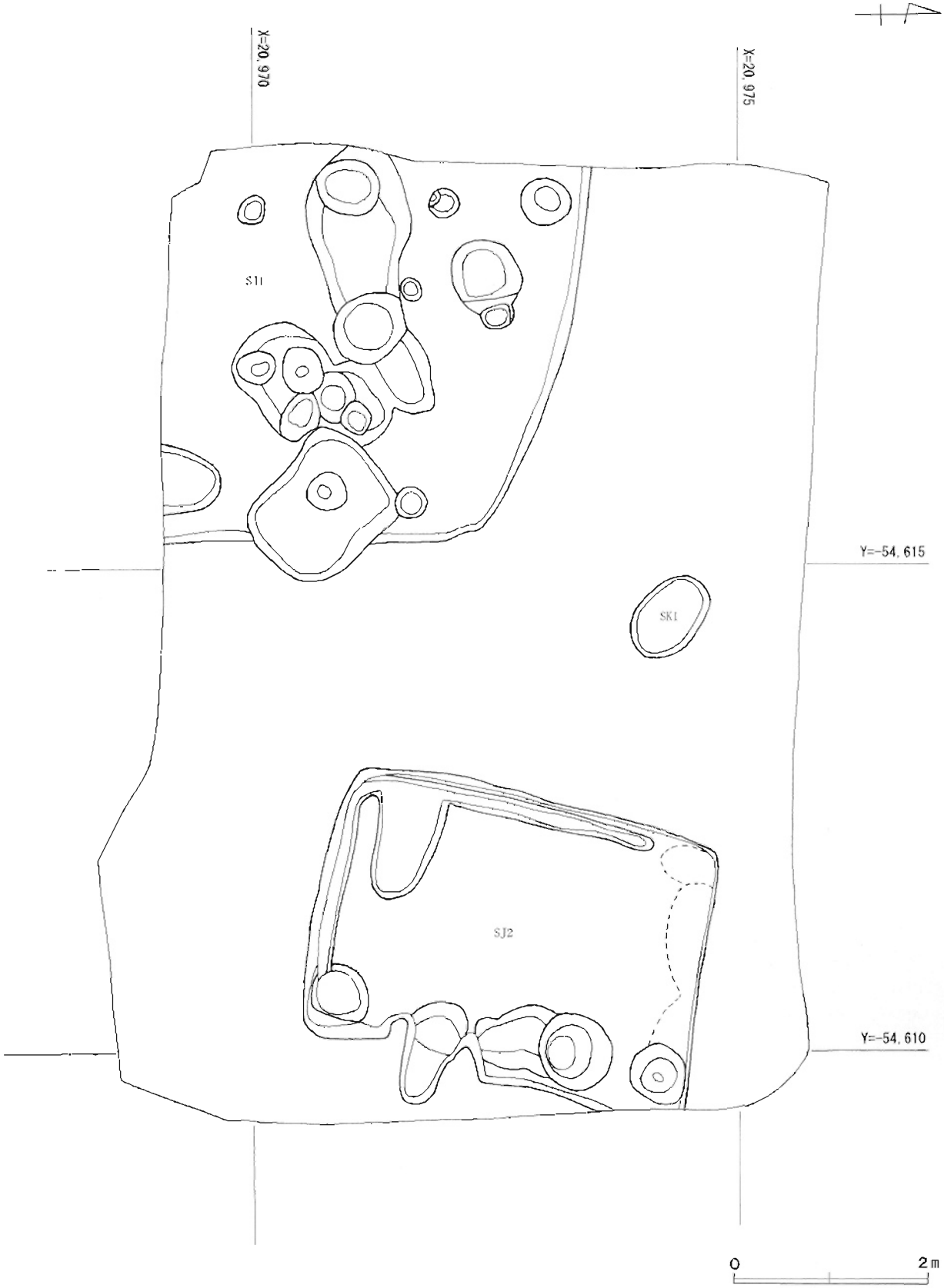
平面形態は楕円形を呈し、長軸96cm、短軸80cmを測る。主軸方位は、N-27°-Eを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、55cmを測る。

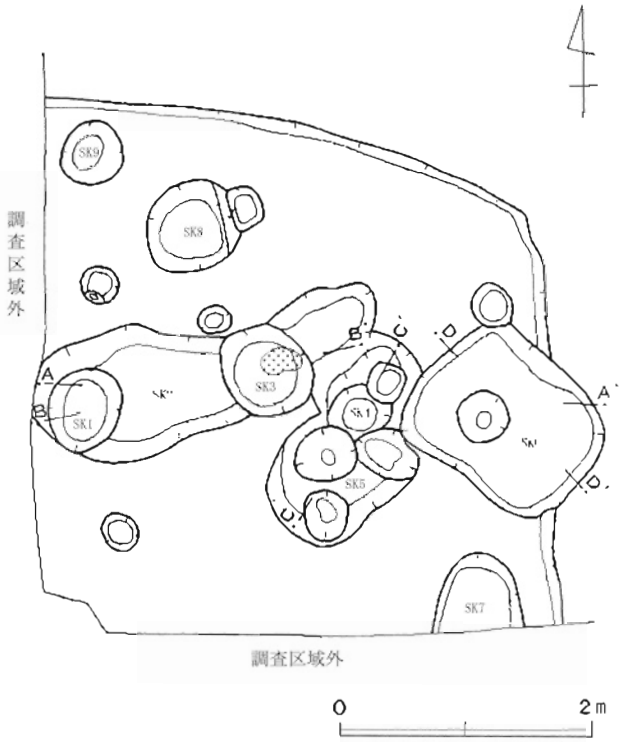
遺物は、出土しなかった。

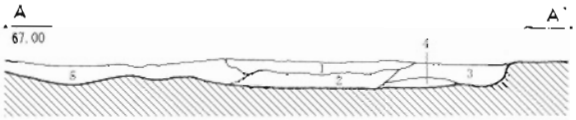
③　まとめ

従来、縄文時代草創期の遺跡として著名であった西谷遺跡内における初の発掘調査により、古代の竪穴住居跡２軒が検出された。１号住居跡は９世紀中葉～後半、２号住居跡はこれに続く９世紀後半と考えられる。



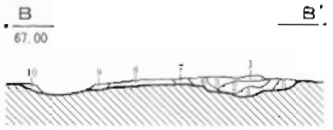
第26図　西谷遺跡全測図





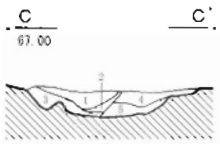
【1号住居跡A－A' 土層説明】

1　茶褐色土　浅間A軽石を多量含む。やや軟質。
2　暗茶褐色土　ローム粒多量、ロームブロック・焼土粒を少量含む。
3　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。
4　黄褐色土　ローム粒・ロームブロック少量、焼土粒を若干含む。
5　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを若干含む。



【1号住居跡B－B' 土層説明】

1　赤褐色土　焼土ブロック主体。
2　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック少量、炭化物・焼土粒若干含む。
3　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
4　暗褐色土　ローム粒・炭化物粒・灰褐色粘土ブロックを少量含む。
5　暗灰褐色土　灰褐色粘土ブロック主体。ロームブロックを若干含む。
6　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック若干含む。
7　暗灰褐色土　5層に同じ。
8　暗茶褐色土　ローム粒・炭化物粒を少量含む。
9　暗灰褐色土　5層に同じ。
10　暗灰褐色土　5層に同じ。



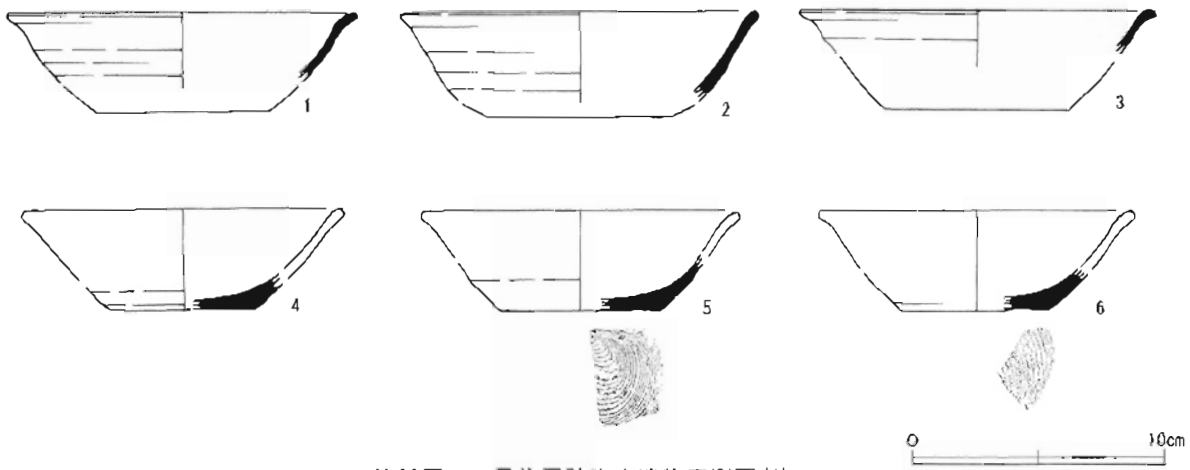
【1号住居跡C－C' 土層説明】

1　暗茶褐色土　ローム粒多量、ロームブロック・焼土粒若干含む。
2　暗茶褐色土　ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
3　黒褐色土　炭化物粒少量、ローム粒を若干含む。
4　暗茶色土　ローム粒・ロームブロック少量含む。
5　暗黄褐色土　ローム粒多量、ロームブロック少量含む。

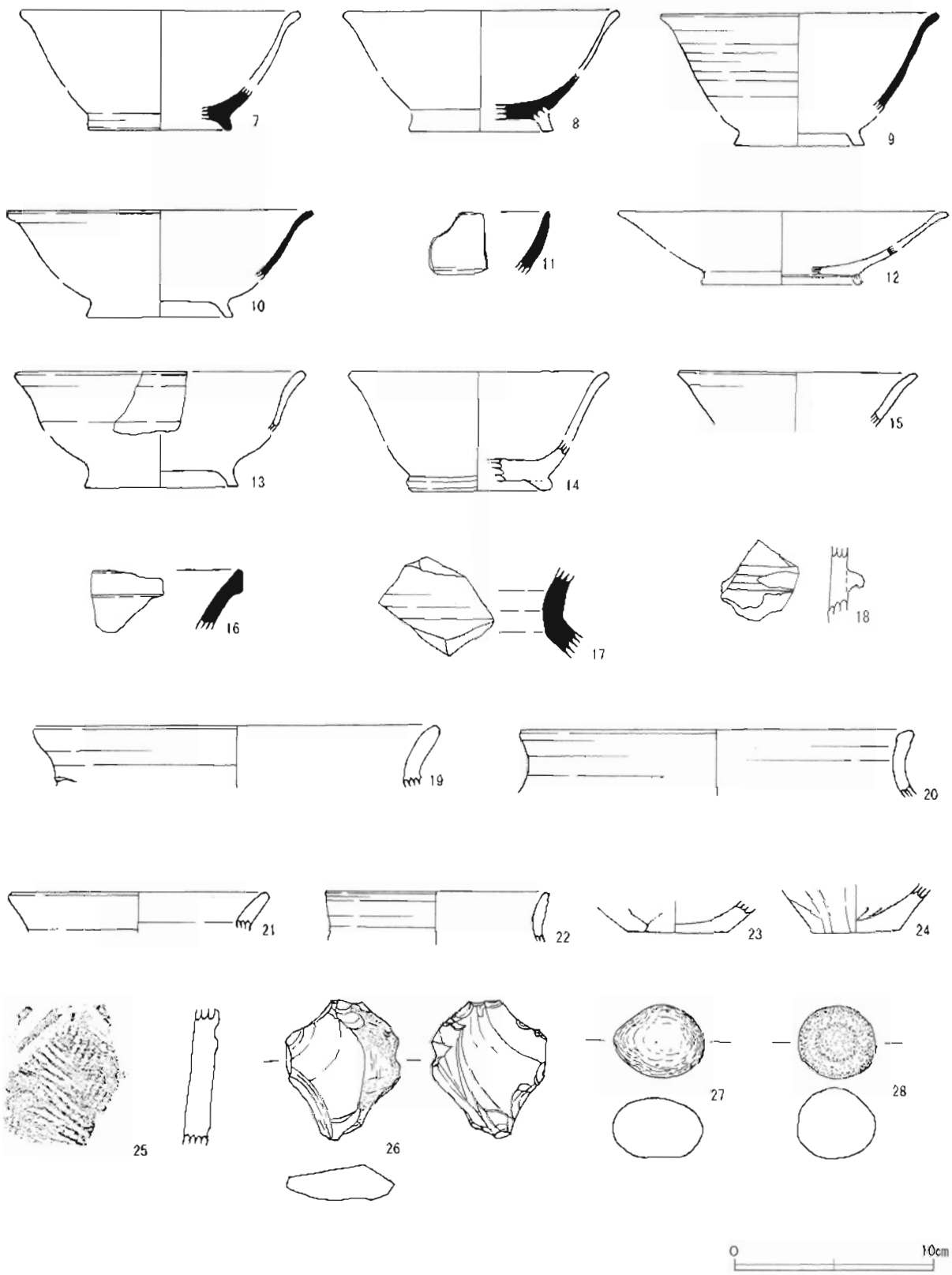
【1号住居跡D－D' 土層説明】

1　暗茶褐色土　ローム粒多量、ロームブロック若干含む。
2　暗茶褐色土　ローム粒多量、ロームブロック・焼土粒を少量含む。
3　茶褐色土　ロームブロック主体。

第27図　1号住居跡実測図



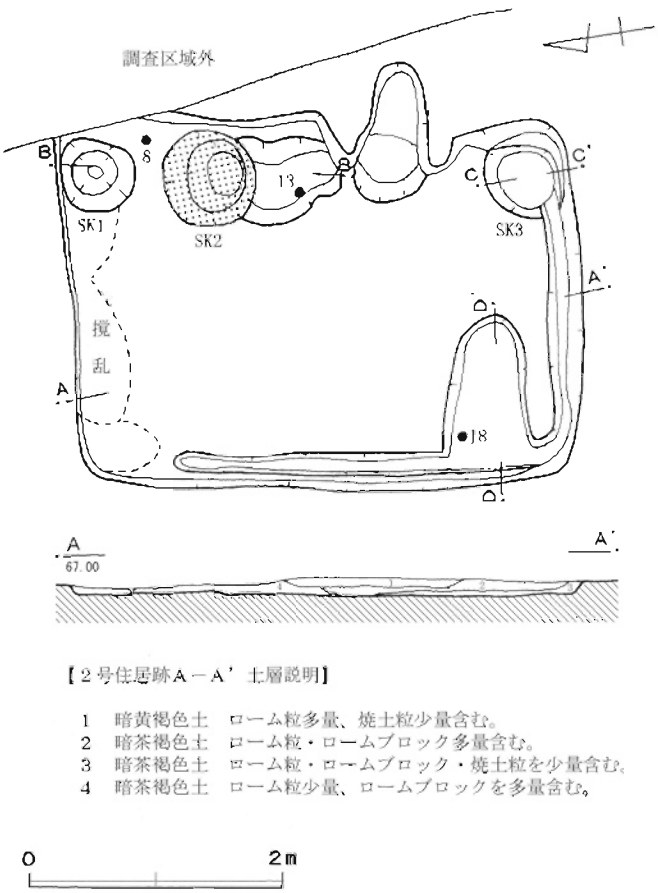
第28図　1号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図　１号住居跡出土遺物実測図(2)

1号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色　調	焼　成	胎　土	残存率	備　考
1	須恵 坏	(13.9)	《2.8》	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示10%	覆土、末野
2	須恵 坏	(14.1)	《3.6》	-	灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示７%	覆土、末野
3	須恵 坏	(14.0)	《1.7》	-	暗灰色	普通	石英、長石、黒色粒、（粗い）	図示10%	覆土、末野
4	須恵 坏	-	《1.5》	(6.1)	灰褐～明灰	普通	石英、長石、黒色粒	図示15%	覆土、底部回転糸切り未調整、末野
5	須恵 坏	-	《2.3》	(6.5)	灰色	普通	長石、片岩、チャート	図示20%	覆土、底部回転糸切り未調整、末野
6	須恵 坏	-	《1.6》	(6.0)	暗灰色	普通	石英、長石、黒色粒、（粗い）	図示15%	覆土、底部回転糸切り未調整、末野
7	須恵高台埦	-	《2.2》	(7.0)	明灰色	普通	黒色粒	図示10%	覆土、末野
8	須恵高台埦	-	《2.3》	(7.0)	にぶい灰褐	不良	長石、チャート、褐色粒	図示25%	覆土、磨滅が著しい、末野
9	須恵高台埦	(13.8)	《5.0》	-	灰褐色	やや悪	長石、黒色粒	図示15%	SX-6、歪みやや有り、末野
10	須恵高台埦	(15.2)	《3.5》	-	灰黄褐色	不良	砂粒、黒色粒、（粗い）	図示15%	覆土、磨滅が著しい、末野
11	須恵 坏	-	《3.1》	-	灰白色	普通	石英、長石、（ザラつく）	破　片	覆土、群馬産か
12	灰釉高台皿	-	《1.7》	(7.9)	黄灰色	良好	石英微量（精良、緻密）	図示10%	SX-6、産地不明
13	高台埦	(14.0)	《3.1》	-	暗赤褐色	普通	石英、長石、片岩、褐色粒	図示５%	覆土、ロクロ土師器、内面に煤付着
14	高台埦	-	《2.6》	(2.6)	明赤褐色	やや悪	石英、長石、角閃石、雲母	図示20%	覆土、ロクロ土師器、雑な造り
15	高台埦	(11.8)	《2.7》	-	灰黄赤色	不良	石英、角閃石	図示20%	Pit-1、ロクロ土師器、磨滅有り
16	須恵 甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	破　片	覆土、磨滅有り、末野
17	須恵 甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石	破　片	覆土、末野
18	羽釜	-	-	-	淡灰褐色	普通	微砂粒	破　片	覆土、土師質土器、非ロクロ
19	甕	(20.0)	《3.1》	-	淡黄赤色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	SX-6、土師質土器、非ロクロ
20	甕	(19.5)	《3.4》	-	灰褐色	やや悪	微砂粒	図示７%	覆土、土師質土器、非ロクロ
21	小形甕	(12.7)	《1.8》	-	灰黄赤色	良好	微砂粒少量、（精良）	図示７%	覆土
22	台付甕	(11.0)	《2.5》	-	淡黄赤色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示15%	覆土
23	甕	-	《1.6》	(5.0)	灰黄褐色	やや悪	微砂粒	図示20%	覆土
24	甕	-	《2.4》	(4.3)	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示40%	覆土
25	深鉢	-	-	-	灰褐色	普通	砂粒多い	破　片	SX-3、加曾利E
番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材			備　考
26	剥片	7.0	5.8	1.8	78.7	頁岩	-	-	一部側面に調整剥離有り
27	磨り石	4.5	3.7	3.1	65.2	チャート	-	-	全面磨耗
28	磨り石	3.9	3.6	3.6	56.2	角閃安山岩	-	-	全面丸く研磨

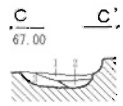


【２号住居跡Ａ－Ａ’土層説明】

1　暗黄褐色土　ローム粒多量、焼土粒少量含む。
2　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む。
3　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック・焼土粒を少量含む。
4　暗茶褐色土　ローム粒少量、ロームブロックを多量含む。

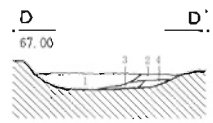
【２号住居跡土坑Ｂ－Ｂ’土層説明】

1　暗茶褐色土　焼土ブロック多量、灰褐色粘土ブロックを少量含む。
2　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。
3　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロックを少量含む。
4　暗褐色土　ローム粒少量、ロームブロックを若干含む。



【２号住居跡Ｃ－Ｃ’土層説明】

1　暗茶褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。
2　暗茶褐色土　焼土粒多量、ローム粒・ロームブロック少量含む。
3　暗黒褐色土　ローム粒多量、焼土粒を微量含む。

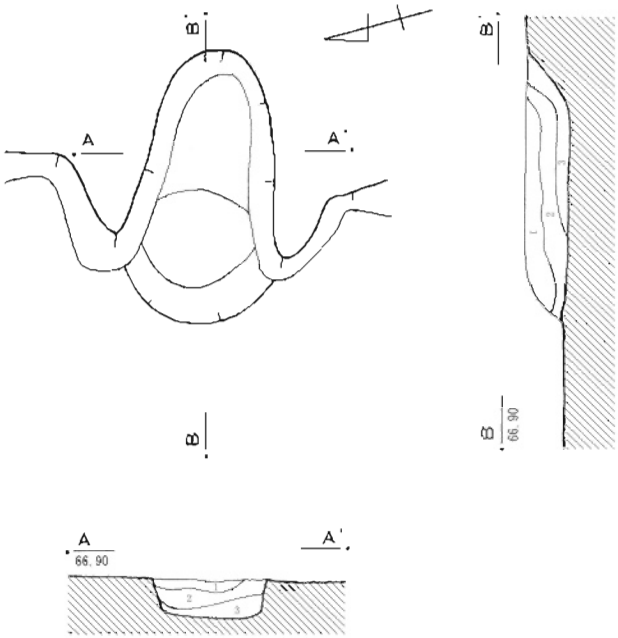


【２号住居跡Ｄ－Ｄ’土層説明】

1　暗茶褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。
2　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。
3　明茶褐色土　ロームブロック多量、ローム粒少量含む。
4　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。

0　2m

第30図　２号住居跡実測図

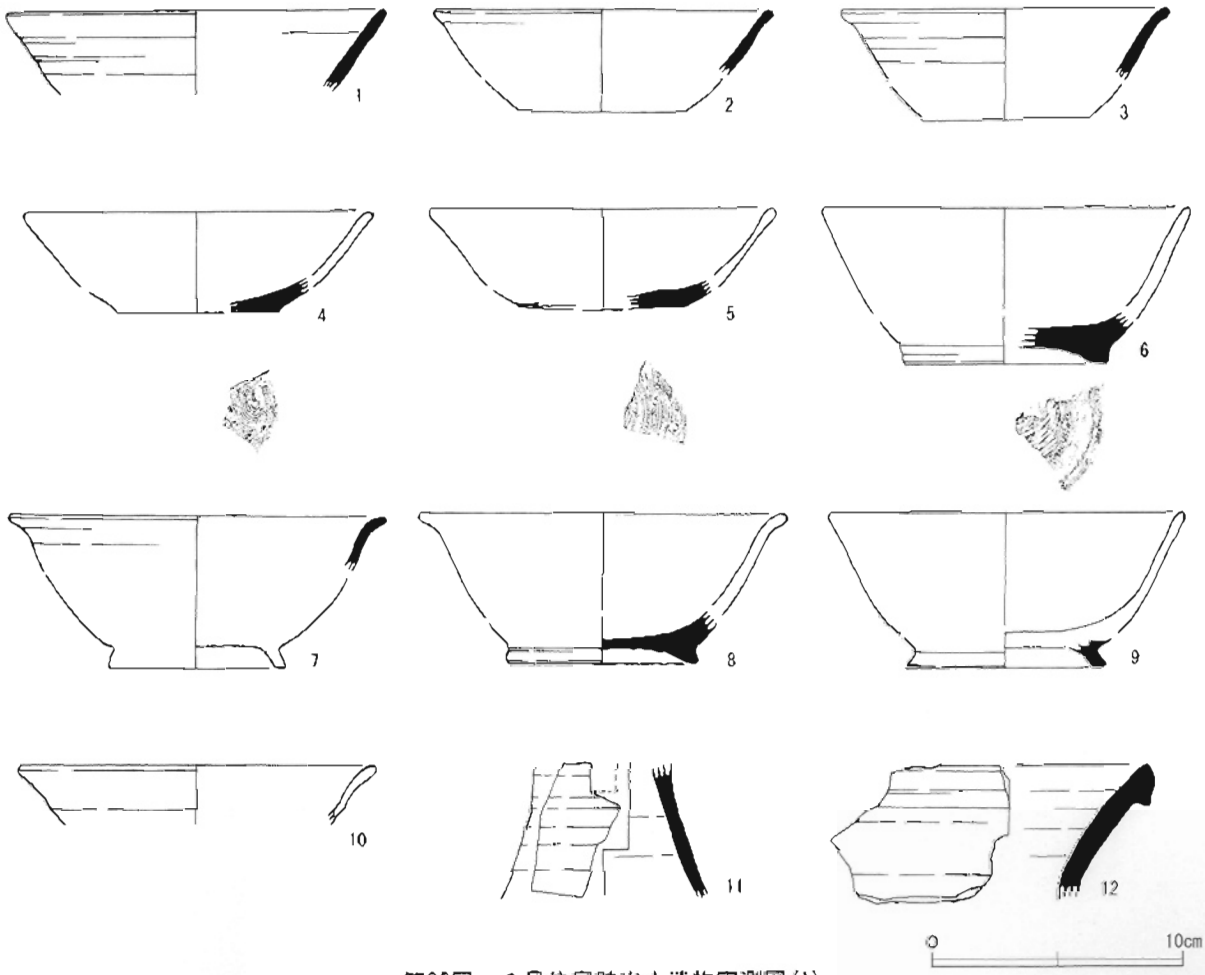


【2号住居跡カマド土層説明】

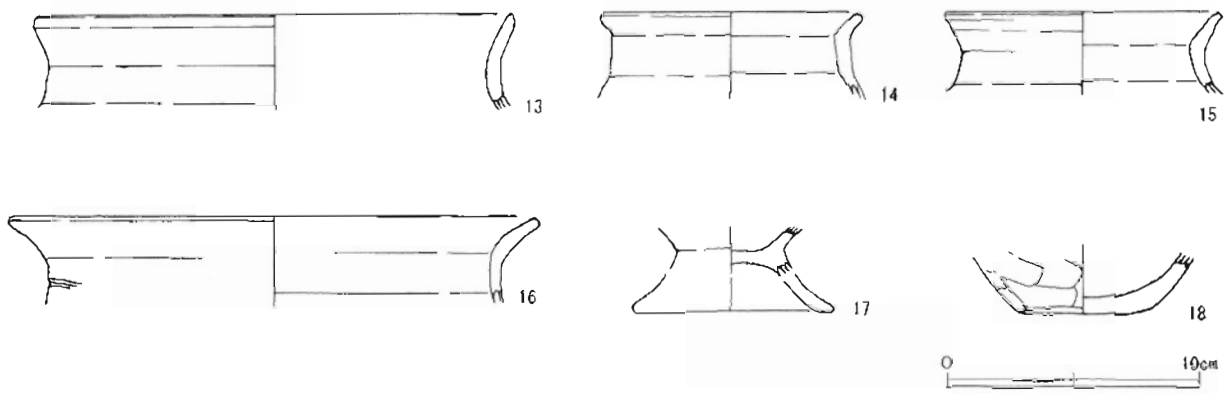
1　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック少量含む。
2　黒褐色土　炭化物・焼土粒を少量、ローム粒・ロームブロック若干含む。
3　暗褐色土　焼土粒多量、ローム粒を少量含む。

0　1m

第31図　2号住居跡カマド実測図



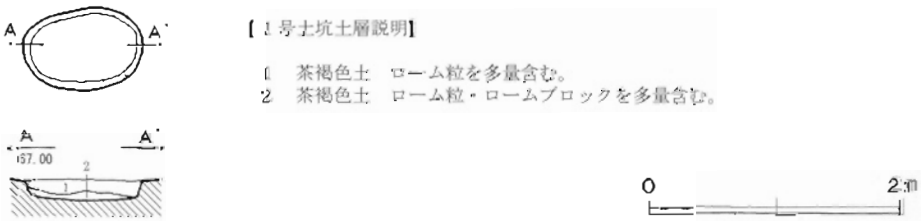
第32図　2号住居跡出土遺物実測図(1)



第33図　２号住居跡出土遺物実測図(2)

２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色　調	焼　成	胎　土	残存率	備　考
1	須恵 坏	(14.9)	《3.2》	-	灰橙褐色	不良	チャート、褐色粒	図示10%	Pit-3、末野
2	須恵 坏	(13.2)	《2.7》	-	淡灰色	やや悪	微砂粒、褐色粒	図示15%	覆土、磨滅やや有り、末野
3	須恵 坏	(12.7)	《2.9》	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	図示７%	覆土、末野
4	須恵 坏	-	《1.4》	(6.4)	暗灰色	普通	長石、片岩	図示20%	覆土、底部回転糸切り未調整、末野
5	須恵 坏	-	《1.2》	(6.8)	明灰色	普通	石英、長石、片岩	図示20%	覆土、底部回転糸切り未調整、末野
6	須恵高台埦	-	《2.1》	(7.9)	灰赤褐色	やや悪	石英、褐色粒	図示20%	覆土、酸化焔、末野
7	須恵高台埦	(14.8)	《2.2》	-	明赤褐色	やや悪	微砂粒、褐色粒	図示10%	カマド、酸化焔、末野
8	須恵高台埦	-	《2.1》	(7.4)	灰赤褐色	不良	砂粒、褐色粒	図示30%	図示、酸化焔、末野
9	須恵高台埦	-	《1.2》	(7.8)	灰色	普通	長石、片岩	図示15%	覆土、末野
10	高台埦	(13.8)	《2.4》	-	黒褐～灰橙	良好	石英、(精良)	図示10%	覆土、ロクロ土師器
11	須恵高坏埦	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石	破　片	覆土、脚に透かし孔有り、末野
12	須恵 甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	破　片	覆土、末野
13	甕	(18.7)	《3.9》	-	赤褐色	普通	砂粒	図示15%	図示
14	甕	(20.7)	《3.5》	-	灰赤褐色	良好	石英、微砂粒、(精良)	図示５%	覆土
15	台付甕	(10.0)	《3.4》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示５%	覆土
16	台付甕	(10.9)	《3.2》	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	覆土
17	台付甕	-	-	-	明橙褐色	普通	石英、長石、角閃石	図示70%	Pit-4
18	甕	-	《2.6》	(5.3)	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示40%	図示



【１号土坑土層説明】

1　茶褐色土　ローム粒を多量含む。
2　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。

第34図　１号土坑実測図

Ⅳ　まとめ

(1)　熊野遺跡108次調査

熊野遺跡は、現在までに169地点において発掘調査が実施されてきた。131次調査における１号・２号住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、遺跡の成立は７世紀第３四半期と考えられる。さらに、１次調査で検出された７間×３間の掘立柱建物跡をはじめとする大規模建物群等の存在から、初期評家の性格が与えられている。

この131次調査区の南東約80mには、瑪瑙原石を出土した連結住居が存在する。その50m先には、７世紀後半～末葉の土器を多量に出土した47次調査２号住居跡がある。土器の量・器種ともに豊富で、盤・脚付盤・円面硯が多いことから、饗宴や行政実務を想定されている。

そして、ここから南西80mには、７世紀後半の連房式鍛冶工房（31次調査）や、これに関連すると考えられる廃滓場（155次調査）など、鍛冶関連遺構群が存在する。

本報告の108次調査区はこの西南西40mに位置する。１号住居跡から多量の土器類が出土したが、床面上から覆土上層まで堆積しており、住居廃絶後に投棄された様子が看取される。時期は７世紀第４四半期と想定される。

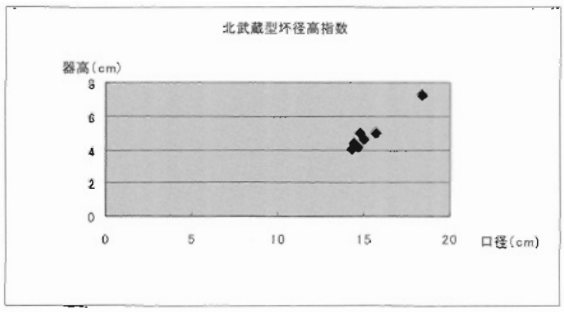
47次調査２号住居跡と時期が並行すると考えられるが、器種組成は47次ほど多様ではない。しかし、土師器坏の法量をみると、暗文坏において重椀的分化が顕著である(註１)。131次出土土師器が新旧の様相が混在していたのに対し、当遺物は金属製容器の模倣という新しい要素が完全に受容された次の段階であるといえるであろう。

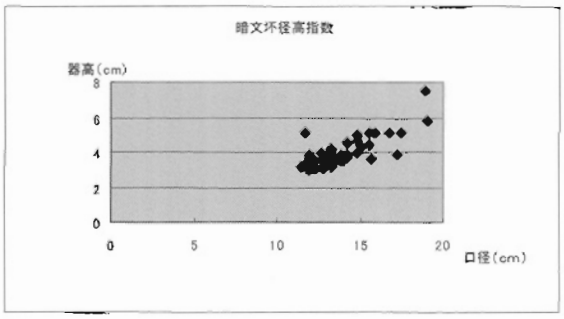
なお、本調査区の南に目を転じると、掘立柱建物跡や竪穴住居跡が重複する埼埋文調査Ｄ区が展開する。なかでも「弓成」や「万」の墨書土器を出土した竪穴住居跡が本調査区南方25mに存在することは、注目される。

大規模建物群の周辺は、周溝を伴う井戸跡や特殊土坑、竪穴住居跡が並存している。出土遺物には、脚付盤や畿内産土師器の出土が多く見られる。

周囲は「神主内」墨書土器を出土した43次調査地点や、連房式鍛冶工房を検出した31次調査地点、陶製仏殿を出土した24次調査地点などがあり、注目すべき遺構・遺物が多いエリアである。

註１　竹野谷俊夫氏のご教示による。





(2)　西谷遺跡

西谷遺跡は、周知のとおり縄文時代草創期の遺跡として著名である。しかしながら今回発見された遺構は、９世紀中葉～後半の竪穴住居跡２軒であった。このうち１号住居跡は、小鍛冶炉と想定される土坑をもち、鉄製品も数点出土している。

西谷遺跡における発掘調査は、当調査が初回であり、遺跡の全容は不詳である。本遺跡に近接して水久保遺跡や柳原遺跡など縄文時代草創期～中期の遺跡も存在するが、やはり未調査のため詳細は不明である。更に本遺跡から西方約300mの藤治川対岸に位置する山崎山南東斜面には、石原山瓦窯跡が存在する。未調査の遺跡ではあるが、単弁八葉蓮華文軒丸瓦及び単弁四葉蓮華文軒丸瓦が採集されており、９世紀後半から10世紀の時期が想定されている。小鍛冶炉をもつ１号住居跡と時期が近似するが、両者の関係は不明である。

該期の遺構が検出された初のケースであり、今後の調査例の増加が待たれるところである。

引用参考文献

○鳥羽政之・竹野谷俊夫2001「熊野遺跡Ⅰ」岡部町遺跡調査会

○鳥羽政之他2004「熊野遺跡Ⅲ」岡部町教育委員会

○赤熊浩一2000「熊野／新田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団

○富田和夫2002「熊野遺跡（Ａ・Ｃ・Ｄ区）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第35図　熊野遺跡108次調査区周辺遺構図

V　高畑遺跡(第１次)

例　言

1．本章は、高畑遺跡（１次）の発掘調査報告である。
2．発掘調査は古池晋禄・永井智教が担当した。
3．本編の執筆及び編集は永井智教が担当し、挿図と図版の作成は中村岳彦（東海大学卒業生）と、栗原慶多（立正大学学生）が行った。
4．現地調査にあたっては、野村満・小室翔平・神本沙織（以上大正大学学生）、栗原慶多・平野哲也・猪股恵利（以上立正大学学生）の協力を得た。
5．本発掘調査で得られた資料は、深谷市教育委員会が保管している。
6．調査報告の過程で、以下の方々から御教示と御協力を頂いた。記して感謝の意を表します。
長谷川福次・村松篤・桃薗正志・金井豊・大栄商事・技研測量設計株式会社　（敬称略）

凡　例

1．遺構図関係は、調査区全測図が縮尺１／300、その他遺構図縮尺は各挿図中に明記してある。
2．遺構断面図中の濃網がけは、当該遺構構築時のベース、すなわち上面が発掘を停止した面であることを示しており、いわゆる地山層を示すものではない。
3．遺物図は、全て縮尺１／３である。

発掘調査の組織

調査主体	深谷市教育委員会	教育長	猪野　幸男
		教育次長	古川　国康
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課長	澤出　晃越
		主幹兼課長補佐	武井　茂
		課長補佐	大谷　住雄
		文化財保護係長	古池　晋禄
		主査	高村　敏則（18年10月～）
		主任	畦元　直大
		主任	荻野　直美
		主任	知久　裕昭
		臨時職員	吉野　智貴（18年４月～18年12月）
		臨時職員	永井　智教（～18年12月）

目　次

例言　凡例　目次
Ⅰ．発掘調査に至る経緯と調査経過……39
Ⅱ．高畑遺跡の地理・歴史的環境……41
Ⅲ．発掘調査の成果……43
Ⅳ．まとめ……48

挿図目次

第36図　調査地点と周辺の遺跡……42
第37図　調査地点の位置……44
第38図　高畑遺跡全測図……45
第39図　基本層序……45
第40図　Ａ区遺構平面図……46
第41図　Ａ区遺構断面図……47
第42図　Ｂ区遺構図……47
第43図　出土遺物……48

Ⅰ．発掘調査に至る経緯と調査経過

1．発掘調査に至る経緯

平成18年５月23日、市内西大沼地内で実施中の発掘調査現場に、市内起会の工事現場から土器が発見されたとの情報がもたらされた。おりしも調査終了まで秒読み段階に突入し多忙な状況下ではあったが、同日午後には当該地を実見、遺跡地図との照合によって当該地は周知の包蔵地隣接地、すなわち遺跡外である事を確認した。

工事は小規模土地改良工事で、現状で工事は施工途中であるが掘削箇所は残土に覆われていた為、施工業者に連絡を取り、継続施工時に観察させて欲しい旨を伝え、協力を仰いだ。

およそ１週間後の６月２日、工事業者から連絡があり、工事を再開するので立ち会って欲しいとの話、現地へ急行した。対象地の一画が重機で掘削されると、現地表下40cm 程度から溝状プランが確認され、土師器細片の散布も見受けられる。遺構である可能性が高いことから、工事業者の協力のもと当該地点を掘り広げ、埋蔵文化財の所在を確定するに至った。

以上のような経緯をもって、当該地は緊急発掘として本調査を実施し記録保存との判断を下した。調査は包蔵地外での不時発見であり、個人農地の土地改良であることから、補助事業として行うものとし、速やかに発掘届の提出等の事務手続きを行い、発掘調査を開始した。

2．調査経過

上記経緯を受けて、当該地は包蔵地の増補変更手続きを行い高畑遺跡（60－004遺跡）の一部となった。正式な発掘調査は初であることから、本事業は高畑遺跡（第１次）とした。以下、発掘調査の経緯を日誌抄に示す。

６月12日　溝跡（ＳＤ－１と呼称）を掘り下げる。深くしっかりした遺構である。

６月13日　調査区東壁の整形と確認面の精査を行う。調査区の約６割程度が攪乱されていることも明らかとなった。また、溝跡とそれにかかる攪乱土の掘削も行う。攪乱は思いのほか深く、その下から遺構が確認される可能性は非常に低いことが判明した。また調査区東壁の分層を行ったところ、調査区南寄りから変換点をもって南側へ旧地形が下がることも判明。暗黄褐色のシルトと細砂層が互層となる覆土で、上層に鬼高式と思われる土師器小片を含むことから、概ね古代以前と考えられようか。

６月14日　ＳＤ－２の掘り下げを行う。予想に反して浅く、複数条の溝が重複した状況を示し、底面には鉄分の沈着が顕著。出土遺物は土師器小破片が少量。

６月15日　ＳＤ－２・３・４の掘り下げを行う。旧地形が下がる箇所に堆積した黒色土中より土師器坏が出土。７世紀末～８世紀初頭の時期が与えられ、出土層位の特徴も勘案すると、周辺環境が安定した時期を示すと考えられる。なおＢ区における旧地形の勾配方向は、溝跡と同様であることが判明。

６月16日　雨天の為、現地作業は中止し、出土遺物の整理等を行う。

６月20日　作業員と学生の計３名で、Ｂ区の精査及び浅い溝状窪地の掘り下げ。窪地は黒褐色土によって埋没しており、古代の土師器小破片を少量含んでいる（15日出土の土師器坏は同層位中からの出土）。窪地の底面は細砂および暗黄褐色のシルトで、旧流路起源の窪地を水が流れたものと考えられる。

６月21日　Ａ区攪乱西に残されたＳＤ－１と、Ｂ区の窪地を掘り下げる。Ａ区のＳＤ－１は浅く広い落ち込みが東側に付帯しており、全く別の遺構とみるか、あるいは同一の遺構かは現状では不明。またこの落ち込み内には土壙が１カ所あり、ＳＫ－１と命名して半裁で掘り下げ。確認面からは１メートル以上あって深いが、土師器の細片が僅かに出土する以外は明確な遺物は無い。Ｂ区の窪地は、下層の細砂層をサブトレンチで抜いたところ、砂直下から平安時代の須恵器坏破片が出土。そのた

め砂層を全体的に除去し始めるが、土師器細片以外に出土遺物は無い。

6月22日　A区攪乱西では、SD－1西の落ち込み南側からSD－3の延長部を確認。落ち込み覆土がSD－3覆土上に乗ることから、新旧関係は明瞭である。

6月23日　学生2名で、SD－2とSK－1の土層断面図作成を行う。

6月26日　先日の雨により現場が水没し、崩壊箇所も多い。一日排水作業に追われる。SD－2のベルト除去と、SX－1・2の掘り下げ。　SXは不定形な形状を示し、連続する土壙状を呈するが、鬼高期の土師器細片以外は出土しない。また本日は遺構測量も行われた。

6月27日　昨夜の雨により冠水しており、適宜排水作業を行う。午前中はSD－2～4とSX－1・2の清掃と写真撮影。午後からはSD－1西側部の崩落土の除去と、SK－1の残り半分を掘り下げる。

6月28日　SD－1西側周辺と北側の清掃・撮影。調査区壁にかかる土層断面図の作成。

6月29日　土層断面図の作成を行い、その後は機材の片付けを行う。

Ⅱ．高畑遺跡の地理・歴史的環境

1．地理的環境

高畑遺跡は、深谷市北部の大字高畑の集落を中心に、起会・内ヶ島地内に跨る広大な遺跡で、東西約800m、南北約400mの範囲で把握されている。遺跡内は大半が畑で、「高畑」の地名が示す如く周囲から一段高い島状の微高地の様相を呈する。

高畑遺跡とその周辺は、地理学的には利根川とその支流が氾濫を繰り返す氾濫原で、俗に妻沼低地と呼ばれる地域である。今日の妻沼低地の景観は、広大な水田の広がる正に低地と言うに相応しいものであるが、実のところこれは、土地改良事業による水田化や、地場産業である煉瓦や瓦に供する粘土採取の累積に過ぎない。近年の発掘調査からは、微高地とそれを分断する河川起源の低地帯が反復する、低地としては起伏に富んだ地形と復元される。

こうした状況から、島状をなす高畑は、本来の妻沼低地の姿を今に残しているものと言えよう。周辺の地名に内ヶ島・矢島・血洗島など、島を付すものが多い点も興味深い。氾濫時には微高地が島状に孤立する様子が地名に反映されたと見るべきであろう。

2．歴史的環境

高畑遺跡周辺は、市内でも最も濃密な遺跡分布の認められる地域である。これらの遺跡は縄文後期に遡る場合もあるが、大半の遺跡で確認されるのは古墳時代、特に後期の集落遺跡であり、該期が妻沼低地開発のエポックであったことは想像に難くない。

当地域における遺跡については、既刊の報告書において再三にわたり概観されてきたところである。従ってここでは、今回の発掘調査で検出された遺構・遺物と同時代、古墳～中世に至る遺跡について簡単に触れ、高畑遺跡理解への一助としたい。

古墳時代前期の代表的な集落遺跡としては、矢島南遺跡・下手計西浦遺跡・宮ヶ谷戸遺跡がある。該期は遺跡数そのものは弥生時代に比べて増加するとは言え、さして多いとは言えない。また、これらの遺跡は、いわゆる「上野型Ｓ字甕」を主体とする土器組成をもつという特徴があり、利根川を隔てた群馬県地域との関わりが強い地域と位置づけられる。墳墓としては東川端遺跡があり、東海系のパレススタイルの壺を伴う小規模な方形周溝墓群である。

古墳時代中期は、前期からの継続と後期への移行という過渡的な時期で、カマドの導入は該期の後半である。代表的な集落遺跡として戸森前遺跡や柳町遺跡があり、前者は前期からの継続、後者は後期へと発展する集落遺跡である。該期の墳墓としては戸森松原遺跡があり、円形と方形の墳墓が混在する、本地域における群集墳の初源的様相を窺うことができる。

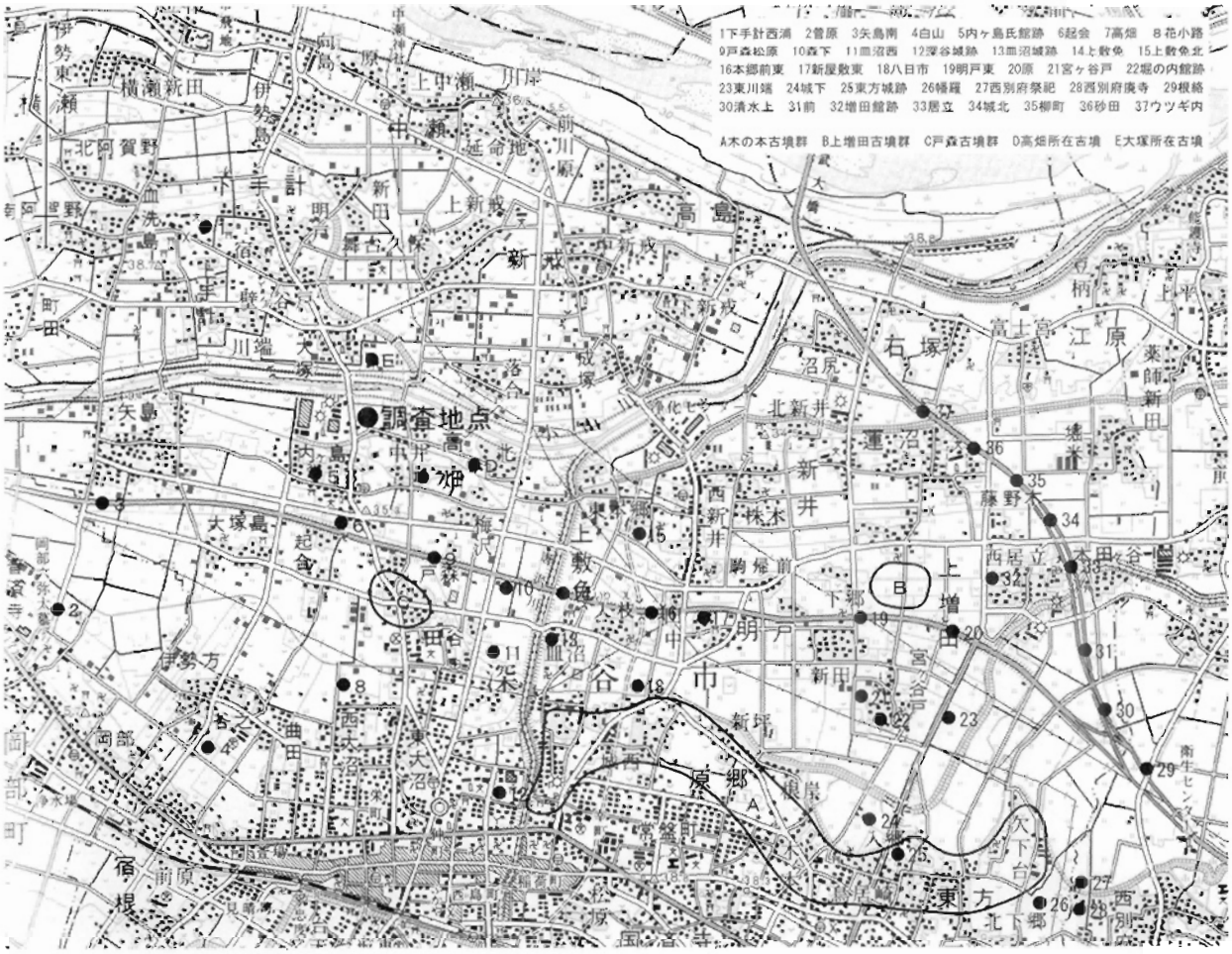
古墳時代後期になると、遺跡数は爆発的に増加する。代表的な集落遺跡としては城北遺跡・居立遺跡・本郷前東遺跡・新屋敷東遺跡・上敷免遺跡・八日市遺跡など枚挙に暇が無い状態で、集落内における住居跡の重複が激しくなる特徴がある。これは単に人口の増加もあろうが、大家族から核家族というような家族構成の変化が遺跡に露見したものとも考えられ、本地域の社会構造に革命的な変化が生じた時期でもある。墳墓としては、本地域東端に位置する前方後円墳の横塚山古墳や、南方に控える櫛挽台地北縁に累々と築かれた木の本古墳群、低地内の上増田古墳群、戸森や高畑・上敷免地内に点在する無名古墳があり、住居数に対応してその数はやはり多い。しかしながら現状で横塚山古墳以外は小規模な円墳で、本地域の東方に一大勢力圏を形成する埼玉政権の傘下となる地域なのかも知れない。流域的には上流になる児玉地域や、利根川を挟んだ上野地域と拮抗するような地域として位置づけることも可能である。重複の激しい住居群から推定される核家族化と世帯数の増加は、古墳に垣間見られる様々な規制と連動し、有力者の発生が抑制される仕組みの存在を考えておきたい。

奈良時代には、本地域の大半は幡羅郡となる。幡羅郡の郡家は櫛挽台地の突端に位置する幡羅遺跡がほぼ確実で、正倉は西の榛沢郡家と福川を再掘削した運河によって結ばれていた。集落遺跡としては宮ヶ谷戸遺跡や東川端遺跡があり、前時期までに見られた無節操なまでの集落の拡大は終焉し、それま

であまり住居が造られなかった場所に展開する。また、掘立柱建物を含み計画性が高い点も特徴的で、その占地も含め条里水田の施工に伴い集落位置が移動する現象と考えられ、律令の強い規制を窺わせる時期でもある。

平安時代になると、集落遺跡は増加する傾向を見せる。代表的な集落遺跡としては、宮ヶ谷戸遺跡・皿沼西遺跡などがあり、花小路遺跡では居宅的様相を示す遺構群も確認されている。前時期からの条里水田の施工は該期に活発化し、律令の規制が緩み始めると共に私的財産を蓄えた一族が発生する余地が生じたのであろう。森下遺跡における条里型地割の反復は、開発に躍起となる彼らの姿を彷彿とさせるものがある。

中世は調査例が少ない為に不明な点が多いが、点在する方形館の存在からは、平安時代の後半に私的財産を蓄えた一族が、武士へと成長する過程が推定される。遺跡数の少なさも、古墳後期とは対極的に大家族化が促進された結果であろう。耕作地の開発には、既存の条里型地割を引き継ぐ場合と、新たな耕作地を求め積極的に水路を開鑿する場合があり、原遺跡に代表される溝の遺跡によって裏付けられる。高畑遺跡もまた、こうした中世的な開発行為を示す例として評価できよう。



第36図　調査地点と周辺の遺跡（S=1/50000）

Ⅲ．発掘調査の成果

１．調査の概要

当該地は工事中の不時発見である為、既に破壊された部分もあり、結果的には遺構の残存する可能性が高い範囲を中心にＡ区・Ｂ区の２地点の調査区を設定した。調査面積は390㎡である。

２．検出された遺構

調査によって検出された遺構は、溝状遺構（略号ＳＤ）５条・土壙（略号ＳＫ）１基・性格不明遺構（略号ＳＸ）２箇所と河川跡１条である。以下、種別ごとに個々の遺構の所見を述べる。

ａ．溝状遺構（ＳＤ）

ＳＤ－１　Ａ区北半に３条並行する溝のうち西端の遺構。幅は確認面で2.3m、深さ１ｍをはかり、断面形態はＶ字に近い逆台形を呈する。中程に工具痕を残すテラス状の段を持ち、土層断面の観察からは埋没過程で最低２回以上再掘削した結果と考えられる。また、調査区西壁付近では、面的に掘れていない為に不明確だが東側に広いテラスをもつらしく、ＳＤ－３とＳＫ－１の上半を破壊している。本遺構からの出土遺物としては、混入の土師器破片が主体であるが、覆土に浅間Ｂと推定されるパミスが混入しており、中世に時期比定されよう。底面に細砂が互層をなしており、水流の痕跡と判断される。

ＳＤ－２　Ａ区北半に３条並行する溝のうち東端の遺構。幅は確認面で約2.8m、深さは最大0.3m、浅く皿状を呈し、複数の溝が重複した様相を示す。土師器小破片以外に角閃石安山岩片も出土しており、これを石造物の破片と見るならば本遺構も中世である可能性が高い。底面には部分的に細砂が堆積しており、水流があったことを窺わせる。

ＳＤ－３　Ａ区の中央北寄りを東西に走る溝。上端幅1.6m、深さは0.7m、断面は逆台形を呈する。他の遺構より判別し難い覆土で、上面に黒色土が堆積し、鬼高式の土師器破片がやや多く出土している点からは、古墳～古代の時期である可能性が高い。底面には砂の堆積も無く、水路というよりは区画溝のような性格が推定される。

ＳＤ－４　Ａ区北半に３条並行する溝のうち中央の遺構。幅は確認面で約0.6m、深さは最大0.3mで、北側調査区壁での断面観察では、東側のＳＤ－２と一体をなしていた可能性が高い。土師器片以外の出土遺物は無いが、走軸から中世と考えられよう。

ＳＤ－５　Ｂ区で確認され、出土遺物は無い。走軸からＳＤ－１に近い時期が想定される。

ｂ．土壙（ＳＫ）

ＳＫ－１　Ａ区西側調査区壁近くに位置し、上半をＳＤ－１のテラス状部分に削られている。出土遺物は土師器の小破片のみだが、切り合い関係からは中世ごろと推定される。

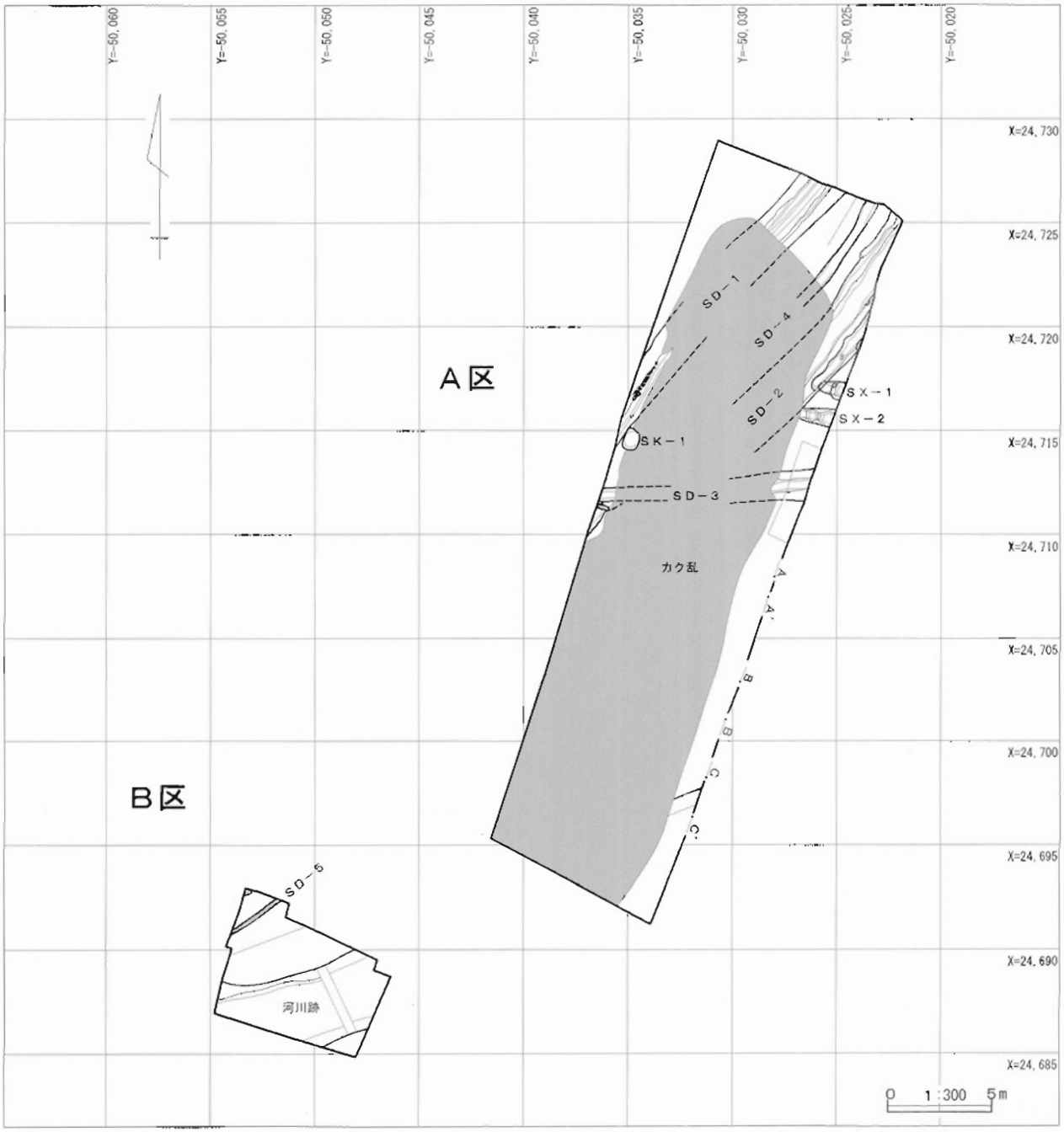
ｃ．性格不明遺構（ＳＸ）

調査区東壁にかかるＳＸ－１・２は、互いに形態が酷似し、隣り合って位置する点からも同じ性格の遺構と考えられる。具体的には溝持ちを有する掘立柱建物の柱穴と考えているが、積極的な根拠は乏しい。覆土や出土遺物からは、ＳＤ－３と同時期と考えられる。

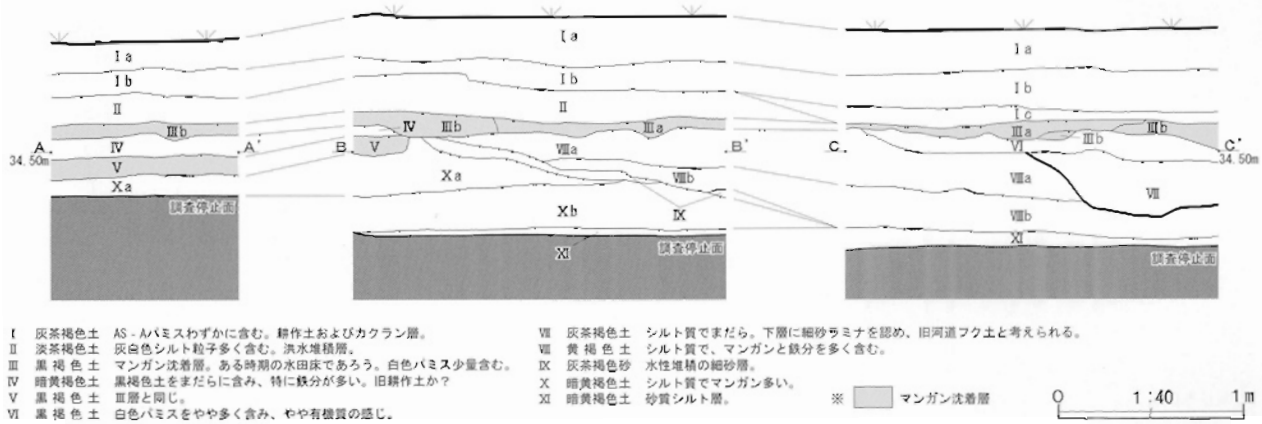
ｄ．河川跡

Ｂ区の大半を占める遺構で、Ａ区南端の基本層序Ｃで断面確認した落ち込みと同一の遺構と考えられる。浅い皿状の断面形態で、底面は砂層、覆土は黒褐色土である。底面から平安時代の須恵器坏、覆土中には奈良時代の土師器坏の大型破片等が流れ込んでいた。

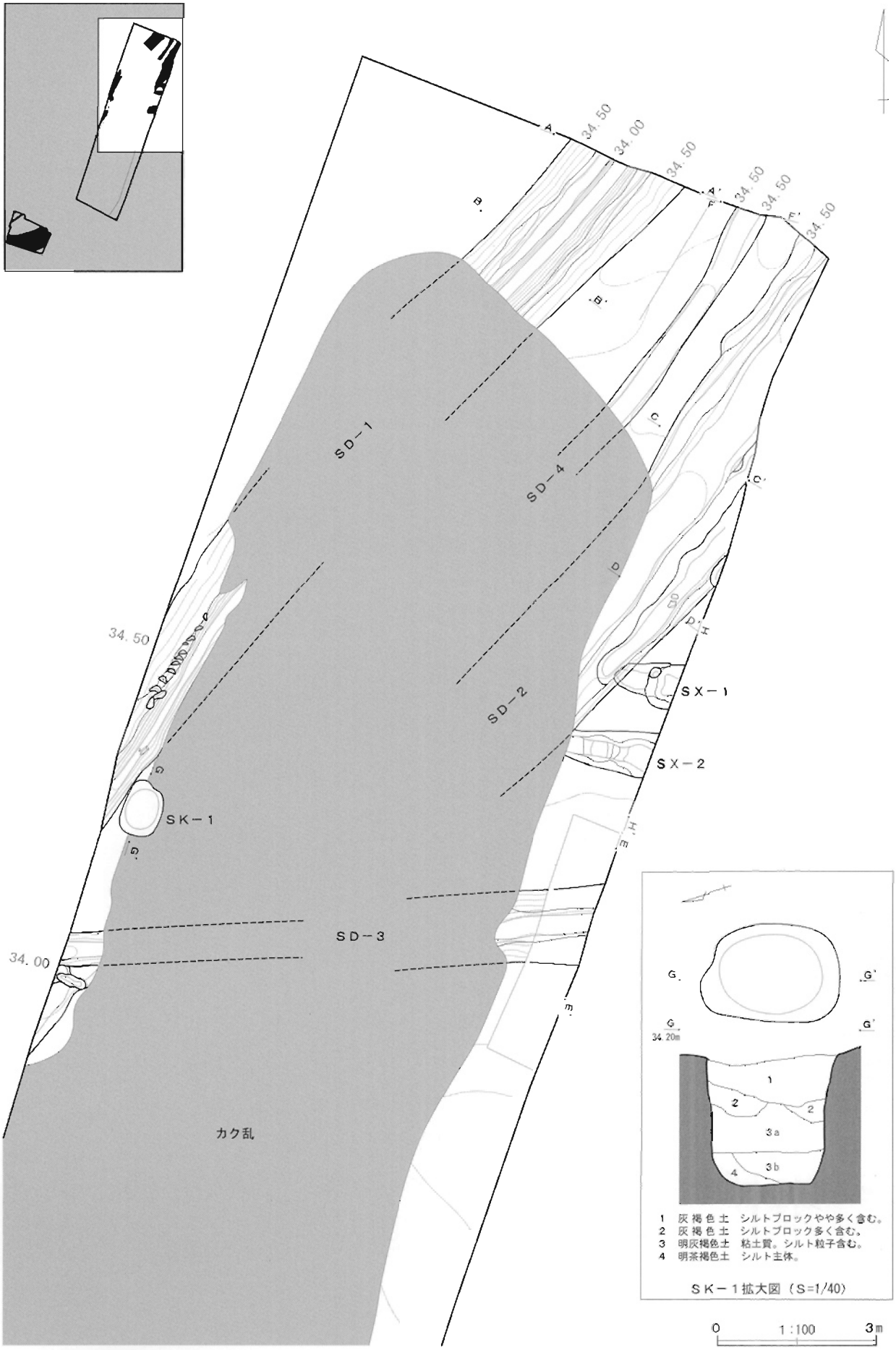
第37図　調査地点の位置



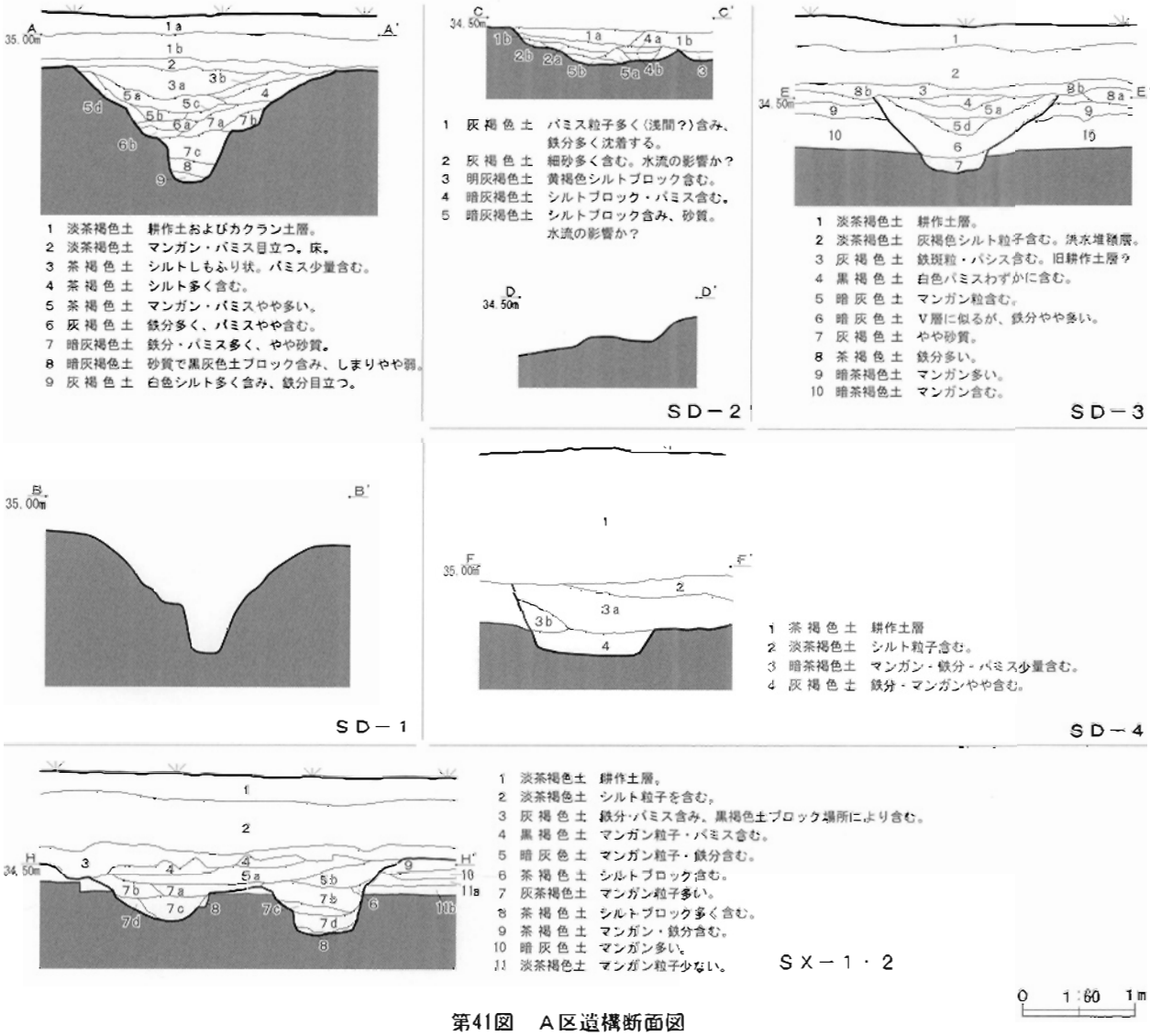
第38図　高畑遺跡全測図



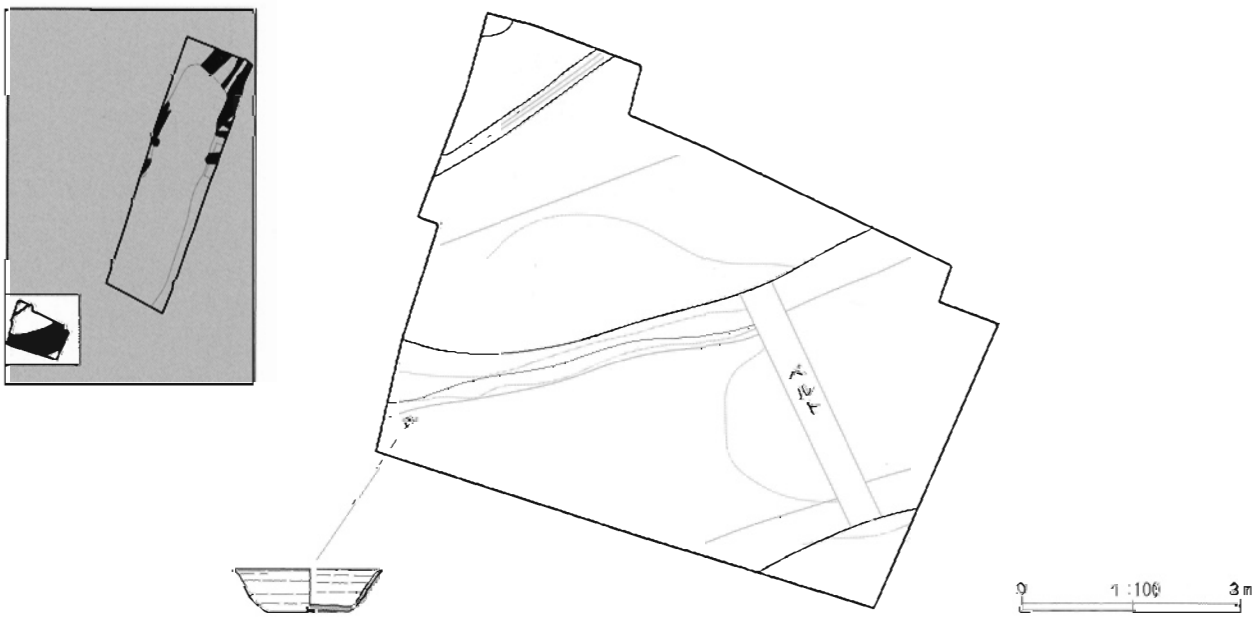
第39図　基本層序



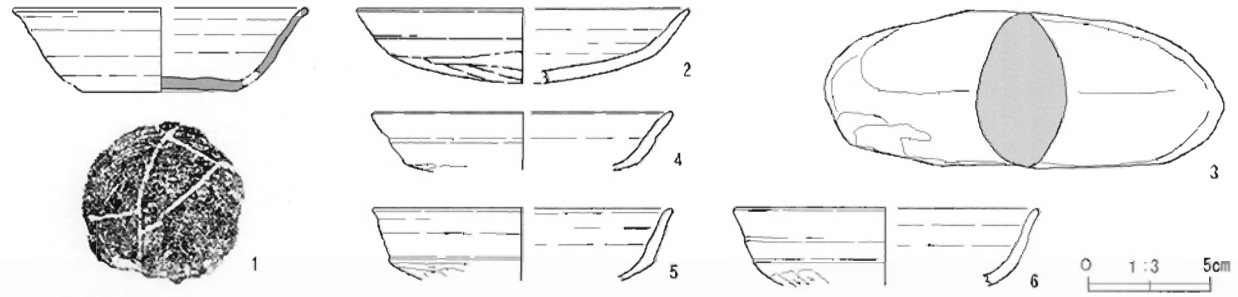
第40図　A区遺構平面図



第41図　A区遺構断面図



第42図　B区遺構図



番号	遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1	B区	須恵器	坏	(122)		(35)	灰白色	普	普		風化激しい
2	B区黒色土	土師器	坏	(137)		(31)	橙褐色	やや粗	普	50	風化激しい
3	B区黒色土	石製品		長165	短65						約600g
4	遺構外	土師器	坏	(124)		〈24〉	赤褐色	やや粗	普	破片	
5	遺構外	土師器	坏	(124)		〈30〉	赤褐色	普	普	破片	
6	遺構外	土師器	坏	(126)		〈32〉	赤褐色	やや粗	普	破片	

第43図　出土遺物

3．出土遺物

調査によって出土した遺物は、大半が鬼高式の土師器小破片であった。ここでは河川跡から出土した２点の土器と１点の石器、表土から出土した土器３点を図示した。詳細な観察は表に譲るとして、河川跡から出土した土器について、以下簡単に補足しておきたい。

第８図１の須恵器坏は末野産で、底部の処理を拠り所に９世紀前半頃と推定、２は土師器坏で、模倣坏の末裔となる器形から、８世紀初頭の年代を与えておきたい。これらは微弱な資料ではあるものの、これまで調査事例のほとんど無かった当地域においては、周辺に該期の集落の存在を推定しうる根拠として重要である。

Ⅳ．まとめ

今回の発掘調査は、遺跡範囲外での不時発見を端緒としたものであったが、遺跡範囲の増補変更を経て高畑遺跡初の本格的な調査となった。結果として古代～中世の灌漑関連遺構と、古墳時代～平安時代・中世に及ぶ遺物が確認された。微高地に営まれた集落遺跡と推定される高畑遺跡の、いわば周縁部分の一画を調査したことになるが、灌漑用水路と思われる溝中心の遺構様相は、妻沼低地の微高地縁辺における土地利用や、耕地開発の一端を示すものとして意義のある成果を得たと考えている。

ここで若干の補足をしておきたい。Ⅲ章では触れられなかったが、調査区の基本層序には洪水堆積層を挟み、水田床と推定されるマンガン凝集層を２面確認している。特に下位の水田床推定層は、ＳＤ－１・２・４と同時期の可能性が高く、だとすれば中世の水田跡と判断できる［第４図参照］。古墳時代に始まるとされる妻沼低地内の河川埋没は、地形を平坦化し、中世には出水時の被害も深刻となっていたと推定される。今回確認した洪水に埋もれた中世の水田跡には、度重なる水害にも挫けず水田を造り続けた人々のたくましさが垣間見れる。

また、本報告を作成している今現在、高畑遺跡は第２次調査も終了し、開発に先立つ確認調査も１箇所実施された。広大な遺跡範囲に対し極めて僅かな面積であるが、古墳時代後期における大規模集落の片鱗が見え始めている。高畑遺跡とその周辺の様相が明らかとなる日はまだ先のことだが、ある程度の情報の蓄積を待って検討する機会を持てればと考えている。

最後に、埋蔵文化財の保護に深い理解を示され、調査への協力を惜しまれなかった地権者の金井豊氏をはじめとする、関係各位の方々に感謝の意を表したい。なお本報告に際して、多くの既刊報告書を参考としているが、紙面の都合から参考文献は割愛した。お詫び申し上げると共に、筆者の能力に帰する問題としてご寛容頂きたい。

（永井）

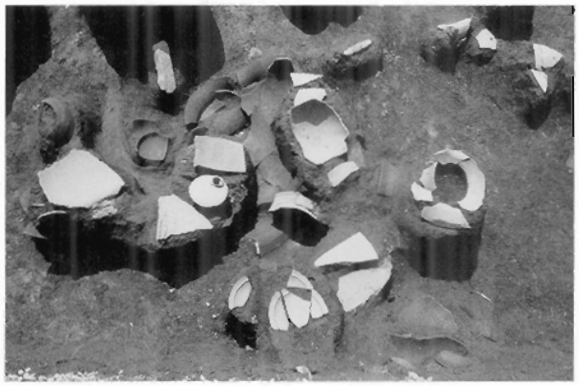
写　真　図　版

熊野遺跡108次検出遺構

全景（東から）

1 号住居跡（奥は 2 号住居跡）

1 号住居跡遺物出土状況(1)

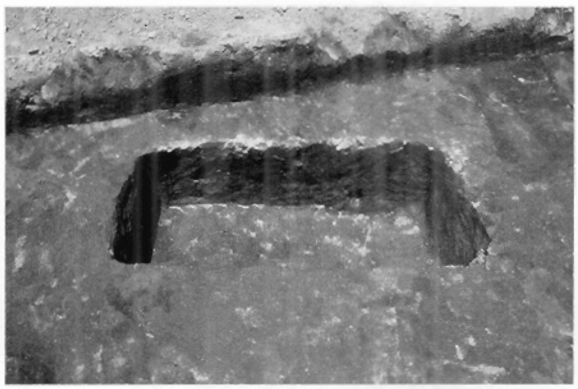


1 号住居跡遺物出土状況(2)

1 号住居跡カマド

1 号住居跡カマド遺物出土状況

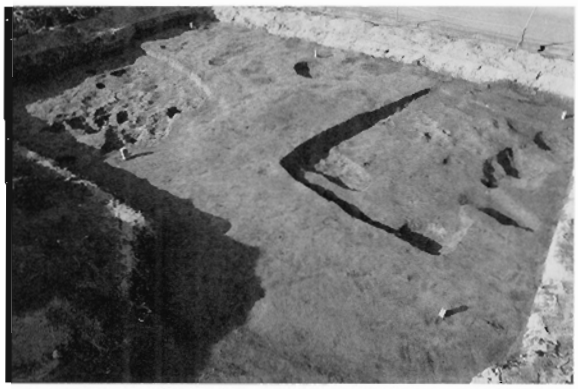
2 号住居跡



1 号土坑

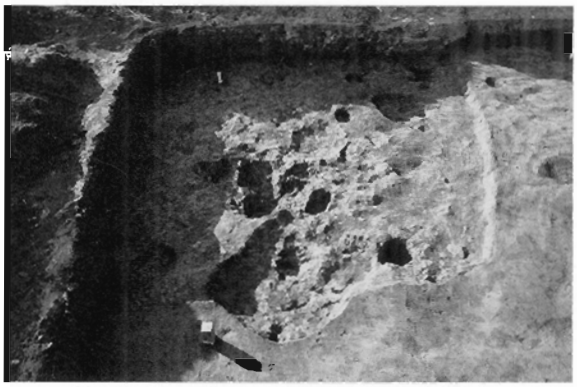
図版２

西谷遺跡検出遺構

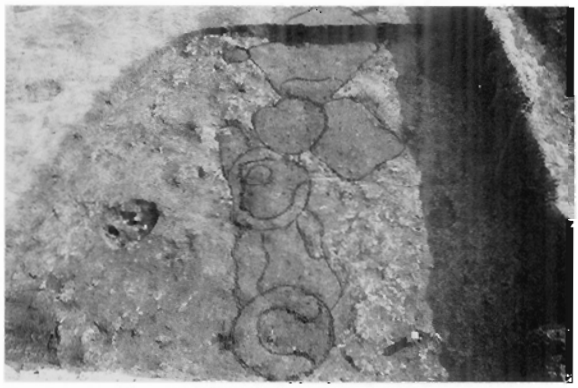


全景（南から）

全景（西から）



１号住居跡



１号住居跡土坑検出状況

１号住居跡土坑断面

２号住居跡

２号住居跡土坑検出状況

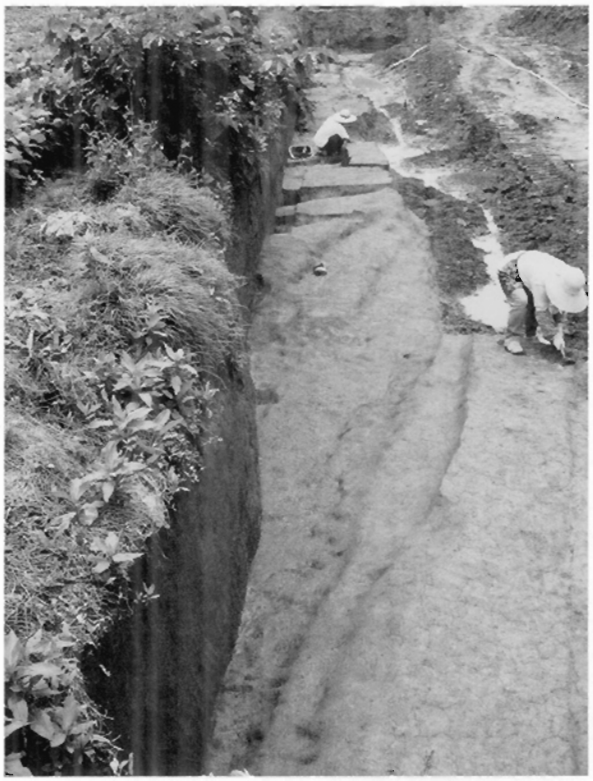
２号住居跡カマド

高畑遺跡１次検出遺構(1)

１号溝（南西から）

１号溝底面（南西から）

２号溝（南西から）



２号溝（北から）

図版４

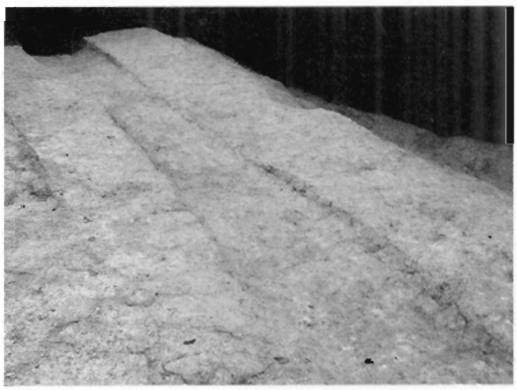
高畑遺跡１次検出遺構(2)

基本層序（Ａ区・Ｂ－Ｂ’）

遺構確認状況（２号溝・西から）

１号溝南半の工具痕

３号溝（西から）



４号溝（南西から）

１号土坑（東から）

ＳＸ-１・２（北から）

降雨で水没した調査区

熊野遺跡108次出土遺物(1)

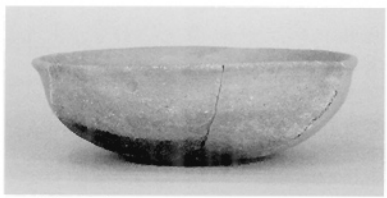
1号住居跡No. 1

1号住居跡No. 3

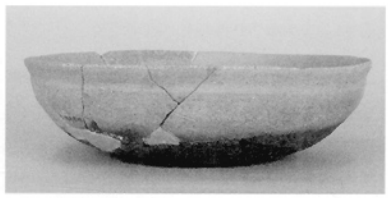
1号住居跡No. 6

1号住居跡No. 9

1号住居跡No.10

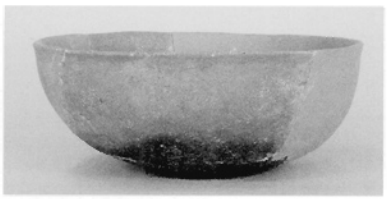

1号住居跡No.16

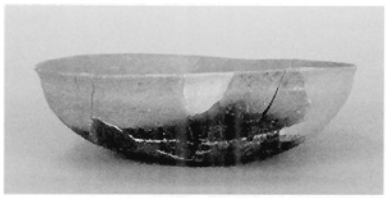
1号住居跡No.17


1号住居跡No.20

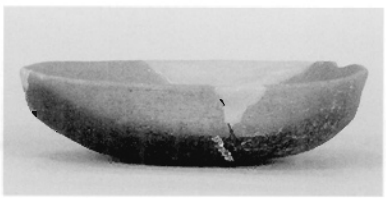
1号住居跡No.21

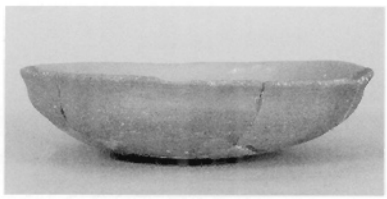
1号住居跡No.22


1号住居跡No.23

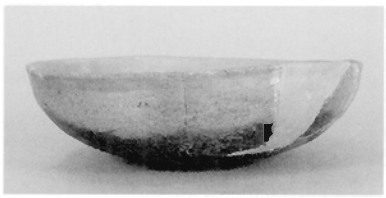

1号住居跡No.24

1号住居跡No.26


1号住居跡No.31


1号住居跡No.37

1号住居跡No.38

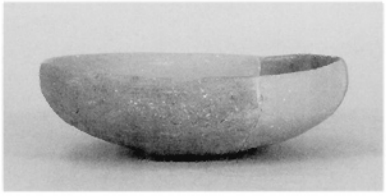

1号住居跡No.40

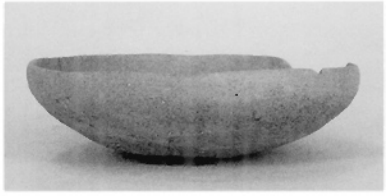
1号住居跡No.45

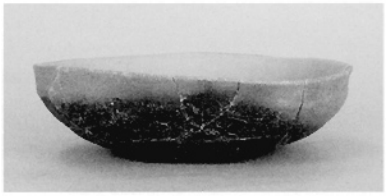
図版６

熊野遺跡108次出土遺物(2)

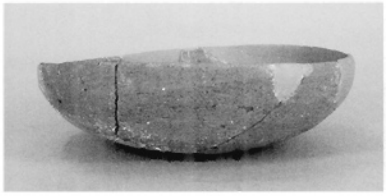
1 号住居跡No.48


1 号住居跡No.51


1 号住居跡No.54


1 号住居跡No.63

1 号住居跡No.64

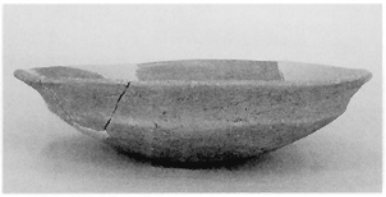

1 号住居跡No.70

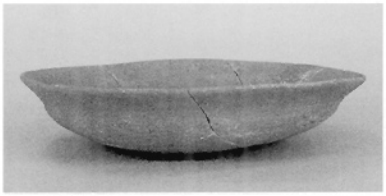
1 号住居跡No.71

1 号住居跡No.74

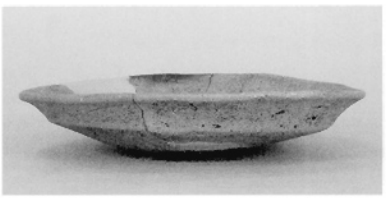
1 号住居跡No.75

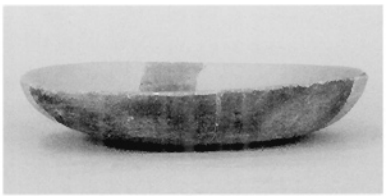
1 号住居跡No.79

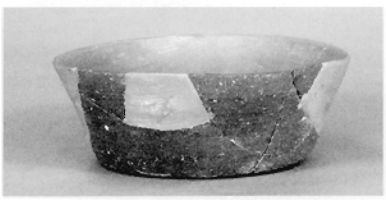

1 号住居跡No.81

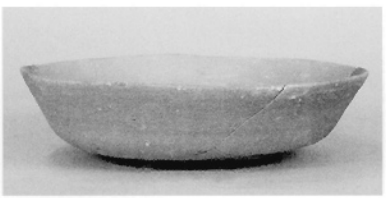

1 号住居跡No.82

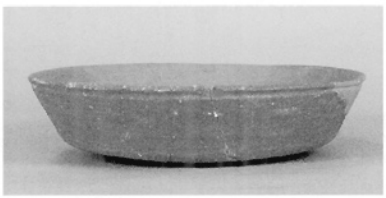
1 号住居跡No.83


1 号住居跡No.84

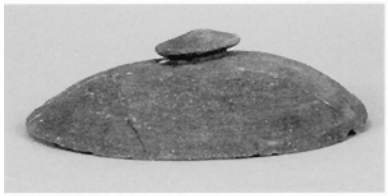

1 号住居跡No.89

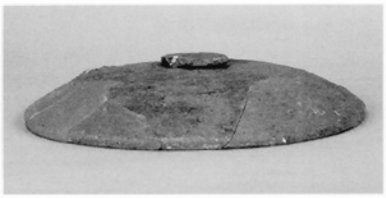

1 号住居跡No.95


1 号住居跡No.109

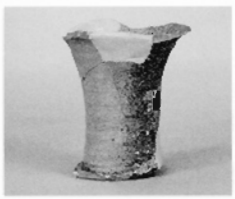

1 号住居跡No.110

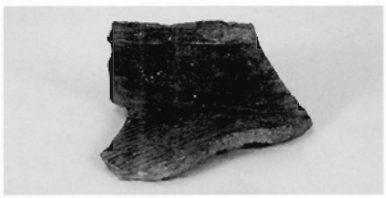
熊野遺跡108次出土遺物(3)


1 号住居跡No.112


1 号住居跡No.117

1 号住居跡No.123


1 号住居跡No.124


1 号住居跡No.127

1 号住居跡No.137

1 号住居跡No.140

1 号住居跡No.141

1 号住居跡No.142

1 号住居跡No.144

1 号住居跡No.145

1 号住居跡No.152

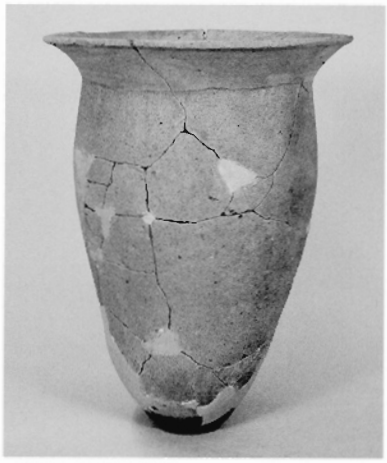
1 号住居跡No.155

1 号住居跡No.157

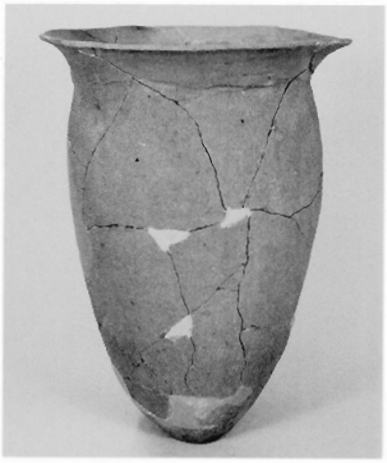
1 号住居跡No.161

図版８

熊野遺跡108次出土遺物(4)



１号住居跡No.158



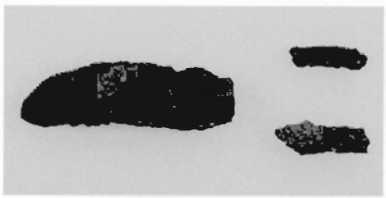
１号住居跡No.159

１号住居跡No.165

１号住居跡No.167

１号住居跡No.168～170

１号住居跡No.171・172



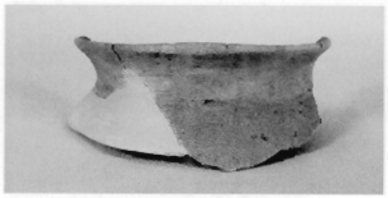
１号住居跡No.174～176

２号住居跡No.３

２号住居跡No.４

２号住居跡No.13

２号住居跡No.16



２号住居跡No.23

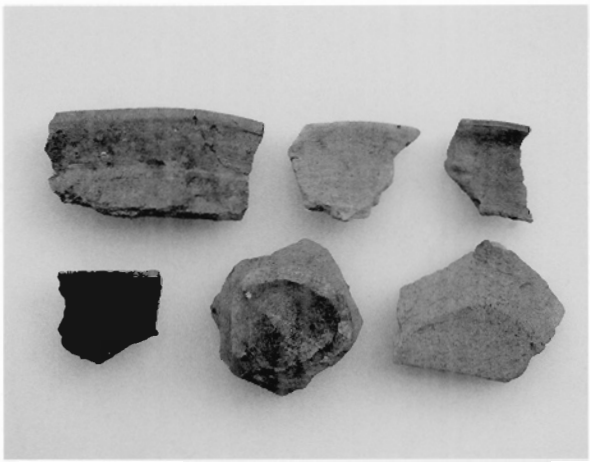
西谷遺跡出土遺物

西谷遺跡１号住居跡須恵器

１号住居跡土師器

１号住居跡縄文土器・石器

２号住居跡須恵器



２号住居跡土師器

報告書抄録

ふりがな	ふかやしないいせき
書　名	深谷市内遺跡XIV
副書名	
シリーズ	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	第85集
編著者名	宮本直樹、竹野谷俊夫
編集機関	深谷市教育委員会
所在地	〒366-0823　埼玉県深谷市本住町17-3番地　　TEL 048-572-9581
発行日	平成19年3月31日

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
熊野遺跡（くまのいせき）（108次調査）	埼玉県深谷市岡（さいたまけんふかやしおか）字前屋敷3011-1（あざえええやしき）	11218	63-17	36° 12′ 39″	139° 14′ 24″	平成9年6月12日から平成9年7月11日まで	348㎡	個人住宅
西谷遺跡（にしやいせき）	埼玉県深谷市針ヶ谷（さいたまけんふかやしはりがや）字柳原186-17（あざやなぎはら）	11218	63-30	36° 11′ 15″	139° 13′ 34″	平成10年11月19日から平成10年11月30日まで	400㎡	個人住宅
高畑遺跡（たかばたけいせき）	埼玉県深谷市起会（さいたまけんふかやしおきあい）字唐言134（あざからげん）	11218	60-04	36° 13′ 05″	139° 16′ 48″	平成18年6月5日から平成18年6月22日まで	500㎡	土地改良

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊野遺跡（くまのいせき）（108次調査）	集落跡 官衙跡	古墳時代 奈良～ 平安時代	竪穴住居跡 溝　跡 土　坑	土師器 須恵器	
西谷遺跡（にしやいせき）	集落跡 官衙跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡 土　坑	土師器 須恵器 鉄製品	
高畑遺跡（たかばたけいせき）	集落跡	古墳時代 ～ 平安時代	溝　跡 土　坑	土師器 須恵器	

深谷市内遺跡XIV

2007年３月31日

編集発行　●深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地３